

蒸気機関車で女の子が
異世界を旅する話

ちびだいず

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

異世界を渡るチケットをひよんな事から入手した篠崎由利。

カードに封じ込められた力を使って、彼女は異世界を渡り歩くことになった！

时空横断蒸気列車「シユマリット」に乗って、彼女は数多の異世界を渡り歩く。

そこで出会うのは勇者か？はたまた正義のヒーローか?!

※こっちは先行公開になります

加筆したのはこっち

<https://ncode.syosetu.com/n8155fv/>

1
2 話

1
1 話

1
0 話

9
話

8
話

7
話

6
話

5
話

4
話

3
話

2
話

1
話

目次

141 125 109 97 87 66 55 47 37 26 12 1

1
7 話

1
6 話

1
5 話

1
4 話

1
3 話

206 194 181 169 157

1話

そのカードを拾ったのは、運が悪かったとしか言いようがなかった。

大学からの帰り道に、花壇の縁の上に置いてあったのだけでも、何故か私の目を引いた。

「由利、どうしたのそれ？」

「んー、なんか目についちやって」

「ふーん。トレーディングカードかしら？ 男の子が好きそうなデザインよね」

「確かに」

絵柄は、背面がタロットカードを思わせるような柄だけれど、表面は見たことのない形をしたSLの絵柄が書かれている。

文字は見たことがないので、少なくとも日本語ではなかった。

「それ、どうするの？」

「うーん、誰かが落としたって言うても所詮カードだしなあ……。でも、落とし主が困っていたら困るし一応届けようかとは思っているわ」

「それがいいかもねー」

私は友達の朱莉と一緒に近くの守衛さんのところまで行く。

「すみませーん」

「どうされました？」

初老に入った容姿の守衛さんだ。

別に話したこともないし、よくは見かけますが初対面である。

「このカード、あそこの花壇のところに落ちていたんですけれど……」

「ああ、そうかい。どれ、見せてみなさい」

私がカードを差し出すと、おじさんは丁寧に受け取る。

そして、カードをしばらく見ると、話しかけてきた。

「ふむ、名前が書いてあるね。『篠崎しのさきゆり由利』……。女の子が持つには、偉く男の子が

好きそうなデザインの柄だね」

「え?!」

なんで私の名前が書かれているのだろうか？

心当たりはない。

私にはトレーディングカードを集める趣味はない。どちらかと言うと絵を描くのは趣味ではあるけれども、私の描く絵柄は少女漫画チックなものが殆どである。

「由利、なんで由利の名前が……?」

「うん……」

「ふーん、どうやらお嬢さんの名前みたいだね。ほい、返しておきますよ」

私は守衛さんからカードを受け取る。

確かによく見ると、私の名前が日本語で記載されていた。

「……なにこのホラー。そのカード絶対呪われてるよー！」

「う、うん……。神社に行つた方が良さそうね」

「うんうん、私も付き合うから早めに行こう！」

この後、授業も無かったので私達は神社に向かう事にした。

そうそう、私の自己紹介がまだであった。

私は篠崎由利。どこにでもいる経済学部の大学2年生である。

絵も描くからみんなからは腐女子だと思われがちであるけれども、私はどちらかと言

うと普通のオタクであるといったほうがいい。

主に好きなのは王道系の乙女ゲームであり、異世界ものよりは現代物が好きなほうである。

話題についていくために嗜んで入るけれどもね。

友達にオススメされて悪役令嬢転生ものとかも見て入るけれども、ヒロインが悪役だったたりしてあまり好きでは無かったりする。

容姿はまあ、可愛い系だと思おうし言うメイクや服装をしていることが多いけれどね。

美人だと何でも似合うんだねと皮肉を言われたこともある。胸のサイズはまあ、Cぐらいなので、可愛い服とか色々楽しめてちようどいいサイズなのは気に入っていたりする。大きいサイズに憧れはあるけれども、大きい友達は私に大きいことによる愚痴を延々と聞かせてくる友達がいるので、自分がそうなりたいとは思わなくなっていた。

サイズは14歳で決まるらしいね。

さて、神社に到着したわけであるが早速神主さんに話を聞いてもらい、カードを預かってもらった。

もちろん、目の前でお祓いをしてもらう。

「別に何が憑いているわけでも無さそうですがね」

神主さんは苦笑しながらも引き受けてくれたのは、さすがとしか言いようが無かった。

カードには相変わらず私の名前が書かれたままである。

印字されているので消しようがない。文字の背後の色はまるで羊皮紙のような感じのデザインのため、修正液で消すわけにもいかなかった。

「ごめんねー、付き合っって貰っちゃって」

「いいよいいよ。いつも由利には助けて貰っているしね」
朱莉ちゃんは親友だ。

大学に入ってからできた友達だけでも、気の置けない友人といった感じである。
しかし、この無気味なカードは一体何なのだろうか？

「それにしてもそのカード、何かのチケットみたいよね」

「あー……言われてみれば確かに映画のチケットみたいね」

と言っても材質はプラスチック製なのか硬いけれども。

どちらかと言うとSuicaの方が近い気がする。

「もしくは、この列車に乗るためのチケットだったりして」

「ははは、小説じゃあるまいし」

「だよねー」

そんな感じの話をしながら、私達は神社の帰り道にあった喫茶店でパフェを食べながら、そんな感じの話をしていったのだった。

雑談をしているうちに、カードのことなんかすっかりと忘れて帰り道を歩いていると、聞いたこともないようなメロディが聞こえてきた。まるで、電車の発車音のようなそれが聞こえた私は立ち止まり、周囲を見渡す。

「どうしたの？ 由利ちゃん」

「……なんか変な音が聞こえて」

「……？ 私には聞こえないけれど」

幻聴……にしては嫌にハッキリと聞こえる。

朱莉ちゃんには聞こえないと言うのは俄然不気味さが増す。

「幻聴……にしては私の耳にはハッキリ聞こえるわ」

「え？ 大丈夫？」

「……大丈夫じゃなさそう」

チラツと音が聞こえてきた方向を見ると、鉄道の客車の一部がビルとビルの間に出現していた。

物理的にありえない現象だけれど、あった。

私が唾然として見ていると、流石にそれは朱莉ちゃんにも見えたらしい。

「……え、何あれ？」

「電車の客車の扉、に見えるけれど……」

すると、自動で扉が開き階段がカタカタと展開される。

まるで私たちに乗れと言わんばかりである。

客車の中は内装がハッキリと見ることができ、幻覚ではなさそうである。

何より、朱莉ちゃんにも見えていることが証拠だろう。

「え、何？」

『お待たせいたしました、お客様』

客車の中から執事が出てきた。白髪に白い髭の初老の男性である。体格はガッチリしている感じである。高貴な家に仕える執事と言った印象である。

しかも、言葉は聞いたこともない言葉であるが、意味が伝わってくる。

朱莉ちゃんも同様らしい。

「え、どなたですか？」

『私ですか。私はこの時空横断蒸気列車「シユマリット」の車掌を務めております『ウーヴェ・キールマン』と申します。以後、お見知り置きを』

「は、はあ……」

わけがわからないけれども、丁寧な挨拶に私たちはお辞儀をする。

『この度は当列車のご利用、誠にありがとうございます。お迎えにありがとうございました、お客様』

「へ?!」

『乗車券をお持ちでございますでしょうか?』

乗車券……言われて私はあの不気味なカードを取り出した。

「これ？」

『左様にございます。それが、時空横断蒸気列車「シユマリット」に乗るための乗車券に
い)ございます』

私は朱莉ちゃんと顔を見合わせる。

「いや、これは単に拾っただけで、私ではないんですけれど……」

『乗車券は必要なお客様、または、資質のあるお客様が取得するように生成されます』
「資質のある……?」

『はい。そして、私どもはそのお客様を案内するのが役目となっております』
いつている意味がわからない。

白昼夢でも見ているのだろうか？

『詳細な内容については案内人がご説明いたしますし、「役目」を果たされたお客様には
相応の報酬の提供もいたしております』

次々とウーヴェさんの口から不穏なキーワードが飛び出してくる。

「ど、どうする……?」

「どうするも何もお断りですよ。私は嫌だよ」

『ふむ、困りましたな』

私が拒絶すると、ウーヴェさんが髭を右手で撫でる。

『どちらにしても、その乗車券を持つ資格者は狙われる運命でございます。幸運にもお

お客様はまだ襲われた事が無いようでございますが、お客様は狙われていると言う事を警告させていただきましょう』

「どう言う事？」

『もちろん、お客様に害の及ばないように我々も尽力させていただきますが、万が一の場合もございます。それでは、必要がありましたらそのカードを天にかざしてください。お迎えにあがりましょう』

ウーヴェさんはそういうと、カードケースを私に差し出してきた。

『万が一の際はこちらをお使いください。貴女の身を召喚獣が守ってくれる事でしょう』

「は、はあ……」

『では、またお会いいたしましょう』

ウーヴェさんはそう言うのと、上品な札をして列車内に戻っていった。階段が収納された後扉が閉まり、瞬きした瞬間に扉は消え去っていた。

私は手元に残ったカードケースを見つめる。

「朱莉、どうしようか……？」

「私に聞かれても……」

蓋を開けてみると、私の持っているSLと似たような材質のカードが50枚ほど入っ

ていた。

武器や見たことのない生物の姿が描かれたカードである。絵柄の下部には数値が書き込まれており、有名なので言えば遊戯王なんかを思い起こさせる。

もちろん、文字は読めないけれども数字はアラビア数字に似たものなので、この部分だけはしっかりと読める。

「男の子がすきそうな感じね」

「確かに、かわいいと言うよりはかっこいいって感じね」

「これを使えって言われても、カードゲームでもするのかしら？」

「さあ？ 召喚獣って言っていたし、召喚でもするんじゃないの？」

正直、使い方がわからないものを渡されてもどうしようもないし、そもそもそういう危ない目に合うなんて想像もつかなかった。もちろん、殺人鬼とかそういうのが出てきた場合は別であるが痴漢やそんなものに対して警察以外を召喚する意味がない。

私は仕方がないのでため息をついて鞆にカードケースをしまう。

「……なんか疲れちゃった」

「そうね。なんていうか事実は小説より奇なりと言うけれども、不思議なこともあるものね」

「朱莉ちゃん……楽しんでない？」

「え、だって、面白いじゃん！」

ニコニコ顔の朱莉ちゃんに私はため息をつく。

「最近異世界転生ものを追いかけている私としてはなかなか面白い状況だと思ってるわ」

「じゃあ代わる？」

「代われるの？」

多分無理だろう。

こういうアイテムの特徴は持ち主以外使えないことが鉄板の設定だからだ。

「……わからないわ」

あの不思議な体験からこのカードが本物であることは疑いようがないけれども、使い方すらわからないのだ。どうしようもないだろう。

ただ、私たちを狙う驚異と言うのはすでにすぐそばにまで来ていたのだった。

2話

『キミがユリ・シノザキだね』

朱莉ちゃんと一緒に帰宅している最中に突然、その声をかけられた。

白いフードを被った男が目の前に出てきたのだ。

「え、あ、はい」

『それじゃあ、死んでもらうよ』

突然のことに思考回路が追いつかなかった。

白いフードを被った男がにこやかな笑みを浮かべてそう言うのと、その男が私を剣で切り捨てようとしたからである。

「はっ」

「ちよっ!」

ガキンと音が鳴る。

突然目の前に出現した赤色が、白いフードの男とつばぜり合いをしたのだ。

『やらせるかよ、《白の闇》!』

『《赤の勇者》か……どうやらそっちが先に接触していたみたいだね』

『おうよ！ 間に合ってよかったぜ！ 大丈夫か、お姫様、嬢ちゃん！』

赤い髪の剣士が私を守るように剣を振るう。

「ひえええええ！」

「きゃあああああああ！」

「警察だ！ 警察を呼べ！」

突然始まった剣劇に周囲にいた人たちが驚く。

「由利ちゃん！」

「うん！」

あのウーヴェさんの警告していた危機だろう。そして、赤い髪……コスプレじゃない、炎のように赤い髪の人物は、ウーヴェさんが私を守るために遣わした人物だろう。

『ちよつと下がってな、お姫様。俺が《白の闇》の野郎を片付けてやるからよ！』

『おお、怖い怖い』

私の語彙力では表現できないけれども、すごい戦いが目の前で繰り広げられている。赤い髪の人物が剣を振るうたびに炎が撒かれる。

『おい、何している！ 援護してくれ！』

「援護って……」

『カードを使え！ 召喚術師のお姫様！』

召喚、と言われて、私はカードケースを取り出して、カードを見る。

「もしかして……………」

「朱莉ちゃん……………」

朱莉ちゃんは私からカードを奪い取ると、ザツと目を通す。

そして、朱莉ちゃんは一枚のモンスター…………フェニックスと名前と姿の描かれたカードを手渡してきた。

「これよ、おそらくこのカードは由利が使うと描かれているモンスターが召喚されるのよ」

「え、ちよつと待って、理解が追いつかないんだけど…………」

「良いから！ たぶん、カードを翳して、カードに書かれているモンスターの名前を宣言すれば良いわ」

「…………わ、わかったわ」

私はフェニックスのカードを持って構えると、腕にカードリーダーのようなものが出現し、巻きついた。どうやらこれにカードを差し込めば良さそうだ。

もはや訳がわからないけれども、やるしかなさそうだった。

私はカードリーダーをスライドさせると、カードを差し込めるギミックが出現する。

「…………フェニックス、召喚！」

私はそう宣言すると、カードをリーダーに差し込み、スライドした部分をガシャッと戻した。

《Summonraize!》

《召喚Summons | | 伝説der legend のre 不Ph 死ni 鳥x | |

ドイツ語でカードリーダーから音声が出る。

とても聞き取りやすい音声で、直訳するならば『召喚します、伝説の不死鳥、フェニックスと呼ばれます』だろうか。

音声とともに、私の周囲から円状に炎が吹き出る。

その炎が私の頭上に集まり、鳥の形に収束する。

《我を呼びしは汝か、契約者よ。望みは何だ?》

「あの、私を襲ってきた白い暗殺者を撃退して!」

《承った、では汝に従おう》

ブワツと炎が吹き飛び、フェニックスがその姿を見せた。

それは伝説の不死鳥の姿というよりは、カードに描かれた姿そのままのモンスターの姿だった。

『……既に目覚めていましたか……!』

『へっ！ やるじゃねえかお姫様！ 行くぜ《白い闇》！』

フェニックスと炎の剣士が協力して白い暗殺者と戦う。

フェニックスの炎を剣士が利用して有利に戦っている感じた。

それでも有利になっただけで白い暗殺者は倒せなさそうであった。

私の語彙力では表現するのも難しいけれど、炎の剣士はフェニックスの炎を纏ってパワーアップしながら白い暗殺者と激しい戦闘を繰り返している。激し過ぎて既に空中戦である。

ビルの壁が一部凹んだり破壊されているのも、その残滓である。

『せいやあああああ！』

フェニックスは口から炎を吐き出しながら、白い暗殺者の逃げる先を誘導しているように見える。

炎を纏う炎の剣士には有利な状況だ。

白い暗殺者は身のこなしの軽さと奇妙な動きで全ての攻撃をいなしているのが、あの人の強さの証左でもあるだろう。

「由利ちゃん、これを使って！」

朱莉ちゃんから新たなカードが手渡される。

「えっと、《フェニックスブレイド》？」

「たぶん召喚獣の攻撃だと思う」

「わかったわ。使ってみる」

私はカードリーダーをスライドさせて読み取り口を開くと、カードを挿入する。

《Angriff fraize!》

カードリーダーを閉じると、再び音声が鳴る。

《Phoenix-Klinge》

「まるで、変身アイテムみたいね……」

私が呆れながらそう言うと、フェニックスが再び炎を纏った。

《行くぞ剣士よ》

『まかせな!』

カードの力なのか、炎の剣士の構えにフェニックスが合わせる。

《フェニックスブレイド!》

炎の剣士の斬撃がフェニックスの炎を纏い、炎の鳥になって白い暗殺者を襲う。

『さすがにこれは不利ですね……。良いでしょう、今回はこれで引きましょう。それでは、また』

白い暗殺者はそう言うとマントで自分の姿を覆う。そして、爆炎に紛れて姿を消したのだった。

『チツ、逃げやがったか』

炎の剣士は舌打ちをして剣を腰に収める。

《契約者よ。契約は果たされた》

フェニックスはそう言う姿を消した。と同時に、自動でカードリーダーからカードが排出される。

「うわっと」

私がカードをキヤッチすると、今まで描かれていたフェニックスの絵柄が消えてしまった。

「絵柄が……」

「まるで、仮面ライダーの変身アイテムみたいね」

「朱莉ちゃんって結構詳しいよね」

「まあ、弟と一緒に観ていたりするからね」

「あー、4歳ぐらいの弟がいたっけ」

ふと、気が付くと例のカードリーダーも腕から消えていた。

『話は終わったか？』

肩を竦めた炎の剣士が私たちのところに走ってきた。

その速度は戦闘時のものとは違い、普通の走る速さだった。

「えーっと、助けてもらってありがとうございます」

「ええ、あのままだったらきつと殺されていました」

『いや、礼なんていいさ。それに、俺はアイツを倒さなきゃならねえからな』

しかし、不思議である。

ウーヴェさんと同様にこの剣士も日本語ではない言語を話しているにもかかわらず、ちゃんと意味が理解できるのだ。

『さて、俺たちの戦闘でここは少々騒がしいからな。少し静かなところで話そうか。ユリが狙われる理由は知りたいだろう？』

私達は顔を見合わせてうなづいた。

炎の剣士はそれを確認すると、私が持っているチケットと同じものを掲げた。

すると、例の「シユマリット」の到着音が鳴り、近くのビルの隙間に例の扉が出現した。

遠くからはパトカーと消防車のサイレンの音が聞こえて来る。

『さ、早く行こうぜ。官憲に見つかっても厄介で面倒くさいしな』

私達は「シユマリット」に案内された。

客室は、外観同様に中世ヨーロッパを感じさせる内装になっている。豪華客車みたいな感じだ。

新幹線の乗車口のような間取りを抜けて、客車の扉を開けて、私達は哑然とする。

「由利ちゃん、なんかすごいわね……」

「……そうね」

客室一室がバーテンになっており、何人かの強そうな人たちが寛いでいた。

『ここが「シユマリット」のバーだな。戦闘車両が運転室、次に会議室、バー、シヨップと快適に過ごすための施設が揃っている。後部車両はそれぞれ英雄が休むための部屋になっている』

「は、はあ……」

『マスター、あの席借りるぞ』

『ええ、構いませんよ』

私達はバーの一角の4人ぐらいで座るスペースに座った。

『ウーヴェ……この「シユマリット」の車掌から話は聞いているか?』

「い、いえ……あんまり詳しくは聞いてないです」

『あー……やっぱりか。じゃあ、俺がどう言う人物かも知らないわけだな』

「は、はい……」

炎の剣士は頭をかきながら、眉を寄せる。

『簡単に言うと、この列車は世界を救う英雄を乗せて、世界を救うための列車だ』

「それは、ウーヴェエさんから聞きました」

朱莉ちゃんが答える。

『で、俺はルーカスⅡブランドンⅡアーベルライド。仲間からはルーカス、敵からは赤の勇者と呼ばれている。これでもかつて、俺の世界で魔王を倒した勇者っていう存在らしいぜ』

「え、は、はあ……」

信じられない、と言ったら嘘になる。それぐらい、彼……ルーカスの戦いぶり人間
のソレでは無いように見えたからだ。

もし、あの戦いを目撃していなければ信じることはできなかつたかもしれない。

それにしても、見事な赤髪である。染めたにしてもここまで発色のいい赤には染まらないであろう。

『お姫様とお嬢さんは？』

ルーカスに促されて、私達は自己紹介をする。

「私は篠崎由利です。普通の大学生で、経済学を専攻してます」

「私は栗栖朱莉よ。由利と同じ大学に通っているわ」

『ユリにアカリだな。よろしく』

ルーカスはいこやかな笑みを浮かべる。

『しかし、不思議だな。ダイガクセイってのは俺の世界で言う大法学院の学生って事だろ？ それが世界を救う存在……ねえ……。それも《白い闇》から狙われるほどの……』

「あ、あの、説明はして貰えるんですよね？」

『ん、ああ、すまない。俺もわかってないことの方が多いからな。とりあえず、かいつまんで説明はする』

ルーカスはそう言うと、説明をしてくれた。

この時空横断蒸気列車「シユマリット」は異世界を渡り歩く列車であること。役目は英雄……資格者とウーヴェさんは言うらしいけれど、そう言う人たちを集めて、滅びゆく世界を救う事が主な活動のようだ。だから、この列車に乗っている人物は世界を1度以上は救った経験の持ち主らしい。だから、ただの学生である私が資格者に選ばれたこととは不思議で仕方がないそうだ。

異世界と言うのは文字通り異世界で、私の世界が科学文明が発達した世界だけけれども、魔法文明が発達した世界、そもそも世界の成り立ちが3本の剣から始まった世界、蒸気機関が発達した世界など、様々に存在するらしい。

で、今回ウーヴェさんからルーカスに与えられた使命は、私を守る事らしい。理由もわからないらしいが、それが全ての世界を救う鍵になるということ引き受けたそう。《白い闇》に私が襲われているのを観て、納得はできないが確信はしたらしい。

で、《白い闇》と言うのはどうやらルーカスの……【シユマリット】の因縁の敵らしく、ウーヴェエさん曰く「破滅の案内人」だそうだ。《白い闇》のせいで滅んだ世界も多く、資格者も何人も殺されているらしい。ヤバい人物である。

「わ、私、なんかとんでもないことに巻き込まれたような……」

「……えーつと、それじゃあ私達はどうしたら良いのよ」

『では、私からご説明いたしましょう。お客様』

突然声が聞こえてきたかと思ったら、ウーヴェエさんが立っていた。

私達は驚く。

『びつくりさせんなよ！』

『これは失礼いたしました、ルーカス様』

ウーヴェエさんは紳士らしく綺麗なお辞儀をする。

『お客様にはもちろん世界を救っていただきたいと存じ上げます。もちろん、ルーカス様にはユリ様のサポートをしていただく予定です』

「は、はあ……」

『アカリ様には同行はして頂いても構いませんが、資格者ではございませんので元の世界でこの【シユマリット】の記憶を消させていただき、元のように生活をすると言う選択肢もございます』

「由利を置いて帰れと？」

『資格者はユリ様のみですので、世界を救うなどと言う危険な行為を資格者以外の方に強要するつもりはございません。ですが、資格者ではない方でも世界を救われた方も存在いたしますので、アカリ様のご決断に従うことになっております』

私は帰れないんだ……。

「……私達は学生よ。大学の授業には出させて貰えるのかしら？」

『もちろん、「シユマリット」は時空を横断する蒸気機関車です。世界を救っていただければ元の世界で通常生活を送ることも保証いたしますよ』

あ、帰れるんだ。それだけで安心できる。

『ただしその場合は、「破滅の案内人」からの襲撃を気にする必要がございます。ですので護衛としてルーカス様にご同行を願うこととなります』

そう言えば、私はその「破滅の案内人」から命を狙われているんだった。うーん、これは困った。

身の安全を考えるならば、この列車に身を寄せた方が安全ではある。だけれども、やはり元の世界が落ち着くし、私の部屋が一番落ち着くのだ。

だけれども、逐一あんなド派手な戦闘を街中で繰り広げるというのも気が引ける。

『一番は、ユリ様が強くなられることでございます。一度「世界を救う」と言う経験をさ

れた方が良いかと存じますが如何でしょうか？』

ウーヴェエさんはそう、私に提案をしてきたのだった。

3話

「世界を……」

「救う……?」

私たちが顔を見合わせると、ウーヴェさんは優しく微笑みながらうなづいた。

『ええ、次の停車駅では、その世界にとどまることになっております。その際に世界を救う《勇者》と接触して、救世に導くのが我々の仕事でございます』

ウーヴェさんは懐から懐中時計を取り出して確認する。

「仕事………ね………」

『もちろん、報酬は与えられます。世界を救った報酬ですので相応の………それこそ因果操作次元の報酬が与えられます』

「は、はあ………」

報酬の次元が違いすぎてイメージが出来ない。それこそ、現状ですら理解が追いついていないのに、何を理解すればいいのかと。

「ルーカスさんも、報酬目当てでこの仕事をやっているのかしら?」

朱莉ちゃんの疑問にルーカスは首を横に振る。

『いや、俺は俺の力でみんなの笑顔を救いたいからやっているだけだ。報酬は俺の寿命を延ばすために使っている。《白い闇》との決着もついてないしな』

思っていた以上にルーカスさんは勇者であった。

と言うことは、ルーカスさんは何年生きているのだろうか？

次元や時間を行き来するこの列車に乗っている感じだと、実際どうなのかは正直よくわからないけれど……。

『だがまあ、最初は報酬目当てでもいいんじゃないか？ この列車には打算で世界を救った奴も乗っている。世界を救った代償に世界を追われた奴もいる。そいつらと話をしてみるのもアリだと思っせ』

「で、でも、ただの学生の私にそんな……」

『誰だって最初は自信がないものさ。だが、お姫様……ユリにはその力がある。どっちにしろ、《白い闇》から命を狙われている現状を改善するためにも、戦う必要はあると思っせ？』

『ルーカス様のおっしゃる通りでございます。【破滅の案内人】を潰さない限りは、ユリ様の身の安全を完全に保証できるのは「シユマリット」内だけになります』

どちらにしても、根本の原因はそこだろうなと私も同意するしかなかった。

「由利ちゃん……」

「朱莉ちゃん、私やるわ。やるしかなさそうだしね」

「なら、私も手伝うわ」

「朱莉ちゃん……!」

私達は手を合わせる。

さすが朱莉ちゃんである。私の親友だ。

『わかりました。では、客車の準備をいたしましょう。また、アカリ様用のチケットは準備させますので、暫くの列車の旅をお楽しみくださいませ』

ウーヴェエさんはそう礼をすると、スタスタと別の車両に向かって歩いて行った。

『基本的に俺が守ってやるから安心しな』

ルーカスさんにはっこり笑って胸をドンと叩く。

「……まあ、実際に命を狙われているみたいだしね。私としても不本意なんだけど、仕方無いわよ」

「でも、なんで命を狙われているのかしら? 私達の世界……地球が滅びるなんて話はそれこそニチアサの番組内では起こっていないように思うんだけど……」

『さあな。車掌さんも全てを話してくれるわけじゃないから俺もわからん。俺が観てもあの世界は人間同士の争いは絶えないみたいだが、世界が滅ぶ予兆は感じられなかったしな』

ルーカスさんもそう断言するのならば、きつとそうなのだろう。

『それじゃあ、ま、謎はおいおい解いていくとして、まずは仲間の紹介をするぜ。ついてきてくれ』

とりあえず私達は、ルーカスさんについて行くことにした。

部屋が準備できるまで待機しているのも暇だったし、ちょうど良かった。

列車内を移動するのだけれど、客車と客車の間は窓があるため外が見える。

「うわあ……なにこれ、宇宙?」

窓の外を見た朱莉ちゃんはそう感想を漏らした。

外は確かに紺色の空間に光が映る、宇宙のような世界だった。

『あの光の一つ一つが世界なんだ。車掌さんは【可能性の断面】だと言っているけれどな』

「どう言う意味?」

『さあな。あの人の言うことはよくわからないことが多いしな』

「だけど綺麗よね。プラネタリウムみたい」

私はふと、暗い星を見つけた。

「ルーカス、あの暗い星は?」

『ん? ああ、あの光は車掌さん曰く【可能性の光】で、暗い光は可能性がほとんど無く

なった世界……つまり滅びようとしている世界だな』

「えっ?!」

『基本的に俺たちはそう言う世界に行つて、状況によっては諸悪の根源を倒すんだが、手遅れな場合もある。何度も世界を救つてきたが、そう言う場合は悔しいが諦めるしかないんだ』

「手遅れな場合つて?」

『一つが自業自得による滅び。これは車掌さんの判断で救うのを禁止されているんだ。この場合はいくら俺らが介入しても、絶対に滅ぶ』

自業自得の滅び……私達の世界だと、核戦争だとかだろうか?

確かにそんな状況になったら誰も救われないだろう。

『二つ目が《白い闇》の介入による滅び。俺たちが介入する頃には手遅れの場合もある。だから俺たちは《白い闇》を許せないんだ』

あの白いフードを被つた男がいる機関「破滅の案内人」の事を指すのだろうか。

恐ろしい存在だと言うのはあの戦いを見て実感しているけれど、どうにも世界を破壊するというのは実感が湧かなかつた。

『あいつらのお得意のパターンは、魔王を生み出す事だな。異種属の王を擁立して力を与え、その種族以外を滅亡させるんだ。そして、その王は自分の種族にも刃を向けて全

てを殺害してしまう。こうして滅んだ世界は多いな』

なかなかエグい。

『人間が単一で栄えている世界は、悪の王国が栄えて滅びに導かれるパターンもあるな。他には、その世界の神的存在に干渉して世界を滅ぼすなんてパターンもあった。神的存在は厄介だからな。俺じゃまず倒せない』

「え、どうやって倒すんですか？」

『同じ神的存在を擁立するんだ。物語で言う《主人公》って奴だな。そいつに神殺しを実行させる。俺たちはそいつの仲間になって導いたり、逆にヒントをばら撒いたりして導いたりするのが仕事だな』

「スケールが大きすぎる……」

数多の世界を救うと言うのはつまりはそう言う事なのだろう。

お助けキャラとかそう言うものなのだろうか？

何にしても壮大な話である。

『三つ目は自然淘汰による滅び。これもどうしようもないな。新たな種族がその世界の主人になるだけだ。こちらでも車掌から介入を許可されない』

「……インベスの森みたいなの？」

『どう言う事だ？』

「いや、黄金の果实による選定みたいな話よ」

朱莉ちゃんが言いたいののは、ガイムって言う仮面ライダーの話だろうか。話に付き合っているうちに上部だけの知識は私もある。

『ああ、そう言うのもあるらしいな。そう言う存在を俺らは「改変の意思」と呼んでいる。確認されているだけでも16種類あつて、それぞれの意思で動いているな』

16種類つて、そんな自然災害みたいなのが16種類もあつたら迷惑極まりないだろう。

『だから俺たちは基本的に《白い闇》や、世界を滅ぼす意思と戦っているわけだ』

「何と言うか、本当に壮大な話よね……」

「本当に……。マジで巻き込まれた理由を知りたいわね」

とにかく、わかっているのは私の敵が「破滅の案内人」である事ぐらいである。その組織だか機関だかの構成員はわからないし、組織の構成理由もわからない。

とにかく、どうしようもない状況であつた。

『これから紹介する仲間は、《白い闇》に滅ぼされた世界にいた奴だ。気難しい奴だけどころしくしてやってくれよな』

につこりと笑うルーカスさんは、そんな使命を自ら背負つて戦う戦士なんだなと、改めて価値観の違いというかギャップを見せつけられた。

私達はそんなルーカスさんに続いて、別の車両に入った。

雰囲気としては談話室だろうか？

ゆつたりとしたソファアーに座って本を読んでいたたり、チェスっぽい遊びをしている人達がいる。全員が全員美男美女だ。まるで物語の主人公のたまり場みたいな印象を受けた。

『ここは見ての通り談話室だ。ソファアーに座って本を読んでいるのが、アイリス。チェスをしているのがフィリップとチャンだ』

アイリスと言う少女は、気品のあふれるドレスを着た金髪金瞳の子だ。

フィリップは緑髪緑瞳をしている、シュツとした感じのイケメン、チャンは黒髪黒瞳のアジアン系のイケメンと言った感じの顔つきをしている。

『ふん、日本人か……』

チャンの視線は何か怖いものを感じるが、なぜだろう。

チャンはそれ以上何も言わずに、談話室から出て行った。

『おっと、失礼。チャンは元の世界で色々あったのサ。ああ、僕の名前はフィリップⅡサ
ンⅡジョルジュ。元の世界では天☆才魔法学者をやっていたのサ』

気取った感じの人だ。

自分の才能を絶対的に信じているナルシストって感じがした。

「は、はあ……」

『フィリップはナルシストだが、腕は確かだ。その世界の理に合わせて自分の世界の魔法を使えたりするからな。俺の纏う炎も、理が違えば効果が変わってくるが、フィリップの開発した導具で俺の世界の炎と同じ効果を出すことができるんだ』

『僕は天才だからね。それぐらい数多の実験をすればチョコチョコのちよいなのサ。まあ、このカード……【シユマリット】のチケットについては研究中だけどネ』

緑の髪をかき上げながら、自慢げにカードを見せびらかすフィリップ。

自己紹介をされたのだから、私達もするべきだろう。

「えーっと、私は篠崎由利です。大学生で、カードを使った召喚？ ができるみたいですよ。なんか資格者っていうのらしくって、『白い闇』って人に襲われてたところをルーカスさんに助けてもらいました」

『ふんふん、召喚ネ。興味深いナ。後で君の導具とカードを見せてもらえないかな？』
「あ、はい」

大丈夫かなとは思いうけれど、ルーカスさんが信頼を置いている人物っぽいので、問題はないだろう。

「で、私は栗栖朱莉。由利ちゃんの友達で、同行することにしたの。私の方は資格者って奴じゃないわ。よろしくね」

『ほうほう、珍しい人だね。こんな危険しかないところに足を運ぶなんてネ。私は止めないヨ。こちらこそよろしく頼むヨ』

しかし、翻訳されているとはいえ独特な口調である。気取っている割には誠実と云うか、なんと云うか……。

『アイリス、君もこつちに来て挨拶をしてくれないか?』

『……ワタクシは良いですわ。庶民の方とお話をする必要性を感じませんもの』

アイリスさんは澄ました表情でそう言った。

「由利ちゃん、なんだかお姫様みたいね」

「そうね」

『ああ、アイリスは《白い闇》に滅ぼされた世界の生き残りだ。アイリスⅡルウⅡノーデルヴェルク、それが彼女の名前だ。元の世界では一国のお姫様だったんだ』

ルーカスさんが紹介すると、アイリスさんはため息をつく。

『ルーカス、貴方も王子でしょう? 貴族は貴族らしく振る舞うものよ』

『俺は元だがな。まあ、身分なんてこの列車の中では無意味だ。アイリスも彼女達と仲良くしてやってくれ』

『……ふん、まずはその平和ボケした顔を直してから出直してらっしゃい』

アイリスさんはそう言うと、本を畳んでソファから立ち上がり、談話室を出て行っ

てしまった。

『……いや、うん。すまないな。癖の強いメンバーばかりなんだよ』
『気にすることはないサ。資格者である以上は、呉越同舟だからネ』

ルーカスさんが謝罪し、フィリップは肩を竦めた。

確かに私達は平和な日本から連れてこられたようなものである。事情なんて知りようがないし、世界が滅ぶなんて経験がないから、理解もできないのは事実であった。

「いえ、気にしてないです。実際、私達は知らなすぎますしね」

「そうね。でもまあ、気にしてもしようがないわね」

そもそも、国どころか世界が異なるのだ。異文化交流にも程がある。

と、客車の方からウーヴェさんが歩いてきた。

『お客様、部屋の準備ができましたので、案内いたします』

私達は顔を見合わせると、早速客車に向かって行った。

4話

客車は進行方向向かって左側が通路、右側に部屋がある構造であつた。

ぱつと見、カプセルホテル程度の広さは確保できそうかななんて私は考えていた。

『こちらがユリ様の部屋の鍵、こちらがアカリ様の部屋の鍵になります』

渡された鍵は、この洋館風の列車にはそぐわなくらいに現代的な鍵であつた。

「え、これ、私の部屋の鍵じゃない！」

朱莉ちゃんの指摘に私が鍵を観察すると、確かに私の住んでいるマンションと瓜二つの鍵であつた。

取り出して確認すると、鍵先の形が違うが見た目はほとんど同じだ。

『お客様に最適な部屋をご用意する際鍵も精製されます。お客様が快適に過ごせる部屋ですので、鍵も似るのは必然でございます。早速中身を確認されてはいかがでしょうか？』

私達はうなづき合い、それぞれの部屋に入るために扉の前に立つ。

扉は木製のシックな扉で、プレートには部屋の番号と私の名前が書かれたと思わしきプレートが張り付いている。

鍵を差し込むと、すんなり入った。右に回すとカチャリつと部屋の玄関の鍵を開けると同様の感覚がして鍵が解除された。

扉を開けると、まさに私が一人暮らしをしているマンションの部屋がそこにはあった。

「へっ?」

まさに私が一人暮らしをしているワンルームマンションの部屋そのままであった。家具の配置も置いてある小物も、そのままである。

唯一の違いは、窓である。鍵の部分は存在せず、はめ込み式になっており、カーテンを開けるとそとは例の宇宙が広がっていた。

「は、ははは、どうなってんの?!」

私は思わず声を出した。

ユニットバスの方を確認すると、トイレも水洗便所のままだし、風呂はお湯が出る。

『いかがでしょうか? ユリ様が一番安らげる環境を再現いたしました……』

いつのまにか入ってきていたウーヴェエさんがそう言った。

電気もつくし、水も出る。もちろんお湯も出る。ただ、コンロは使えないようであった。

『さすがにガスをこの部屋には引いておりません。御自身で調理される場合は食堂の奥

にあるキッチンで調理を行っていただければ良いかと思えます』

確認すると、調理器具一式は柵の中には存在しなかった。炊飯器も無い。

食事は食堂でと言うことなのだろう。とりあえずのプライベート空間があるだけ良しとしたほうがいいだろう。

「由利ちゃん！　すごいよ！　私の部屋が完全再現されてる！　つてこつちも由利ちゃんの部屋だ！」

興奮した様子の朱莉ちゃん。

私は驚くことが多すぎて、疲れてきたと言うのに元気である。

「部屋のサイズとか違うのに、こんな列車の中によく入るものね」

『もちろん、空間を拡張する魔法を使用しております。アリシア様の個室ですとさらに広く天井も高くしてありますが、きっちりこの「シユマリット」で再現しております』

「魔法……まさに魔法よね……」

科学文明で生きてきた私たちからすれば、すでにこの列車自体がとんでも無い代物だけれどね。今更なところがある。

『では、目的地に到着までの間はごゆるりとお過ごし下さい。御用命がございましたらこちらの鈴を鳴らしてくださいませ。係のものが駆けつけますので』

「え、ええ、わかったわ」

『では、失礼いたします』

ウーヴェエさんは紳士な例をすると、私の部屋を退出した。

「しかし、大変なことに巻き込まれちゃったわね」

「そうだね。実際に大変かどうかはわからないけれど……」

「確かに。それに、『世界を救う』って簡単に言うけれど、何からどうやって『救う』のかもいまいちわかっていないしね」

実際そうである。

こんな事に巻き込まれてしまったけれど、わからないことの方が多い。

資格者って一体なんだろうか？

そして、なぜ普通の日本で暮らしていた私が謎の組織「破滅の案内人」なんか命を狙われてしまっているのか？ それも、私があのカードを手に入れた直後から。

ルーカスさんはいい人だし、ウーヴェエさんも胡散臭いけれど紳士なひとということ
は流石の私でも理解できる。理解できるからこそ、謎しかないのだ。

「うーん、とりあえず、状況整理でもしようか」

「そうね。ジュースとかお菓子は食堂から持ってくれば良いのかしら？」

「たぶんね」

「それじゃあ、取りに行こうか」

「うん」

私達はとりあえず、お菓子やジュースを買いに食堂のほうに向かった。

……そう言えば、通貨ってどうなっているのか聞いていなかった。

その問題はすぐに解決したけれどね。

「おや、いらつしやい」

食堂の厨房にいる人物の声は日本語であった。こう、ダブって聞こえなかった。

「え、日本人……ですか……？」

「ああ、そうだな。普段は洋食屋を営んでいる橘花^{たちばな}だ。橘に花で『たちばな』だ。まあ、

正確には君たちとは次元の違う並行世界か別世界の日本の住人だからね、知らないかもしれないが」

「は、はあ……」

年齢的には27歳と言ったところだろうか。

「あ、わ、私は篠崎由利です」

「私は栗栖朱莉よ。二人とも同じ大学に通う大学生なの」

「聞いているよ。ウーヴェエから、同じ国の出身だからよくしてやってほしいってね」

橘花さんの声は落ち着いた感じがして安心する感じがする口調である。

「橘花さんも『資格者』ってやつなのかしら？」

「いや、私は違うよ。私は見ての通り洋食屋をやつててね。この列車とは契約を結んでシエフとして腕を奮っているのさ。普段は私の世界で洋食屋『たちばな』を切り盛りしているよ」

「は、はあ……」

「だから常駐つてわけじゃないんだ」

「非常勤のシエフなのね」

「ああ、常勤はこっちのサリアさんの方だな」

橘花さんが手招きをすると、美少女……と言つても、年齢は私達と変わらないように見える子がやつてきた。

「タチバナシエフ、お呼びですか？」

「すまないね、新しいお客さんだ。紹介しておきたくてね」

「ああ、なるほど！ あ、初めまして。洋食屋『たちばな』シユマリツト支店のメインシエフをやっています、サリアアグレイと申します。よろしくお願ひしますね」

金髪碧眼のツーサイドアップの髪型をしている美少女だった。人当たりが良さそうな顔つきをしている。服装はよくあるウエイトレスと言った印象の服装だ。

「あ、今はホールの仕事をしているのでこっちの服装をしていますけれど、普段はシエフの格好をしていますからね」

私達の目線で疑問に思ったことを察してか、自分から自分の服装についてそう指摘する。

「それにしても、サリアさんって日本語が流暢ですね……」

「はい！ これでも、タチバナさんの指導の元頑張ったんですよ！ まあ、ここだと自動で翻訳されちゃうんで、意味はないんですけどね」

照れ臭そうにそう言う。

「彼女は私とは違う世界の人間だね。元々は私の店で働いてもらっていたんだ」

どう言う状況だろうか？

「えーっと、サリアさんって異世界人って事？」

「はい、タチバナさんとは違う世界出身です」

「ふーん」

朱莉ちゃんはそう言うのと眉を潜める。

そして私にこう囁いた。

「あれ、異世界食堂？」

「なにそれ」

「異世界に洋食屋の扉ができて、異世界の人が日本の洋食屋で食事をするアニメよ。それっぽいなあって思ってた」

「……まあ、そう言うこともあるんじゃない？」

私はそこまでアニメに詳しいわけじゃないからなんとも言えない。

ただ、経緯とかはそれっぽいい感じはする。

とりあえず、本題に戻そう。

「そうそう、橘花さん。お菓子とかコーラとか出したりできるんですか？」

「ん、ああ。メニューにはあるぞ。完全に滅んでしまった世界の食材は難しいがね、日本の食材ならば一番簡単に仕入れられるからな」

「はい、では持つてきますね」

「でも、お金が……」

「ああ、日本円でも構わないよ。異世界だとその世界の通貨に合わせる必要はあるがね」
サラアさんは奥に飲み物を取りに行く。

「一応きょうつうの通貨は存在するんだがね。シユマリットではこの硬貨を貨幣として
いるんだ」

橘花さんはそう言うのと、硬貨を取り出して見せてくれた。

「こいつは『リン』と言う。1リンにつき80円ぐらいの価値があると思ってくれればいい。『シユマリット』内ではしか使えないが、こいつの便利なところはその世界に降り立つと、相応しいレートで貨幣に変換されるところだ」

「何というか、便利ですね……」

「そうだな。まあ私としては一体誰がこんな蒸気機関車を生み出したのだから甚だ疑問だがね」

私と橘花さんが話していると、奥からサリアさんが戻ってきた。

見たことのあるコーラのペットボトル2本と、籠にお茶請けのお菓子である手作りのポテチがのっけられている籠を持っていた。

「準備ができました。ポテトチップスはサービスです！ お代は240円……3リンになります」

「ありがとう。ポテトチップスは揚げたて？」

「はい、もちろんです」

私と朱莉ちゃんは120円ずつ取り出して料金を支払う。

橘花さんはお金を受け取ると、手書きで領収書を書いてくれた。

「ん、まいど。ポテトチップスは揚げたてが美味しいからな。早めに食べてしまうとい。市販のものとは違って、長期保存には向かないからな」

「ありがとうございます！」

「ありがとう、橘花さん、サリアさん」

私達は、サリアさんからポテチを受け取り礼を言う。

何というか、橘花さんみたいな同郷の人がいるならば、何とかやっていけそうな気がした。

それから私達は部屋に戻って、ポテチを食べながら今の状況の確認と今後どうするかについて雑談を始めた。

……まあ、雑談は雑談である。

早々に話は脱線し始めて、寛いでしまったのだった。

ほとんど私の部屋だしね。ウーヴェエさんの狙いはバツチリだったと言う訳である。

それにしても、私の部屋の完全再現ということは私の部屋にあった漫画も全て揃っているわけで……どうやって集めたのだろうか？

魔法のおかげと言うには、完璧に揃いすぎている気がしないでもない。

朱莉ちゃんの部屋も見せてもらったけれど、朱莉ちゃんの実家の部屋がほぼ再現されていた。間取りが、玄関からトイレと風呂場、朱莉ちゃんの部屋と言う構成になっていたんだけれどね。

5話

ピンポンパンポン♪

そんな音がして、車内アナウンスが流れる。

《間も無く、ツヴァイフンダートドライツヴァアイフィーアアインス——現地呼称【ティグラット】。ツヴァイフンダートドライツヴァアイフィーアアインス——現地呼称【ティグラット】。ユリ様、アカリ様、ルーカス様、ご準備をお願いいたします》

ドイツ語で200—3241番の事である。

何でドイツ語なのかはよくわからないけれども、数多にある異世界を固有名で管理するよりは番号で管理したほうがいいのは確かである。

「準備……ねえ。私達は何をすればいいのかしら？」

「わかったら苦労しないって。こう言う時はルーカスさんに聞けばいいんじゃないの？」

「確かにそうね」

私の提案に、朱莉ちゃんは同意する。

私と朱莉ちゃんが談話室に移動すると、ルーカスさんが待機していた。

「ルーカスさん」

『ああ、来ると思つてたよ。ユリ、アカリ』

うーん、さすがは勇者つて感じである。

「異世界に行く上での準備つて何が必要なの？」

朱莉の質問に、ルーカスさんはあつさりと答える。

『そうだな……基本は現地調達になるぞ。俺たちは基本的にこのチケットをかざせば、
【シユマリット】に帰還できるからな』

「あ、そうなんですか」

『もちろん、そう何度も容易く呼び出せるわけじゃない。呼び出せるのは街中の隙間がある場所だったり、人気のない場所だったりする。それ以外だと基本的に呼び出しには
応じてくれないからな』

「それでも、移動拠点があるだけチートじゃないかしら？」

『ちーと……不正行為ね。異世界転生者にとつてはそうかもしれないね』

でも、私はこの召喚カードがあるので十分かもしれない気がする。まあ、最強の護衛のルーカスさんがいるので十分かもしれないけれど。

『さて、今回行く世界200—3241……現地呼称【ディグラット】は難度としては
ディマインス

D—の当たる世界だ。こいつは単純な構図で、魔王の軍勢が世界を滅ぼそうとしてい

ると言うパターンの世界だな』

「そうなんですか」

『僕たちの役割は、既に頭角を現し始めた勇者パーティの支援だな。余計な奴ら……例えは《白い闇》共を排除して勇者が魔王を倒す事に集中できるようにするのが俺らの仕事だ』

「その、「破滅の案内人」ってどこにもいるんです？」

『いや、それはわからない。現地工作人員を作っていたりもするからね。ここは現地調査が必要な部分だ』

「は、はあ……」

言われてもイマイチぱつとしない。

それに気付いてか、ルーカスさんは補足してくれた。

『スパイって聞いたことあるかな？』

「映画とかの中ならあるかな」

「うん、007とかだったら有名だし聞いたことはあるよ」

『……なるほど。俺の世界じゃ自覚なく他国のスパイをやっている奴も居ただけだね。まあそれはいい。要するに、世界を破壊する手助けをする奴も居ると言うことだ。過去の事例なら、邪神信仰だったりが該当するかな』

「うげっ、つまりは「破滅の案内人」って邪神そのものなの?!」

『世界の人にとつてはそうだね。僕たちも彼らからしたら似たようなものさ』

ルーカスさんの強さを思えばそうかもしれないけれどね。

私と朱莉ちゃん是谁がどうみても一般人である。

『僕たちがやる事は、勇者の支援と異常な危険の排除だ。もちろん、強さの見極めは俺がやる。二人は今回は俺の支援をしてくれれば大丈夫だ』

「わかったわ」

「わかりました」

ただ、仕事の内容についてはわかったけれども、現場の事については現地名称しか分かかっていなかった。

「で、ルーカスさん。その「ディグラット」ってどう言う世界なんですか?」

『どう言う世界……か。そうだな、ユリ達の基準で言えば、「剣と魔法のファンタジー世界」と言え方がいいかな。基本的に多くの世界は魔法文明を選択することが多い。神と人を分ち、科学文明に傾倒した世界の方が少ないんだよ』

「つまり、次に向かう世界っていうのは私たちから見たらファンタジー世界って事ね」

『ああ、200系列の3000番台だから、俺の世界と同じく王政のあまり魔法文明の発展していない世界だというのは予測がつく』

どうやら番号にはそういう意味があるようであった。

「ちなみに私達の世界は？」

『950—6003だ。しも三桁は中央世界から離れた距離によってつけられるんだ』

「つて事は、私達の世界も並行世界のひとつて事？」

『だが、10番台までは本当に微差しかないぞ？ 俺の感覚から言えば、完全に異なる歴史を辿っていくのは100番台以降だからな』

実際、登場人物が実在するか物語上の人物か、ある製品が完成した時代の誤差だとかそういうので分岐するらしい。6200になると、私達の世界でも魔法文明になる場合もあるそうである。

そういうのは知らなくてよかった。

ちなみに、復原力が働くので大体100以内だとすぐにくつついて一つになるらしい。

「うーん……もはやちんぷんかんぷんね」

「なんか、神様の世界みたい」

私は正直な感想を漏らした。

これ以上追求するとますますわけがわからないことになりそうだから、話題を変える

ことにした。

「で、ディグラットに行くのは良いとしても、私達の格好は現地の人から見ても明らかに異なるものだと思うんだけど、その辺りはどうなるんですか？」

『ああ、それなら安心してくれ。世界が与える「役割」で服装が自動で変化するからな。もちろん、「シユマリット」に戻れば元の服装になるから安心してくれ』

「……ディケイドかしら？」

「ディケイド？」

「いや、なんでもないわ」

「？」

ディケイドってなんだっけ？

前に朱莉ちゃんの話題にしたことがあった気がするけれど、覚えていない。

「と、とりあえず、服装とかの心配はしなくて良いつてことよね？」

朱莉ちゃんが誤魔化すようにそう言うと、ルーカスさんはうなづいた。

『ああ、そう言う認識で問題無い』

と言う事は、私達の世界でのルーカスさんの役割が気になるところである。

私達を「シユマリット」に案内した時の鎧のままなので、コスプレしてる人とかだろうか？

『ん、ああ、君達の世界にいた時は限定的だったからね、俺はこのフィリップが作ってくれた導具で、俺の世界の法則を持ち込んで戦ったんだ』

ルーカスさんはそう言うと、掌サイズのスイッチを見せてくれた。

『フィリップは魔法科学文明の発達した世界の出身だからね。こう言う便利な道具はフィリップが作ってくれるのさ』

「そうなんですね」

これなら頼めば朱莉ちゃんの好きな仮面ライダーにでも変身できるベルトも作ってもらえそうではある。

『まあ、フィリップの世界は「改変の意思」によって世界が作り替えられたんだがな。フィリップはその生き残りだ』

なんか、この列車に乗っている人間はすべてからく悲惨な背景を持っていないとダメなのでは無いだろうか？

なんて事を思ったけれど、橘花さんはそんな感じではなかった。

「私達が降り立つ場所はどこになるのかしら？」

『勇者の宿泊している街になる。だいたい「シユマリット」が泊まる場所は資格者が勇者のそばだからな』

「なら、私たちは勇者を見つけて接触するのが最初の行動になるんですね？」

『いや、それは場合によるな。単独ならば勇者のパーティに加わるのもアリだが、今回の場合はこつちが3人だ。裏で支援する形でも問題無いだろう』

ルーカスさんがそう判断するならば、それに従った方がいいだろう。

私たちはど素人なのだ。

「わかりました」

「わかったわ」

私たちはうなづいた。

《間も無く200—3241、200—3241。お出口は向かって左側になります。間も無く200—3241に到着いたします。お客様はご準備をお願い致します》

ウーヴェエさんの声でアナウンスが入る。

それにしても古びたラジオのような音声である。

『それじゃあ行くこうか』

ルーカスさんの言葉に私達はうなづいた。

初めての異世界にワクワクしつつ、私達は談話室から移動する。

一体どんな異世界だろうか？

とんでもないことに巻き込まれて不安でいっぱいだったけれど、今は海外旅行をしに飛行機のターミナルに降り立つような気分です、私は乗車口に移動したのだった。

6話

プシューッと音を立てて扉が開く。

扉が開いた先は、見知らぬ世界だった……いや、ヨーロッパの街並みなんだけれど、洋服が古いというか数世紀前のデザインの服でだけでもちゃんとした服装である。ただ、私の知っているヨーロッパの感じではなかった。

「おおおおお！ 由利ちゃん！」

「ん、朱莉ちゃん、どうした……?!」

朱莉ちゃんを見ると、服装が変わっていた。

大元のデザインは元の服装とあまり変わらないけれども、生地が違ったり細かいところが簡略化されている感じがする。

私の服装もそうだ。服装が現地化されている感じである。

「おおおおおおお！」

私も朱莉ちゃんと同様に驚きの声を上げた。

「おい、何を驚いているんだ？ ってそうか。異世界に来るのは初めてだもんな」
ルーカスさんは頭をかきながらそう言った。

って、ルーカスさんの声が普通に聞こえる。

「ルーカスさんが普通に話せてるうう！」

「おい、どういう意味だおい。今まで普通に会話してただろ」

「いや、元の言葉……ルーカスさんの世界の言葉がダブって聞こえてたんですけど、今は普通に聞こえるなと」

「……ああ、なるほど」

私達の言いたい意味が伝わったらしい。

「ま、そういうものだ。【シユマリット】で異世界を渡ると、その世界から役割を与えられると言っただろう？」

つまり、役割を果たせるように現地言も話せるようになるということらしい。なんかすごく便利だ。異世界感はあるけれども！

「さて、まずは俺たちの【役割】を確認しようか」

「勇者の支援じゃなくて？」

「そいつは俺たちの使命だ。役割ってのはこの世界での役目とかそう言うものだ」

ルーカスさんはそう言うのと、再びフィリップさんが作っただらしきアイテムを取り出した。

「【ステータス】！」

ルーカスさんはそう唱えると、フリリップさんのアイテムの隙間部分から青い粒子が漏れ出して漂う。

ルーカスさんは虚空を見るように目を動かすと、こう断言した。

「ふむ、俺の役目は城の騎士らしい。鎧がそれっぽくなっているのは、【役割】の影響だな」

「は、はあ……」

私と朱莉ちゃん根を白黒させていると、どうやらその原因に思い至ったらしい。

「ああ、そう言えばユリ達は魔法のない世界だったな。……そうだな、カードを見せてくれないか？」

私が朱莉ちゃんに目配せをすると、朱莉ちゃんは懐からカードデッキを取り出す。

采配が上手い朱莉ちゃんに管理を任せているのだ。

朱莉ちゃんからデッキを受け取ったルーカスさんは、パラパラとカードをめくると、二枚の空白のカードを取り出した。

「このカードを手にして「自分の情報を見たい」と念じてみるといい。おそらくそれでステータスを見ることができはすだ」

「は、はあ……」

私達はカードを受け取ると言われた通りに念じてみる。

すると、カードの絵柄がモザイクで覆われて絵柄が変化した。

絵柄には私の写真と簡単なステータスが数値として表示されている。

職業は【召喚士】と書かれていた。

「え、すごい、何これ!」

「由利ちゃんは何の職業だった? 私は【商人の娘】って書かれているんだけど……」

「私は【召喚士】って書いてあるわ」

お互いにステータスカードを見せ合う。

ステータスにはそれぞれの特徴が出ており、体力や筋力、知力は私の方が劣っているけれども、魔力や素早さは私の方が高いと表示されている。

そういえば、大学のテストでも朱莉ちゃんはそのこいい成績だったように思う。

「【商人の娘】に【召喚士】ね……。いや、商人の娘って」

ルーカスさんは難しい顔をする。

「いや、とりあえず良いだろう。まずは情報収集だな。情勢や何が原因となって世界が滅ぼうとしているのかを確認しよう」

ルーカスさんの提案に、私達は同意した。

——世界は危機に陥っていた。

突如現れた魔物達と、それを統べる王——龍王が現れたからだ。

魔物の軍勢は強大で、多くの街や村が滅ぼされた。まだ、この大陸アーレフィランド大陸以上に勢力を拡大しているわけではなかったが、ラートドム王国はまさに龍王によつて存亡の危機に立たされていたのだ。

王女は龍王に誘拐され、世界中に暗雲が立ち込めていた。

今、予言に従い勇者が選抜され旅立ちのときを迎えようとしていた。

「ドラクエかよー！」

朱莉ちゃんが突っ込む。

流星に私も、聞き込みをして概要を知った時には思わず呆れてしまった。ドラクエーはスマホアプリで暇つぶしにやっていたからね。

いやまあ、王道的勇者伝説なんだけれどね？

空は確かにいつも分厚くて暗い雲が覆っているし、町中の人々には生気が無い。

「ドラクエ……？」

「あー……私達の世界で一番有名なゲームです」

「俺はゲームといえばチェスとかポーカーみたいなのがカードゲームぐらいしかわからないのだが……まあ良い」

私達は現在はこの街……アーリア城城下町の宿屋で情報を集めた結果を報告しあっていた。

私と朱莉ちゃんは道端の人に聞き込みをして、ルーカスさんは酒場で情報収集をするみたいな感じである。

「勇者の名前はギャレン。この世界の伝説に伝わる勇者の末裔らしい」

「ロトの末裔ね」

「朱莉ちゃん、そこまで露骨な名前じゃ無いでしょ。私も思ったけれどさ」

「ああ、ダイヤと言う勇者の末裔だそうだ」

「ブレイドじゃ無いんだ……。ウゾダンドコードーン！」

「……たまにアカリが言いたいのかわからない時があるな」

呆れた様子のルーカスさん。

朱莉ちゃんって仮面ライダーオタクだよ。弟くんに影響されて見たにしては持っているネタが多い気がする。

「で、真面目な話に戻すけれど、私達は何をすればいいわけ？」

「勇者が強くなるまで、強敵……《白い闇》から彼を守ることだな」

「あー、序盤で狙われたらやばいもんね」

「確かに、レベルが低い段階でボス級が出てきたらすぐにゲームオーバーだもんね」

明らかに《白い闇》は……【破滅の案内人】の勢力は強い。

私達でもルーカスさんがいなければすぐに殺されてしまうだろう。

だからこそ、ルーカスさんが同伴しているわけだけでも。

「ま、その前にユリやアカリの戦闘訓練でもした方がいいかもしれないな。幸い、勇者はまだこの街の周辺で冒険者ギルドの依頼をこなしている最中だし、時間はあるだろう」

「ええー……」

「最低限敵の動きは見切れるようになった方がいい。片手剣を調達しておいたから、軽く周辺の魔物を討伐しに行くとしようか」

有無を言わさないルーカスさんの圧力に、私達は同意せざるを得なかった。

こうして、私達は剣の扱い方も知らないのに魔物討伐に連れて行かれることになったのだった。

まあ、流石に剣道の振り方しか知らない私達を見かねて、初日は剣の振り方から教えてもらうことになったんだけれどね。

ルーカスさんは意外にもスパルタで、教え方が上手いけれど厳しかった。1日で手は豆だらけになってしまいうし、筋肉痛で朱莉ちゃんと一緒につぶれてしまった。

現代っ子だから仕方が無いんだけれどね。

「ううー……手が痛い」

豆が潰れてかなり痛む。

「なんか回復魔法みたいな無いのかなあ?」

朱莉ちゃんはベッドの上にカードを広げて確認している。

ちなみに、軟膏が売ってあったのでそれを使って回復を試みて入るけれども、痛みがすぐに引いたりはしない感じであった。

と、朱莉ちゃんが一枚のカードを拾い上げた。

「ねえ、由利ちゃん。この《ヒール》ってカード、使えないかしら?」

私は朱莉ちゃんからカードを受け取ると、絵柄を確認する。

と、不意に腕にカードリーダーが装着された。

使用可能ということなのだろうか?

「それじゃ、試してみるね。《ヒール》!」

私が宣言してカードを読み込ませる。

カードリーダーにカードを差し込み、カバーをスライドさせると、例の音声が鳴る。

《Magieraise》

《Anf・nger Recovery | Magie | Ferse》

すると、私の指先に淡い緑色の光が集まるので、試しに自分の掌に使ってみると、私の中から何かが少し減った感覚とともに両手の豆がみるみる修復されていく。

「おおおおお！ ビンゴだよ！」

「すごい！ 痛みがスツと引いていく……！」

触った感じだと普通に豆が回復した感じと言ったら良いだろうか？

少しだけ手の皮が厚くなった感じである。

カードリーダーからカードを取り出しても絵柄は消えていないので、再使用は可能そうであった。

「それじゃ、朱莉ちゃんの手も治すね」

私は再びカードを差し込み、カバーを閉める。

《Magieraise》

《Anfänger Recovery—Magie—Ferse》

私が指先を朱莉ちゃんの掌に触れさせると、淡い光が朱莉ちゃんの手を覆い、潰れた豆を回復させる。と同時に、私の中からスツと力が抜ける。

「おおおお！ 痛くなくなっただわ！」

私はカードを取り出す。

今の私だと、何となくだけでも後4回ぐらいは使えそうな感じはする。

恐らくだけれど、このカードは私の中にある力……MPみたいなものを使っているように感じる。

私がステータスカードに意識を集中すると、魔力量の項目が少し減っているのがわかった。

「由利ちゃん、どうしたの?」

「うーん、恐らくこの《ヒール》のカードを使うと私の魔力? みたいなものを消費しているっぽい感じがするの」

「治癒魔法だもんね。ファンタジー世界みたいだし、そういうのもあるんじゃないの?」
と、朱莉ちゃんが何かを閃いたような顔をする。

「と言う事は、私も魔法が使えちゃったりして!」

「それはあり得るかも! 私の場合はカードを使えば良いけれども、朱莉ちゃんは道具なんて持ってないもんね」

「うん! そうとなったら、明日は魔法を覚える方法を探すわよ!」

朱莉ちゃんが元気に拳を振り上げるが、途端に痛そうな顔をする。

「いたたたた……筋肉痛は治ってないのね……」

そのまま流れるようにベッドに倒れ込む朱莉ちゃん。

私も筋肉痛が酷いので、今日はもう寝ることにした。

灯は電気ではなくランタンなので、フツと火を消すと部屋が暗くなる。

外は暗雲が立ち込めているのか光は見えない。

一つの世界を『救う』のにどれぐらいの期間がかかるのだろうか？

先行きは見えないし、そもそもどう言う事が救う事なのかも依然とはつきりしていない。

流石に1年以上も付き合うつもりは無い。

もうちよつとルーカスさんから話を聞いておくんだったなあなんて思いながら、私は微睡に身を委ねたのだった。

7話

翌日、私たちは魔法を習得するため、ルーカスさんに相談することにした。

「おはよう、ユリ、アカリ」

「おはようございます、ルーカスさん」

「ルーカスさん、相談したいことがあるんだけど、いいかしら？」

朱莉ちゃんが聞くと、ルーカスさんが朝食を口に運ぶのをやめてこちらに向き直る。

「ああ、何かな？」

朱莉ちゃんはすぐさま本題を切り出した。

「私、魔法を覚えないの」

ルーカスさんは朱莉ちゃんのお願いに、少し考えを巡らせてから理由を聞いてきた。

「それは構わないが……理由を聞いても良いか？」

「ほら、私や由利ちゃんって基本的に前衛で戦わないじゃない？ 由利ちゃんは召喚術

があるからいいけれど、私は何もできないじゃない？」

「うーん、いや、アカリは結構前衛向きだと思っただが……」

朱莉ちゃんが前衛向きだったというのは意外だった。

確かに私よりも運動神経がよかったのは、昨日訓練して初めて知ったけれども。

「それでも、ルーカスさんには及ばないじゃない。それに、今日は筋肉痛がひどいし、筋力つけるならばたんぱく質を取ってしっかり筋肉を休めて超回復させるのが良いしね！」

「……そうなのか？」

ルーカスさんが私を見る。

朱莉ちゃんも漫画で得た雑学に詳しいけれど、普段から服装とかに気を使っているのかオタクな感じはしない。

知っている人じゃないと気付かないようなネタをつぶやいたりすることはあるけれどもね。

「まあ、テレビとかで聞いたことありますけどね」

実際私はあんまりテレビは見ないのでわからないけれどもね。

携帯もアイフォンだし。ガールズトークでも最近はドラマの話題ならアンプラやフールーとかでやってるドラマの話題が多いし。

「それならまあ、良いだろう。しかし、魔法ねえ……」

ルーカスさんはそういうと、腕を組んで考える。少し考えると、どうやら何か心当たりがあったのか、閃いた顔をした。

「この世界の魔法を学べそうな店なら見かけたな。そこに行ってみようか」

私達は顔を見合わせると、うなづきあった。

「うん！」

「案内お願いしますね！」

私たちはルーカスさんに連れられて、街中を散策する。

中世ヨーロッパの街並みだけでも、建物の数はそれほど多い印象ではない。

それでも、城下町というだけあって賑わいはそれなりにある感じである。

私たちが連れてこられたのは、看板に魔法陣の描かれたわかりやすい店であった。

店先には水晶が置かれていたり、非常にそれっぽい店である。

「うーん、なんて言うか、昔懐かしのゲームの世界って感じね。レトロゲーって印象を受けるわ」

「そうなんだ。まあ、たしかに他の店もわかりやすい感じだもんね」

私たちの会話にはやはりついてこれないルーカスさんはスルーすることにしたようだった。

「それじゃあ行くぞ」

「はい」

「はい」

ルーカスさんが先頭で扉を開けると、カランカランと鐘が鳴る。

特に暗い感じではないが、魔法使いの格好をしたおばあさんが椅子に座って黒猫を撫でていた。

「……………いらつしやい」

どうやら店員さんのようである。

「この子供達が見繕って欲しいんだが、頼めるか？」

「……………わかりました。では、こちらの水晶で鑑定いたしますので、こちらへどうぞ」

老婆の店員さんはそう言うと、ゴトリと水晶を取り出した。

「……………では、この水晶に手をかざしてください」

「それじゃ、私からね」

朱莉ちゃんがそう言つて手をかざすと、水晶がほわんと輝く。

「……………ふむ、そのお嬢さんは光魔法と水魔法の適性があるようですね」

「光魔法と水魔法……………」

「ほう……………アカリはなかなか面白い魔法の適性があるんだな」

ルーカスさんはそう言うと、ニヤリと笑う。

「どういう事です？」

「光属性は多くの場合勇者と呼ばれる存在が扱えることが多い魔法だな。アカリは勇者

の素質があるかもしれないぞ」

「うーん、それっていい事なのかしら？ とりあえず、次は由利ちゃんね」

「あ、うん」

私は朱莉ちゃんと入れ替わりで手をかざすと、水晶が再び光る。

さっきの朱莉ちゃんとは違う光りかたをした。

「……ほう、そちらのお嬢さんは無属性……どんな属性の魔法をも扱えるようすな。

……これまた珍しい」

「ユリは召喚術師だからね」

どちらかと言うと、カードのおかげな気がしないでもない。

「それで、魔法を覚えるにはどうしたら良いのかしら？ 魔導書でも読めば良いのかし

らっ？」

「……レベルを上げれば戦闘用の魔法は習得できますな。……生活魔法は戦闘用魔法を

習得したのちに魔導書で覚える必要がありますな」

「レベルって……」

レベルってRPGとかそう言うので使われる用語だよね?!

ふと、私がステータスカードを確認すると、確かにステータス欄にはレベルの記載があった。

「本当に異世界なのね」

「いや、ゲームじゃないんだから……」

「俺の世界もレベルの概念はあったぞ」

私と朱莉ちゃんはルーカスさんを見た。

まあ、確かにルーカスさんはRPGの世界出身なイメージはある。

「ま、まあ良いわ。と言うことは、レベルを上げれば魔法を覚えられるのね」

「……ええ。もちろん、覚えるには役職にふさわしいものを習得するようになっております」

「変えるにはどうしたら良いのかしら？」

「……はて、神殿で試練を受けることにより変更ができますが……常識では？」

「そう、わかったわ」

朱莉ちゃんはそう言うと、財布からこの世界のお金に変換されたお金……銅貨数枚を机に置いた。

「ありがとうね、またくると思うわ。行きましょ」

私達は朱莉ちゃんに連れられて、魔法店を後にした。

「どうしたのよ、朱莉ちゃん！」

「……いや、だって、あの会話って実質私たちがこの世界の常識を知らなすぎるってのを

あのお婆さん相手に証明していたからね。恥ずかしくなったのよ」

難しい顔をする朱莉ちゃん。

「気にする必要はないんじゃないか？」

ルーカスさんはそう言って話に入ってきた。

「俺も、初めての世界ならばまずその世界の常識を知るのが先決だしな」

「そんなものかしら？」

「ああ、基本的には俺たちの仕事は勇者の支援だからな。支援をするにも常識ってのは重要になる。余計なお世話とかせずに済むしな」

余計なお世話とはどう言うことだろうか？

「余計なお世話って？」

「うーん、そうだな。簡単に言えば勇者が自前で準備できるものを、俺たちが回りくどい感じで提供してしまったりとかだな。だからこの世界の常識をある程度は知っておく必要はある」

「ふ、ふーん……そうだったんだ」

確かに「シユマリット」ではその世界の常識というものは教えてもらえなかった。

車掌さんも一度も行ったことのない世界の情報は知らないと言うことらしい。

わかるのは、どの世界が崩壊の危機に瀕していて、その攻略難易度はどの程度かとい

うことぐらいだそうだ。

それで良いんだろうか？

「まあ、俺もそれなりに長く【シユマリット】に乗ってはいるが、その辺りはよくわかっていないんだ。攻略難度も車掌さんがつけたものじゃないしな」

「ふーん、あの不思議機関車は謎だらけね。訳わからないわ」

「そうだね……」

そもそも、【資格者】と言うのもよくわからない。

わからないことだらけである。

わかっているのは、「シユマリット」は世界を救うために動いている事と、「破滅の案内人」と敵対している事ぐらいだろうか。

「まあ、そんな事より、レベル上げね。魔物を倒せばレベルが上がるのかしら？」

「ああ、それは間違い無いな」

「オツケー。基礎鍛錬もしつつ、レベル上げもしましょうか」

「わかったわ」

と言うわけで、私達は城下町の周辺で鍛錬しつつレベル上げをした。

お金は魔物の残骸から採取できる素材を売ったりしていたのだけれど、魔物は討伐すると銅貨を落としたりするのでお金に困ることはなかった。

およそ私達のレベルが10を越える頃には、魔法も覚え、常識もある程度習得できたし、勇者ギャレンの動向についてもある程度把握することができた。

勇者ギャレンは現在ラートドム王国城下町を一人で旅立ち、北東の街ラガイの街に向かっているらしい。

魔王の住む魔の島は世界の北端に存在するので、完全に一致というわけではないけれども、どうやらこの世界はやはり似ているようだ。

「それにしても、一人で旅をするなんて無茶な話よね。誰もついていかなかったのかしら？」

朱莉ちゃんの疑問は当然であった。

ルーカスさんも同意する。

「ああ、俺も旅をしていた時は一人ではなく仲間と共に旅をしたんだがな」

「ルーカスさんの旅の話はそれはそれで気になるけれども、一人旅なら追いかけないとまずいんじゃないの？ 道中を「破滅の案内人」に襲われたらあっさり負けちゃうかもだよ」

「……そうだな。よし、追いかけるとしよう」

ルーカスさんは懐から「シユマリット」のチケットを取り出した。

「それじゃあ一度戻るぞ」

すると、あの到着音が聞こえると同時に、「シユマリット」の乗車口が出現した。「ああ、基本はこう言うスタイルなんだね……」

現地に行ったら解決まで戻れないものかと思っていたけれど、どうやらそうでは無いらしい。

「さあ、移動するぞ、二人とも」

◇

私は勇者ギャレンのいる洞窟のちかくの村で降りる。

この村はアリーア村と言い、よくある感じの村であった。

「さて、勇者は……いるな」

ルーカスさんの指差した先に、勇者ギャレンがいた。

軽戦士の鎧を身に纏っており、勇者には見えない彼の姿だけれど、村の人からは勇者様と崇められていた。

「おお！ 勇者様！ どうか世界をお救いください！」

「勇者様！ 北の森で魔物が暴れているそうです！ と助けください！」

と言った感じだ。

「毎回この手のゲームを見てて思うんだけど、なんで勇者に任せっきりで自分たちで解決しようとしませんかしらね？」

朱莉ちゃんが呆れたようにそう言うと、ルーカスさんが答えてくれた。

「村人や街人のレベルってのは基本的に一桁がほとんどなんだ。冒険者や軍人、その他得意なやつぐらいがレベルを上げたりするがな。レベル制の世界はレベルの高い魔物が暴れていたりすると逃げるか冒険者に駆除の依頼をするしか無いんだよ」

「ふーん……それってどうなのよ」

「そもそも、レベル上げて命がけだからな。ユリもアカリも俺と共に戦っているからそこまで危険を感じていないだろうが、普通はレベルを上げて強くなるうなんて、考えないんだよ」

私たちに置き換えて考えてみたら、確かに命を落とすかもしれない魔物と戦うよりは、レベルを上げずに街や村で安全に暮らすのが一番だろうと言うことに行き着く。

レベルを上げるといえるのは、命知らずな行為なのだろう。

「どっちにしても、自分たちでなんとかしようとしないうってのはふに落ちないわね……。そう言うものといえはそうなのかも知れど」

「まあ、現時点では勇者は無事ってことが分かったし良いじゃ無い！」

「……それもそうね」

勇者ギャレンは結局、村人の頼みである森の魔物の討伐を引き受けたようであった。

私達はそれに後ろからこっそりついていくことにした。

私と朱莉ちゃんはほとんど何もせずについて行けたけれど、それはルーカスさんが周囲の魔物の露払いをしているからだだった。

勇者ギャレンは普通に魔物を単身で倒している。

森だからか虫系や植物系の魔物が勇者に立ち塞がるけれども、上手く回避して適格に倒していく姿はルーカスさんと重なる。いや、さすがにルーカスさんほど人外じみた動きをするわけじゃ無いけれどね。

炎系の魔法《ファイア》をうまく使いながら、剣で魔物を切り払う姿はさすが通った感じだ。

「ふう……この辺りの魔物はあらかた倒し終えたかな……」

勇者ギャレンは剣を収めてそう言うと、周囲に声が響いた。

あの暗殺者とは違う声だった。

『クスクス……キミがこの世界の勇者だね?』

『クスクス……弱そう弱そう! サツサと殺しちやおうよ♪』

幼い子供の声だった。

だけれども、こう背筋が凍りつくようなおぞましさを感じる声だった。

「何者だ?!」

勇者は剣を抜く。

「ユリ、アカリ！ 出番だ！」

「う、うん！」

「行くわよ！」

私達は勇者のもとに駆けつける。

二つの影が勇者の前に降り立つ。

「幼子……？」

白いフードを被った双子だった。

半分ずつ仮面を被っており、その仮面はまるで道化師のような仮面だ。

半分見える素顔は、どちらの性別か判別できない容姿をしている。

『クスクス……弱そう弱そう』

『クスクス……サツサと殺しちやっってお仕舞いだね♪』

『どうやって殺す？』

『それじゃあ、強力な魔物に食べられちゃったってお話はどうかかな？』

『いいね♪ そうしようしよう♪』

楽しそうに勇者の殺害する方法を語り合う幼児……不気味以外の何者でも無いね。

双子が手に持っている杖で地面を突くと、魔法陣が広がる。そして、巨大でおぞましい魔物が出現した。

「な、なんだ?!」

勇者は後退りをする。

「ベヒーモス……!」

ルーカスさんはそう呟きながら、勇者の前に出る。

ベヒーモス……まさに、FFなんかで見かけるようなその魔物が私たちの眼前に出現していた。

『ん? あー! 《赤の勇者》! また邪魔しにきたの?!』

「《白い双子》がお出ましかよ! 勇者、下がってな!」

「え、あ、あんた達は?!」

「良いから下がってな!」

私達もようやくルーカスさんに追いついた。

「行くよ、朱莉ちゃん!」

「任せて! 由利ちゃん、このカードを使って!」

私は朱莉ちゃんから手渡されたカードを翳すと、腕にカードリーダーが出現した巻きついた。

カードはバハムートのカードだった。

私はカードリーダーにバハムートのカードを挿入する。

「バハムート……召喚！」

カバーをスライドさせると、音声が鳴る。

《Summonraize!》

《Summons

mit 天gro 空• のen 支Fl 配• 者gel をn

Lineal 大des いHim なmels る

Wieder 蘇beleb れtes バBahamut ムト》

空が歪み、そこからカードに描かれたドラゴン……バハムートが出現した。

ルーカスさんはルーカスさんで全力で戦うための準備をしていた。

「限定解除を申請！」

ルーカスさんが宣言をすると、ルーカスさんを中心に炎が吹き出した。

『申請受諾！ 承認！』

炎を纏うと、鎧や持つている剣が本来のものに置き換わっていく。

そして、髪やマントが燃え盛るように靡く。

『おっしやあ！ 全力で叩き潰してやる！ 《白い双子》！』

ルーカスさんはそういうと、炎の大剣を手にベヒーモスへと突撃する。

《召喚者よ、我を使うか》

「お願い！ あの化け物……ベヒーモスを倒して！」

《……良いだろう。上手く使って見せるが良い》

私は魔力をバハムートに譲渡する。

そこからはまさに別次元の戦いであった。

『クスクス……《赤の勇者》がボク達を倒せるかな?』

『うっせえ黙れ!』

《白い双子》とルーカスさんが戦い、ベヒーモスとバハムートが戦っている。

炎を纏って加速するルーカスさんの攻撃をひらりひらりとなんでもないように回避する《白い双子》はたしかに、人外であった。

完全にルーカスさんに任せるしかないだろう。

問題はこつちの大怪獣決戦である。

バハムートが空を飛びベヒーモスを牽制して攻撃している。

対してベヒーモスは炎を口から吐き出し、バハムートを落とそうとしている。

「由利ちゃん!」

朱莉ちゃんがカードを渡してくれる。

「ウインドブレス?」

「相手がベヒーモスだからね! 炎属性と聖属性は通らないと思って」

「わかったわ」

私はカードリーダーにカードを差し込む。

《Angriffraize!》

《Wind Atem!》

すると、私の中から魔力が少し多めに減る。

《ふん、良いだろう。ウインドブレス!》

バハムートは少し上空に舞い上がると、風のブレスを放った。

「きやあああああ!」

「こつちにまで余波があああ!」

突風が私達を襲う。

直撃を受けているベヒーモスはダメージを負っているように見える。

「GYAOOOOOOOOOOOOO!!」

ベヒーモスは火球を3連発放つも、バハムートはひらりひらりと回避する。

《知能はないが、体力はあるらしい。ふん、魔法で吹き飛ばしてやろう》

バハムートがそう言うと、朱莉ちゃんが持っているカードデッキからカードが飛んできて、自動でカードリーダーに挿入された。

「えっ?!」

《Angriffraize!》

私は驚く以外になかった。

《Ende der Fackel!》

《我が魔法を受けるが良い! 《フレア》!》

バハムートはそう言うのと、ベヒーモスに対して魔法を放った。

私の魔力が多めに減少する。

熱の膜がベヒーモスの周囲に出現し、ベヒーモスを中心に収縮する。

「っ! まずい!」

勇者ギャレンが私たちの前に出て、盾を構えた。

同時に爆発が起きる。

ベヒーモスを中心に爆裂したその威力は凄まじく、その爆風に翻弄されてしまう。

「きゃああああああああああああ!」

私と朱莉ちゃんの悲鳴が重なる。

《しぶとい奴め》

バハムートの声が聞こえ、目を開くと爆心地にはボロボロになったベヒーモスが立っていた。

周囲の木々は薙ぎ払われており、ルーカスさんと《白い双子》の戦いもよく見えるようになった。

カードをキャッチすると、そこには《メガフレア》と書かれていた。「これってFFの……!」

私はカードを挿入する。

《Letzter Angriffraize!》

《Mega Flare!!》

私の中から魔力のほとんどが抜けてしまい、膝をついてしまう。

《我が究極の一撃で葬ってやろう! 究極の竜の吐息を喰らい、全てを焼かれるが良い! メガフレア!》

バハムートの口にエネルギーが溜まる。と同時に、私の前にバリアが展開された。

そして、放たれる究極の一撃。

バリアのおかげで平気だけれども、あたり一帯が爆散してしまう。

『あーあ、やられちゃった。つままないのー』

『つままないのー、おもしろくないのー』

『待ちやがれ!』

ルーカスさんの声と双子の声が聞こえる。

『でも、他の方法もあるから』

『また遊ぼうねー』

《メガフレア》の煙が晴れる頃には、すでに双子の姿はなかった。

ボロボロの炭になったベヒーモスの残骸と、平然としているルーカスさんの姿がのこっていた。

『ちっ、逃げられたか』

ルーカスさんはそう言うと、この世界にきたときの姿に戻る。

《ふっ、召喚者よ。精進するが良い》

バハムートはそう言うと、天空の彼方まで飛び去ってしまった。と同時に、カードリーダーからカードが飛び出す。

カードの柄はフェニックスと同様に消えてしまった。

「あ、あんたら、一体何者だ……？」

驚いた表情をした勇者ギャレン。

そんな彼の言葉に答える気力は、私には残っていないかった。

8話

私は魔力が尽きてしまい、その場に膝をついてしまう。

「由利ちゃん、大丈夫?!」

「う、うん、魔力が尽きちゃっただけ……」

勇者ギヤレンが近づいてきて、私に青色の液体が入った瓶を渡してくれた。

「魔力水だ。それを飲めば回復するはずだ」

「あ、ありがとう」

蓋を開けて液体を飲むと、ラムネ味のする甘い水だった。

すつとした感じもあるので、ハーブのフレーバーが入っている感じもする。

即効性があるのか、飲んだら少しだけ魔力が回復した気がした。

「……で、助けてもらってなんだが、あんたらは一体何なんだ？ あんな化け物を倒す召喚獣を使役するとかいったい何者なんだ？」

そういうわれても、私たちも困る。

召喚獣だって、カードを使って召喚しているだけだし、私には制御できている感じがしなかった。

「ユリ、アカリ、無事だったか」

ルーカスさんが駆け寄ってきた。

「ええ、無事よ。バハムートを召喚したのは不味かったみたいだけれどね……」

「いや、ベヒーモス相手だ。いい判断だったさ。ユリが召喚術者として未熟だったから制御が効いてなかったただけだな」

そう言われても、どうすればいいのやらといった感じである。

「私、召喚獣を呼んだの2回目なんだけど……」

「……そうだな、今度、召喚難易度の低い召喚獣を呼んで訓練するとうすうか」

私たちがそんな感じで話していると、勇者ギヤレンが割り込んでくる。

「いや、待ってくれ。あんたらは一体何なんだ？ あの敵は魔王の配下の連中か？ 教えてくれないか？」

私たちがルーカスさんを見ると、ルーカスさんは頭を掻いて答えた。

「あ……あの《白い双子》は俺らの敵だ。魔王とは関係ないわけじゃないが、勇者……あんたが相手にするべき敵じゃない」

「……？ どういうことだ？」

「ルーカスさん、ここで話すのもなんですし、いったん村に戻りませんか？」

半分クレーターと化しているこの場所で話すのは、なんとというか落ち着かなかった。

私たちのいる場所だけが草木がそのまま、それ以外の周囲が爆風でえぐれて一部はマグマ化しているのだ。

こんな場所では落ち着いて話もできないだろう。

「そうだな。ユリ、立てるか？」

「うん、大丈夫です」

「俺が肩を貸そう」

勇者ギヤレンに支えてもらおう。

「あ、ありがとうございます」

「いや、礼には及ばないさ」

私たちは戦闘地域を離脱して、村に戻ったのだった。

◇

村に戻ると騒然としていたけれど、勇者ギヤレンが戻ると村人たちは安どしたようだった。

バハムートのメガフレアが原因とはいえ申し訳ない気分になる。

私たちはギヤレンさんが泊まっている宿の部屋に通された。

「で、詳しい話を教えてもらえるのか？」

促すギヤレンさんにルーカスさんがうなづいた。

ちなみに、自己紹介と軽い事情説明は道中でしている。

「ああ、俺たちの目的はあの双子……《白い双子》の討伐だ。そのために俺たちはほかの世界から奴を追いかけてきたわけだ」

「……それは理解できる。あんたらは俺よりも力があるようだし、あの不気味な双子と召喚された魔獣を撃退したわけだしな」

私としてはあれは自分の力ではないので何とも言い難いけれどね。

バハムートは確かに強力な召喚獣だったけれど、今はカードにはバハムートの柄はない。

フェニックスも、カードにはなかった。

もしかしたら再契約をする必要があるのかもしれない。

私の考察だと、お試し契約みたいなものだと思っている。

「だが、その《白い双子》だったか？ あの双子の狙いは俺のようだったか……」

「奴らの目的は世界の破壊だからな。手っ取り早く《勇者》を殺すことにしたんだろう。

この世界の《勇者》はお前さんだからな」

「勇者……？ 確かに俺は王から魔王を討伐するように使命を言い渡されたが、その勇者とやらは俺の……先祖様のことと俺じゃないだろうに」

「でも、街中の人たちはアンタを勇者だともてはやしていたようだけど？」

「あれは勝手に連中が期待しているだけだ。俺はご先祖様からの伝承と、個人的な恨みによつて旅を引き受けたにすぎないのさ」

それでも、単独で魔王を倒す旅に出るだけすごいことだと思う。

勇者でなければ異常者だろう。

「でも、そんな過酷な旅なら仲間がいた方が……。それに、個人的な恨み？」

私の疑問にギャレンさんは答えてくれた。

「ああ、個人的な恨みだ。俺の家族は魔族……魔王の眷属によつて殺されたのさ。俺の目の前でな！」

ギャレンさんの顔がゆがんだ。それは明らかに怒りや憎悪といった感情であった。

「親父や兄さんのおかげで、俺と母さんは生き延びることができたが、妹や姉は目の前で無残に殺されたんだ！ 運よく逃げ延びた俺と母さんは城下町に住むことになったがな」

「……」

ルーカスさんは話を聞いてむつかしい顔をした。

「だから、この旅は俺の復讐の旅でもあるのさ。勇者の血を引いているって聞いて、チャンスだと思つたね。魔族の連中を俺の手で八つ裂きにできるチャンスだと」

「ギャレンさん……」

「そんな命がけの復讐の旅に、仲間なんて連れて行けるわけがないのさ。だからこれからも仲間を作る気はない。死んだらそれまでだと思っっているさ」

自嘲気味に話すギャレンさん。

勇者だと聞いて、なんとというか高尚な人物像を描いていたけれど、話を聞くとそうでもないんだなと思った。

「で、あんたらはなんであいつらを追っているんだ？」

「簡単に言うならば仕事だな。それに、俺たちも奴らから命を狙われている存在でもある」

「ふーん、そうか。お前らも大変だな」

ギャレンさんはそう言うと、私や朱莉ちゃんの方を見た。

「ルーカス、お前さんだけならわからなくてもないが、なんでこんな弱そうな女の子二人を連れているんだ？ そっちの方が気になるね」

私としても、実際巻き込まれただけだしよくわかっていない。

私は【資格者】というやつらしいのだけれども、そこについてもよくわかっていないのだ。

「ユリも奴らに命を狙われている。だから、対抗できるようにする必要があるんだ。アカリはユリの友人だな」

「そうか……。ん？ アカリは何故同行しているんだ？」

「そりやもちろん、由利ちゃんが心配だからに決まっているじゃない！」

朱莉ちゃんのセリフに、ギャレンさんは信じられないといった表情をする。

「そ、そうか。……。戦う力を持っていないのに、すごいんだな」

そう、朱莉ちゃんはずいこのだ。自慢の友人である。

大学に入学してからの付き合いだけでも、一番の友人であることは疑いようがない。

「とりあえず、お前らがやりたいことはわかった。俺の旅を邪魔する《白い双子》ってやつを倒すのが目的なんだな」

「ああ、そうだな。まあ、お前が死んでも魔王は俺たちが倒すことになるが、なるべくならお前が魔王を倒すのが望ましいからな」

「……理屈はわからんが、まあわかった。あいつは俺じゃあどうしようもなさそうだからな」

ギャレンさんはそう言うと、ルーカスさんに近づいた。そして、握手しようとして手を差し出した。

「あんたらが俺の旅に同行するのを認める」

それに、ルーカスさんは首をかしげる。

「いや、同行はしないんだが……」

「そうなのか?！」

私たちには「シユマリット」があるからね。移動手段が別にある以上は同行する必要はない。

「ああ、ユリの召喚術の練習もしたいし、アカリの訓練もしたいしな。お前が『白い双子』に襲われたら今日みたいすぐに駆け付けるさ」

「お、おう。わかった。まあ、奴ら以外に関しては手伝ってもらおうつもりはなかったから問題ない」

少し残念そうなギャレンさんだけでも、私たちが同行したところで足手まといだろうし、ルーカスさんが同行してしまうと勇者の成長を阻害しそうなので、仕方のないことなのだろう。

今日だって、私はバハムートの召喚ですっかり魔力を使い果たしてしまったのだ。

他の召喚獣を召喚しても同じように魔力が尽きてしまうなんてことは容易に考えられる事態だった。

「それじゃあ、俺たちはこれで失礼するよ。ユリ、アカリ、行くぞ」

「ああ、またな」

私たちはそんな感じでギャレンさんと出会ったのだった。

ギャレンさんは本物の勇者であるルーカスさんと比べて勇者と言われても疑問を感じるような人物像だった。

だけれども、魔王を倒そうという気持ちだけは間違いない本物であるように感じた。

……世界を救うっていったい何なんだろうね。

私にはいまだに何も見えていなかった。

◇

私たちは「シユマリット」に戻ってきていた。

どうやらルーカスさんがギャレンさんの部屋の入り口と「シユマリット」をつないでくれていたようである。

『それじゃあ、少し休憩にしようか。しばらく休んでいればユリの魔力も戻るだろうか
らね』

「う、うん……」

魔力を使い切るといふのはかなり精神的にクることがわかった。

正直、少し仮眠を取りたかったのでちょうど良かった。

「私はまだ元気なんだけど、どうしたらいいのかしら？」

『なら、アカリは俺と一緒に戦闘訓練でもしようか。ユリを部屋まで運んだら出発しようか』

「わかったわ」

という感じで、私は部屋で仮眠を取ることになった。

自分の部屋のベッドでゴロンと横になると、睡魔が襲ってくる。

本当に現実味のない出来事ばかりが続いていて、いまだに整理できていなかった。

「ふあ……」

魔法だの異世界だの勇者だの今までの生活から考えられないくらい一変した生活を送っているけれども、いまだに順応できていない自分がある。

早く元の世界に帰りたいなあ……。

そんな事を考えているうちに、私はすっかり寝入ってしまったのだった。

9話

私は来栖朱莉。

大学2年生で今は《異世界を救う旅》を親友の篠崎由利ちゃんと一緒にやっているところだ。

といつても、始めたばかりで何もわかっていないのが現状ね。

私たちを案内してくれているルーカス……ルーカスIIブランドンIIアーベルライドって言うんだけれど、この物語に出てきそうな勇者様ですらわかっていないのだから、どうしようもないのかもしれないわね。

どっちにしても、由利ちゃんは「破滅の案内人」って悪の組織に狙われているみたいだから、お世話になるしかないんだけれどね。

そもそも、大学生になるまで……正確に言うならばあのカードを拾うまで襲われなかったという点が気になるところではあるけれど……。

考えれば、あの強大な力……召喚術を操れるから狙われたと考えるのが今のところ一番妥当だろうと私は考えているわ。

さて、前置きはこれぐらいで、今は魔力を使い果たした由利ちゃんを「シユマリット」

に預けて、私はルーカスさんと訓練をすることになったわ。

今のままでただの足手まといだしね。

今いる世界はレベルを上げれば強くなる世界みたいだし丁度いいわ。

「えい！ やあ！」

私は掛け声を出しながら、剣を両手に魔物と戦う。

対処できない魔物はルーカスさんが片づけてくれるので、目の前の魔物に集中すればよかった。

本来は持っている件は片手剣なのだけれども、私の筋力ではぎりぎり片手では持てないので、両手で戦っている。

「……だいぶ様になってきたな。少し休憩するか」

「わかったわ」

1時間ほど戦ってみたけれど、レベルの上りはそこまでいいわけじゃない。

もともとのレベルが低かったので2ほどレベルが上がったけれどもね。

頑張りが数値として反映される世界なので、元の世界で頑張っていたダイエツトよりもやりがいは感じる。

「うーん、まだまだね」

私は自分のステータスカードを更新して、そうつぶやいた。

仮面ライダーみたいに、強化装甲をまとって戦ったりできれば簡単なんだけれどね。私は由利ちゃんみたいに特殊なアイテムを持っているわけじゃないので、地道に努力するしかないさそうである。

「アカリはどうして頑張るんだ？」

ルーカスさんが私の隣に座って、そう聞いてきた。

「由利ちゃんについていくつて決めたのは私だからね。その分頑張らなくちゃって思ったのよ」

そもそも、私は由利ちゃんに助けてもらったことがある。その恩を返し切れていないのだ。

由利ちゃんにとっては何気ないことだったのだろうけれどもね。

「そうか、その心意気は十分伝わっている。……人にはやる理由はいろいろだしな」

「そうね。それよりも、私はルーカスさんについて知りたいわ」

「俺？」

私はうなづいた。

だって、何年も……ルーカスさんの話を真に受けるならばそれこそ永劫の時を世界を救うために生きるなんて、尋常ではないからね。

「……そうだな。まあ、俺もギャレンと同じなんだよ。世界を救うことは俺の目的に合

致しているんだ」

ルーカスさんは自嘲気味にそう言った。

「それって、『白い闇』って奴のこと？」

「ああ、あいつは俺が倒すべき相手だ。だからこそ、俺には長い時間が必要なんだ」

ルーカスさんと『白い闇』の間に何の因縁があるかはわからなかったけれど、いつも勇者然としているルーカスさんの顔に影が差す程には因縁があるということがわかる。

私が聞いてよかつたのだろうか？ という疑問がわいた。

「ん、おつとすまないな。まあ、俺にも俺の目的があつて世界を救っているわけだ。納得したかい？」

「うん、まあちゃんとは人間的な理由で安心したわ」

でも、ルーカスさんの話を聞くのならば、あの人外レベルで強いルーカスさんをもつてしても長期間「破滅の案内人」を倒すことができているということになるんじゃないかしら。

そもそも、あの『白い双子』との戦いを見ていると、人間があんな戦いのできるのかと驚くしかなかった。

私じやとてもじゃないけれど、あんな化け物を相手にすることなどではしなないと思う。

「ルーカスさんはどうしてそんな強さを持つているの？」

「うーん、これを説明するには、俺が俺の世界を救った時の話をしなきゃならないんだよな……。かなり長くなってしまふから、また今度でいいか？」

「大雑把に、ルーカスさんが世界を救う過程で手に入れた力ってことでいいのかしら？」
「ああ、その認識で間違つてはいない。まあ、基礎の部分は力を手に入れる前から研鑽してきたものだから、アカリも俺みたいな強さは無理にしても、ユリを守るだけの強さは手に入れられるさ。代償は努力と経験だがな」

守るつてのは違ふけれども、私は由利ちゃんと同じ道を歩くために努力を怠るつもりはない。

だから、私でも出来そうな魔法を習得したかったわけだしね。

この世界でいう初級魔法の《ファイア》や《アイス》ぐらいならば使えるようになったけれど、まだまだだろう。

由利ちゃんはカードを使いさえすれば詠唱すらなしで魔法や召喚獣を召喚できるものね。

……正直、由利ちゃんはチートを手に行っているのだ。追いつくには相当の努力が必要なのはわかっている。

「……わかっているわ。それじゃあ休憩はおしまいね。訓練、よろしくお願いするわね」

「はいよ。それじゃ、次の狩場に移動しますか」

私たちは「シユマリット」で次の狩場に移動して訓練を再開するのだった。

◇

「おはよー」

私が目を開けると、朱莉ちゃんの顔が見えた。

「うん、おはよう」

私は起き上がると伸びをする。

魔力を感じ取れるようになったからわかるけれども、だいぶ回復したように感じる。

「あれ、朱莉ちゃんなんかたくましくなったね」

なんかそんな感じがしたので、私が感想を伝えると、朱莉ちゃんは理由を答えてくれた。

「……そうかしら？ まあ、由利ちゃんが寝ている間にレベル上げしていたからそのせいかもしれないわね」

「そうなんだ。……私、ただ寝てたのかしら？」

私がちらりと部屋の時計を見ると、3時間は寝ていたようだった。

「うーん、あつちとこつちじゃ時間の流れが違うからわからないけれど、時計を見る感じだと3時間ぐらいね」

「結構ぐっすり寝ちゃったんだね……。私も召喚術をちゃんと扱えるようにならなくちゃいけないのに」

私はため息をついて、クローゼットを開ける。

「あ、朱莉ちゃん。着替えるから外で待っててね」

「オツケー。動きやすい服装が良いと思うよ」

「うん、そうするー」

私は朱莉ちゃんと同じように動きやすそうな服を選ぶ。

現地で服を購入してもいいんだけどね。洋服を買うのは好きだし、おしゃれも普通に気遣っている方だし。

さすがに、白ギャル風のものを持つてはいけないけれど、組み合わせで作ろうと思えば作れる程度には持っているけれどね。

とりあえず、適度にいい感じで動きやすい感じのポップな感じの服を選ぶ。

「うーん、これがどんな感じに変換されちゃうかわからないのがなあ……。やっぱり現地で買った方がいいかも」

素材感だったりポリエチレンの素材は変換されちゃうと少し変わった布っぽい感じになって質感とかが変わっちゃうんだよね。

まあ、あまり時間をかけるわけにもいかないんで、さくつと選んでしまおう。

この部屋は私の部屋がそのまま再現されたというだけあって、備品とかは私の部屋にあったものそのままが置いてあった。

つまり、化粧品なんかもそのままなのだ。

寝る前に化粧は落としちゃったから、ナチュラルメイクでさつと化粧をしてしまう。もちろん、乳液とかでケアをした後でね。

「……………これでよしっ」と」

地味すぎず派手すぎない感じかつ、ちよつと清楚っぽく見えるようにしてみた。

下はパンツなんだけれどね。

結構動きやすい感じに仕上がったので、戦うにしても大丈夫だろう。

私は準備を終えると、部屋の外に出たのだった。

◇

私は朱莉ちゃんとの差を取り戻すためにも、さつそく召喚の練習を始めようと思っ
た。

だけれども、ルーカスさんは自分では召喚術の指導はできないということなので、私
たちは召喚術に詳しい人に話を聞くことにした。

この「シユマリット」にも当然ながら召喚術にたけた人がいるようで、ルーカスさん
は「レイン」と呼ぶ人がその召喚術師らしい。

めったに外には出てこない人で、世界を救う仕事に取り組むメンバーの時だけ顔を出す変わり者だそうだ。

「で、そのレインって人に会えるの？」

『……わからないな。もしかしたら別の世界に行っているかもしれないからいいかもしれないしな』

「そういうところって情報の連携がされていないんだね……」

『英雄つてのは得てして自分勝手なものだからな』

ルーカスさんはため息をつきつつ、レインって人がいるらしい部屋の前で立ち止まり、ノックをする。

『おーい、レイン！ 居るか？』

無反応である。

まあ、わかっていたことではある。

「召喚術について聞きたいんだけどー？」

朱莉ちゃんも加わってノックする。

コンコン扉をたたく音が廊下に響く。

「おーい！ 出てこーい！」

激しくたたいても無反応だった。

「……」

すると、朱莉ちゃんは何を思ったか、ノックで音程を取り出した。

「ネコふんじやつた？」

「〜♪」

朱莉ちゃんはノック音でネコふんじやつたを演奏し始めた。

『お、軽快な感じだな。ユリの世界の曲なのか？』

「え、ええ。ネコふんじやつたって曲なんだけれど……」

『なんだそりゃ』

ルーカスさんは苦笑をする。

でも、あのモーツァルトでも『俺の尻をなめろ』なんて曲を作っていたりするのだ。

「それじゃあ次の曲よ♪」

朱莉ちゃんは扉を太鼓の達人に見立てて、曲を演奏し始める。

「これって……。」

「あいみよんの曲じゃん！」

「あ、やっぱりわかる？」

「結構有名なやつだしね」

ルーカスさんは呆れた表情をしている。

まあ、いるかないかわからないけれども出てこないレインって人が悪いのだ。仕方ないよね。

朱莉ちゃんがしばらく演奏をしていると、ドアノブがガチャリと動いた。

『う、うるさい!! い、いい加減にしてよね!』

出てきたのは、青い髪色をしたモヤシ男であった。

朱莉ちゃんはずかさずガシリとそいつの腕をつかむと、部屋から引き釣り出した。

「ほら、出てきなさい!」

『う、うわあああ!』

勢いに負けて、青もやしはその場に膝をついた。

『レイン、居たのか』

『ヒイ! る、ルーカスじゃないか。な、なんだいその元気なじよ、女子は……?』

どうやら、彼がその召喚術が得意なレインって人らしい。

『新しい【資格者】とその友人だ。元気な方が友人のアカリ、こっちが【資格者】のユリだ』

『そ、そうなんだ。フヒツ、で、ぼ、僕に一体何の用なんだい?』

なんとというか、陰キヤのオタクってイメージである。

実際、レインさんの顔立ちは普通より若干マイナスな感じである。

体型もふとましく、本当にルーカスさんみたいに世界を救った人物なのか疑わしい感じがする。

「あんたって、召喚術が得意なのよね？」

『あ、ああ。ぼ、僕の唯一の取柄だしね。フヒッ』

どうやら、ルーカスさんの言っていることは間違いなかったようだ。

「あの、私に召喚術のことについて教えてほしいんですけど……」

『……』

レインは私の顔をじつと見ると、「えっ」という表情で固まってしまった。そんな彼の様子に、私たちは顔を見合わせたのだった。

10話

『召喚術について知りたい……?』

ルーカスさんがレインに説明をすると、レインはむつかしい顔をする。

『ああ、ユリは召喚術師だから、その基礎を一番世界を救っているレインが教えれば参考になるかなと思ってな』

正直、私としてはこのレインって人に教えてもらうのはなんだかいやである。

見た目が不潔な感じだし、オタクといってもこういう不摂生な感じの人はちよつと遠慮したい。

だけれども、ルーカスさんが推薦するならば我慢ぐらいはする。

『ふ、ふーん。で、でも僕に聞くよりは、あ、アイリスさんのほうが詳しくお、教えられるとお、思うよ。フヒツ』

『そうなのか?』

『う、うん。ぼ、僕は感覚的にやってるだけだからね……。教えるのは苦手……。』
いわゆる天才というやつなのだろう。

感覚的にやって成功する人は、人に教えることができないというやつである。

『むう……そうか。それはすまなかつたな』

『じゃ、じゃあぼ、僕はこれで……。フヒツ』

レインはそう言うと、部屋の扉をボタンと閉めてしまった。

『すまない、当てが外れたようだ』

「いや、大丈夫です」

正直、彼から手取り足取り教えられるのは嫌だったのでよかつたと私は安堵していた。

もうちよつと挙動不審なところとか、清潔感のないところを改善してほしいものである。

私もオタクだけでも、一番気を付けているのは服装の清潔感だしね。

「で、アイリスさんってあのお姫様のことよね？」

アイリスⅡルウⅡノーデルヴェルク。

まさに物語に出てくる絶世のお姫様といった感じの人だったけれども、貴族様な感じであまりいい印象がない人である。

『そうだ。彼女も確かに召喚術と魔法を使うんだが……。まあ仕方がないか』

ルーカスさんは頭を掻きながら、むつかしい表情をした。

「なんていうか、世界を救う集団って変な人が多いわよね」

「そうだね……。まともなのはルーカスさんぐらいなイメージしかないよ……」
フィリップさんはマッドサイエンティストってイメージだし、チャンさんに関してはよくわからない。

車掌さんであるウーヴェエさんに関しては、なんとか超常的な感じがする。

唯一、食堂の橘花さんやサリアさんがまともな人物の印象である。

……それでいいのか「シユマリット」！

『アイリスはいつも談話室で読書をしていることが多い。今いるかはわからないが、行ってみることにしようか』

私たちはうなづいた。

呉越同舟ではないけれども、同じ列車に乗る関係性である。

どっちにしても避けては通れないので、それが前倒しになったと思うことにした。

談話室には、ちょうどアイリスさんが一人で読書をしているところだった。

入室した際の扉の音を聞いてか、アイリスさんがこちらを見ていた。

『ルーカス！ ……それに、新参者ですわね。フィリップはいませんかよ』

アイリスさんのルーカスさんを見る目があからさますぎる。

私たちは顔を見合わせて苦笑する。

『アイリス。頼みたいことがあるんだけど、時間はいいかな？』

『……新参者についてかしら？ 私から言うことは何も無いといったはずですけど？』

『俺が教育担当みたいなものだからね。協力してくれると嬉しいんだが』

ルーカスさんが苦笑いを浮かべてそう言うと、アイリスさんはため息をつけてルーカスさんをじとーつと見る。

『では、今度私と二人でお買い物に付き合ってくださいる？』

『ああ、構わないよ』

『……』

アイリスさんはため息をついた。

ルーカスさんは朴念仁なのかな？

物語の主人公にはよくある話なんだけれどね。

アイリスさんの方からデートに誘うということは、つまりそういうことなのだろうと私たちは察した。

『……いいですわ。で、私にどのような御用ですの？』

『ああ、レインから召喚術について詳しいのはアイリスだって聞いてね、ユリも召喚術を使うんだが、うまく制御できていないみたいなんだ。だから、召喚術のコツみたいなのを教えてほしい』

言われて、アイリスさんがじっと私を見る。

『……本当に？ 服装から見れば私の世界のような魔法の発達した世界ではなくて、科学技術が発達した魔法とは無縁の世界出身のように見えますが……』

「え、ええ、そうですよ」

『……とりあえず、デイグラット、でしたっけ。そこに向かいましょうか。貴女の召喚術がどのようなものか確認させてくださいな』

「は、はい！」

というわけで、私たちはアイリスさんを連れてデイグラットへ向かうことになった。

◇

降り立った先は村から離れた草原地帯だ。

アイリスさんがすぐさま人除けの魔法を使ったので、この場所に来る人はいなくなつたと言っていた。

「さて、召喚術を教えるにあたってはユリがどんな召喚術をつかつて召喚獣を使役しているのかを知る必要があります。……そうね、契約している召喚獣の中で最もコストの低い召喚獣を召喚なさってくださいな」

「契約……？」

私はカードに目を落とす。

このカードはウーヴェェさんに手渡されたものである。

そもそも、そういう召喚獣と契約なんてした記憶はない。

とりあえず、召喚獣カードの中からレア度が一番低い召喚獣……UCのイフリートのカードをかざした。

「イフリート……召喚！」

宣言すると腕にカードリーダーが出現する。

そこにイフリートのカードを挿入する。

《Summonraize!》

Summonraize! | PrimitiveのFlammengest |

Zeige Ifrit

空間に炎の玉が出現して膨れ上がり、割れた瞬間に獅子の顔をした赤色の筋肉魔人が

出現した。

《我を呼んだのは貴様か、召喚者よ》

「ええ、初めまして。少し待機してもらえますか？」

《構わぬ》

私が召喚したプロセスをまじまじと見たアイリスさんは、ルーカスさんにこう言った。

「ねえ、あれってフィリップの作品かしら？ なんなのあの装備は？」

「フィリップも興味津々だったな。ユリ、その装備について詳しく教えてくれないか？」
 そういわれても困る。

「えーつと、なんなんでしょうね、これ」

私が苦笑いでカードリーダーを見せると、アイリスさんが観察する。

「プロセスとしては、一般的な召喚プロセスを踏んでいる感じですよわね。詠唱はこの道具が代行している感じかしら。カード自体に強い魔力を感じるけれど……」

アイリスさんがイフリートに向き合う。

そして、手をかざすとイフリートに魔法を放った。

《Lean mise, Spirit of Fire!》

《それは出来ぬ》

イフリートは首を横に振った。

「……私が行使するよりも強い契約で結ばれているみたいですよわね。紐づけられているのはユリではなくて道具に入っているカードだと推測されますわね」

アイリスさんは私のところに戻ると、こう告げた。

「そうね、ユリが召喚獣と契約せずに召喚できている理屈はわかりましたわ。召喚士としての力量を上げる方法についても見当がつかまりましたわね」

「そうなんですか?」

アイリスさんはうなづいた。

「簡単よ。召喚獣と正式な契約を結ぶためには力を示せばいいんですの」

「力を示す……?」

私と朱莉ちゃんの声が被る。

「ええ、召喚獣は依り代……つまりは術者を要石として顕現した意志を持った聖霊ですわ。それはどの世界でも変わらない共通した事実」

もちろん、世界の理によつて運用方法は変わるけれどもね、と注釈を入れる。

「現在はそのカードが術者の代わりとしての要石になっている状態ですわね。道具を紹介してユリの命令を聞いてくれる仕組みになっているようですよ」

「は、はあ……」

私はカードリーダーを見る。これつてそんなすごい道具だったんだ……。

「だけれども、それでは召喚獣の力を100%引き出せないし、ユリの命令を無視する召喚獣も出てくるはず」

言われて、私はバハムートを思い出す。

確かにバハムートはベヒーモスと戦ってくれはしたけれども、勝手に技を放つたりしていた。

「だから、ユリが召喚術師としてレベルを上げるには、力を示して召喚獣と本契約を結ばばいいのですわ」

「……えっと、それってどうやるんですか?」

私の疑問に、アイリスさんはきよんとした表情をして、当たり前のように答えた。

「もちろん、召喚獣本人に聞くのですわ」

アイリスさんはそう言うのと、イフリートに向き直った。

「炎の精霊イフリートよ! この者と本契約を結びたい! 試練を受けたのだが、お前の試練を教えてほしい!」

アイリスさんがそうイフリートに語り掛けると、イフリートは返答をした。

《その力なき召喚者とか?》

「ええ、そのとおりよ!」

イフリートは腕を組み、こう答えた。

《我は力の強きものを好む。故に我が試練は我との戦いである。力なき召喚者に、我と戦う意思はあるか?》

急にそんなことを言われても、と思うけれども、引くわけにいかないことはわかつている。

だから、私はうなづいた。

「……戦うわ。そうじゃないと、この先生き残れなさそうなものね」

《良いだろう！ では、己が力を示せ！ 試練のために一時契約を凍結する！》

イフリートがそう言うのと、地面に降りてきた。

さて、戦うといつても、あの怪物相手に太刀打ちできる気がしなかった。

ちらりとアイリスさんやルーカスさんを見ると、手を出すつもりがないのか私から距離を取る。

逆に、朱莉ちゃんは剣を両手で構える。

どうやら、このイフリートの試練は私と朱莉ちゃんできなす必要があるようだ。

「確認だけど、複数人で戦うのはありかしら？」

朱莉ちゃんがイフリートに尋ねると、イフリートは首を縦に振る。

《認める。それも力だからだ》

唐突に私たちとイフリートの戦いが始まった。

私は早速デッキからカードを7枚引く。

手札には召喚獣2体と、魔法カード5枚があった。

私は早速、バフ系の魔法カードを使用する。

《Magieraise》

《Anf・nger Elementare Magie――Angriffskra

ftanstieg》

攻撃力を上昇させる魔法である。それを朱莉ちゃんに対して発動する。

朱莉ちゃんが少し輝いた感じがした。

「行くわよ!」

朱莉ちゃんがイフリートに駆け寄る。

そして剣を振るうが、イフリートは余裕で回避する。サイズ的には3mもあるのに、軽快な動きであった。

「次!」

私はすぐにカードを使用する。

炎に対して弱点を突くならばやはり、水・氷魔法だろう。

《Magieraize》

《Anfänger Angreifem—Magie—Gefroren》

と、不意にカードリーダーに挿入以外のリーダー部分があることに気づいた。

私はすかさず、その部分に召喚獣カードをスラッシュして読み取らせる。

《Erstes Blatt! Zweites St.ck!! — Upgrade

durchfhren》

氷の塊が出現し、一気に巨大になるとイフリートに向かって飛んでいく。

どうやら召喚獣の魔法をスキャンすると魔法の威力が向上するようであった。
《氷魔法か!》

氷の塊の嵐に、イフリートは避けきれずに何発か攻撃が当たる。

《面白い!》

イフリートが魔法の玉を私に向かってな放つ。

「キヤアアアアアアアア!」

私はとつさに転がってよける。

地面や石があるので痛いけれど、そんなことを言ってもらえない!

うまくよけきれずに、足にかすめてしまった。

「あつっ!」

かすめた部分の衣類は燃えてしまった。

「はああああああ!」

朱莉ちゃんが剣を振ってけん制する。

私はすぐにデッキからカードをドローして手札を補充した。

「うう………また召喚獣カード……!」

手札に残った1枚の魔法カードは回復魔法だ。

深刻なダメージを追っていない以上使うわけにもいかないだろう。

なので、再度ドロウする。

引いた魔法カードは、地面から水を噴出させる魔法だった。

「これだ！」

私はすぐさまカードを挿入し、召喚獣カードを3枚スラッシュする。

《Magier raise》

《Anfänger Angreifen—Magie—Brunnen》

《Erstes Blatt! Zwerites St·ck!! Drittes S

t·ck!!! — Upgrade durchfhren》

「いつけえええー！」

発動したのは、勢いよく地面から噴出した水の柱がイフリートにぶっかけられる魔法だった。

スラッシュした回数だけ本数が増えている。

《ぐわああああああ!! お、溺れる! 我空中で溺れる!》

ブシャーつともものすごい勢いで噴出する魔法の水は、不思議と周囲を洪水にしたりと
いうのはなかった。

「今ね! 必殺技行くわよ!」

朱莉ちゃんはそう言うと、剣を構える。

「《スラツシユストライク》！」

朱莉ちゃんの持つ剣の先がきらめくと、鋭い三連撃がイフリートに直撃した！

——ザンザンザンツ！！

それが決め手になった。イフリートは水の柱からはじき出されて地面に倒れたのだった。

◇

《我^{オレ}の試練は合格で良いだろう。召喚者……いや、契約者よ。貴様の名前を聞かせるがよい》

イフリートは自分を回復させると、私に向かってそう告げてきた。

「私は篠崎由利です」

《シノザキ・ユリか。了解した。では、契約者ユリよ。その道具を我^{オレ}に向けよ》

私がイフリートに言われた通りにカードリーダーを向けると、イフリートがカードリーダーに手をかざした。

炎が放たれて、カードリーダーを覆うとイフリートが虚空に消えて、カードリーダーからカードが飛び出る。

イフリートのカードが炎でおおわれると、UCからレア度が上がってRになったイフリートのカードが私の目の前に浮かんだ。

私はそれを手に取る。

「どうやら、本契約は完了したようね」

私はアイリスさんの言葉にうなづいた。

「やったね！ 由利ちゃん♪」

「うん！」

私と朱莉ちゃんは抱き合って喜ぶ。

それにしても、朱莉ちゃんがあんなに強くなっていたなんて驚いた。

「本来は、召喚獣がいる場所まで行ってから試練を受ける必要があるんだけど、なかなか便利な道具ですわね」

「そうなんですか？」

「ええ、私が契約している召喚獣も、私が自分の足で試練を受けに行つて契約しましたのよ」

なんとというか、アイリスさんの印象が変わる。

箱入りのお姫様って感じだったのだけれど、意外とアクティブでかつ研究者資質のあるお嬢様ってイメージである。

「……さて、まずは3属性の召喚獣と本契約を結ぶことをお勧めしますわ。水の精霊ポセイドン、雷の精霊トルあたりとの契約をお勧めしますわね」

私のイメージとしては、シヴァとかケツアコアトルなんだけれど、よく考えればシヴァってインドの神様だし、ケツアコアトルも南米の神様だ。完全にFFの影響だけでも、よく考えればバハムートって初出はFFじゃないっけ？

カードを見ると、ポセイドンもツールもUCで存在する。

ちなみに、シヴァやケツアコアトルはSRだったりする。

バハムートやフェニックスのカードはblankになってしまっているが、URだったはずだ。

「わ、わかりましたけれど、今日はもうこれで勘弁してください……」

たった一回戦ったけれども、かなり疲れてしまった。

ほんのわずかしかなかったけれども、それだけ神経をすり減らしたのだろう。

「それは、ユリのペースで構わないぞ」

というわけで、私は炎の精霊イフリートと本契約を結んだのだった。

この後ポセイドン、ツールとも契約を結んだのだけれど、イフリートよりは簡単だったりしたのはまた、別の話。

『面白くない面白くない！ 何度邪魔すれば気が済むの？』

『私たちの邪魔をしないでよね！』

『黙れ！ 《白い双子》！ ここでおとなしく退場しやがれ！』

目を追うだけでも精いっぱいいの速度で戦うルーカスさんと《白い双子》は、私たちにしてみればいわゆる《ヤムチャ視点》という奴だろう。

『一度帰ろう。つまんない』

『【楔】の当て馬にされて嫌な感じ。帰って別の方法を考えよう』

『ちっ！ 逃がすかつ！』

ルーカスさんが追いかけるが、《白い双子》は虚空に消えてしまう。

『ちい！』

ルーカスさんは舌打ちをすると、地面に着地してこの世界の姿に戻る。

「タイタン、ありがとう」

《契約に従ったまで。良い采配であった、契約者よ》

タイタンはそういって、地面に溶けて消える。

何度かの襲撃で私はタイタンとも契約を果たしていた。

カードリーダーからタイタンのカードが飛び出す。本契約を結んだ召喚獣のカードは再度使用可能になるまでの間だけ色が白黒になるが、絵柄は消えないようであった。

ちなみに、タイタンの試練は《正しい采配》だった。

「……しかし、お前らも成長したな」

ギヤレンさんは驚いた表情でそう言った。

「そうかしら？」

「ああ、ついこの間まではただの商人の娘かと思っていたが、今では前線で剣を持って戦うだなんて驚きだよ」

「まあ、剣はルーカスさんに教えてもらっているし、何より強敵と戦う機会が多いからね」

得意げに話す朱莉ちゃん。

私は完全に後衛なんだけどなあ……。まあ、前線で戦うのは怖いけれども。

朱莉ちゃんの動きは実戦で鍛えてきたおかげか、ちゃんと魔物と戦えるレベルである。

魔獣も前回の奴よりも強い魔獣だったけれども、特に苦も無く倒せるのはこちらの成長速度が上回っているからだろう。

「そうか、まあ、確かにルーカスから習えばそれなりに成長しそうだよな」

ギヤレンさんは苦笑しながらそう言った。

「アカリは才能があるからな。教えているこっちとしても楽しいさ」

「そうなのか。まあ確かに短期間でド素人から戦えるまでに成長したのは驚くべきことだけれども……」

朱莉ちゃんのステータスはすでに私の倍はある。魔法関連では私の方が突出しているんだけど、戦闘系のステータスの伸びは朱莉ちゃんが突出していた。

「それより、ギャレンさんの次の目的地は決まっているの？」

朱莉ちゃんの話に、ギャレンさんはうなづいた。

「ああ、レコンの村を魔物たちから救った時に聞いた話なんだが、どうやら魔王の住む島に行くために必要な3つの道具があるらしい」

それは先代の勇者が魔王を討伐するために使ったアイテムらしい。

アイテムの名前はそれぞれ「雨雲の杖」「太陽の石」「勇気の証」というらしい。

「……まんまね。まんま過ぎてびっくりしちゃうわ」

朱莉ちゃんが呆れたようにそう言った。

「あと、必要なのは、魔王を倒すための武器だな。昔、伝説の勇者が装備していた武器がどこかで保管されているらしいとも聞いた」

「○○の装備ね」

「伝説の勇者の名前はブレイドと言うらしいから、ブレイドの装備だな」

ブレイドの剣……日本語に訳すと大変なことになりそうだなと思った。

「まあ、原作通りなら雨雲の杖は祠に、太陽の石は王城の地下に、ロ〇のしるしはメ〇キド南方の毒沼の中に落ちてるはずね」

「ん？ そうなのかな？ 俺のきいた情報とは違うな」

「朱莉ちゃんはこの世界にあるゲームの話をしているから気にしないで！ で、それぞれどこにあるんですか？」

私が聞くと、ギャレンさんは答えてくれた。

「ああ、どうやら【大嵐の塔】の頂上に封印されているという伝承があるそうだな。俺はこれからそこを攻略しに向かうところだったんだよ」

「なるほどな。そこをあいっつらに邪魔されたのか」

ギャレンさんはうなづいた。

「だったら、急いだほうがいいかもしれないな。何か不穏なことを連中が言っていたし、重要な道具の回収は優先すべきだろう」

ルーカスさんの指摘に、ギャレンさんは少し考えた後、こう提案してきた。

「お前ら、この世界を救うのが目的だよな？」

「ああ、基本的には現地勇者の——この世界で言ったらお前が無事に魔王を討伐できるように支援をするのが目的だな」

「……なら、棟の攻略を手伝ってもらえないか？」

ギャレンさんの提案に驚く私たち。

「えっ?!」

「いやまあ、俺単独で攻略しても構わないんだがな。俺ではあの化け物の双子は太刀打ちできないし、棟を上っている最中に襲われれば、俺もあんたらも困るだろう? だったら、同行した方が話が早いだろう?」

「……」

ルーカスさんがギャレンさんの提案にむつかしい顔をする。

支援するのが仕事ならば、それもありだと思っただけ……。

私たちがルーカスさんを見ると、ギャレンさんの提案に答える。

「……そうだな、同行はしてもいい」

「え……」

つまりは、私たちも一緒に棟を上るということになる。

それはちよつと嫌かなあ……。

本当は魔物と戦うのも嫌だけれど。

「ただ、あくまで攻略するのはギャレン、お前だ。戦闘の支援については俺は手を出さない。それで大丈夫ならば同行しよう」

「ああ、それで構わないさ」

私たちが置いてけぼりだけれど、断れそうな感じではない。

「ユリ、アカリ、丁度いい機会だ。協力して戦って経験を積んでおくといいだろう。それに、屋内の戦闘は屋外とはまた違った要素があるしな」

「は、はあ……」

これは「シユマリット」に乗って省略はできないのだろうか？

「ルーカスさん、「シユマリット」で移動はできないの？」

「少なくともギャレンは載せられないな。塔を上ること自体が試練の可能性が高い。攻略できなければ《雨雲の杖》を入手できない可能性がある。それは俺たちにとっても困るだろう？」

それはそうだった。ゲームとかでは試練の攻略自体がフラグになっている場合もある。

たいていは塔の屋上にいるボスを倒せば大丈夫だけれどね。

「それに、得てして試練の場は外からの介入を拒む傾向にある。「シユマリット」での移動を弾かれる可能性もあるからな。おとなしくついていくのが得策だろう」

「うーん、まあ、そこまでいうなら……」

おそらく、ここまで言うということはルーカスさんはそういうのを経験しているということだろう。

そうであるならば私たちはおとなしく従う以外になかった。

「それじゃあ、ユリたちには準備も必要だろうし、塔の前で落ち合うことにしようぜ。塔の場所は……わかつてるか？」

「ああ、それは問題ない」

「なら、そういうことで。よろしくな」

そんなわけで私たちはギャレンさんと一緒に「大嵐の塔」を攻略することになってしまったのだった。

◇

私たちは「シユマリット」で塔の前まで移動していた。

リュックサックに食料なんかの道具を揃えて、キャンプをするための格好で臨む。

何気に、購買部では日本で売っているような機材も売っていたため、そこで道具一式を購入していた。

持ち込んだ際に現地仕様に変換されてしまっただけだね。

結果、フライパン、包丁、おたまなんかは例えばテフロンなんかの技術はその世界では再現できないためそのまま付与されていたりするけれども、取っては木材に置き換わったり、カセットコンロは火おこし部分がガスから魔法石に置き換わっていたりする。機能としては変わってないので問題はないんだだけだね。

リュックサックはプラスチックからこの世界における耐久性の高い素材に置き換わっていたりするけど、食材なんかはそのままであった。

「……準備万端だな」

ルーカスさんにおどろかされるけれども、正直食材なんかは足りないなと思っていた。

「まあ、足りない分は現地調達できればいいんだけどね。持ってきているのはこれでも二日分の食料程度だし」

「これは水か？ ペットボトルはそのままみたいだが」

「ペットボトルを知っているんですか？」

「ああ、お前たちの世界にもある程度の知見は持っているさ」

ちなみに、朱莉ちゃんも持つては来ているけれども、だいぶ軽装である。

自分用の寝袋だったりするらしい。

まあ、朱莉ちゃんは前衛だしそこまで荷物を持たないだろうということとは想定できる。

「私はポッキーとかお菓子を中心に持つてきたわよ。そっちの方はあまりかさばらないしね」

「そういえば売店に売ってあったよね」

「そうそう。こつちじゃなかなか食べられないからそのまま持ち込めて助かるわ」

朱莉ちゃんは腰に剣を、体に鎧を装備しているけれど、下に来ているのはキャンプ用品のアウターだった。

靴もスニーカーでギャップがすごい。

まあ、私もおしやれ度外視でキャンプの格好をしてるしお互い様である。

「そういえば、ギャレンさんは……？」

「そろそろ到着するはずだが……」

ギャレンさんの話題を切り出すとほぼ同時に、ちょうどギャレンさんが森の中から現れた。

「おお、お前から久しぶりだな。先に到着していたのか」

ギャレンさんが気づいたのか手を振って近づいてくる。

久しぶり、というのは「シユマリット」の移動は実質タイムマシンみたいに時間を調整して移動できるためだ。

過去には飛べないらしいけれど……。

ウーヴェェさんに理由を聞いたら、「過去に観測された時間には干渉ができない」ということらしい。

よくわからないけれど、タイムパラボックスとかそういうのだろうか？

「ギャレンさんこそ無事到着したようぞ」

「まあな。さすがにこの近くまでくれば、大嵐の塔は一目瞭然だからな……」

私はギャレンさんの目線を追って大嵐の塔を見上げる。

塔の6階以上は黒い雨雲に取り囲まれており見えない。

雨雲なのに周辺に雨が降っていないのは、魔力的な何かが雨雲を留めているからだろうか？

「それにしても大きい塔ね……。一体何階あるのかしら？」

「さあな。王城でも4階建てだから、よくわからん」

「あの取り囲んでいる雨雲は、大丈夫なんですかね？」

「それもわからんな。ルーカス、何かわかるか？」

ギャレンさんの質問に、ルーカスさんは首を横に振る。

「さあな。こういう系統の塔は何度か攻略したことはあるが、詳しい理屈なんかは結局わからずじまいだったからな」

「そうなのか……。そいつは残念だな」

ギャレンさんは好奇心を満たせず少し残念そうであった。

◇

塔の1階部分は、エントランスって感じのする広間だった。中央の柱には文字が書かれているように見える。

「あれは……う？」

ギャレンさんが疑問に思つて文字に近づいた。

「……読めないな。古代語で書かれているみたいだ」

私は……いや、私たちはばつちり読める。

世界に役割を与えられる際に言葉に関して読書会話ができるようになっていらい。

私が読もうとすると、ルーカスさんに制されたので、NG行為なんだと呆れる。

ちなみに、書いてある内容はこうだ。

【私の末裔よ。

ここを訪れるということは、私が封印した魔王が再び出現したということだろう。

私は魔王を倒すことは残念ながらできなかった。

この大嵐の塔には雨雲の杖を封印してある。

私の仲間の協力によって成し得た。

魔のものにはとけない封印をしている。

私の血を引くものだけが解くことができる封印だ。

これと太陽の石、私の紋章を用いることにより、魔の島へ虹の橋を架けることができるようになる。

世界をくれぐれもよろしく頼む。

——ブレイド」

そんな重要なことは書いてはない……というか、ギャレンさんが集めた情報そのままであった。

答え合わせみたいなのだろう。

「行こう。どっちみち答えはこの塔を上り切った先にある」

私たちはギャレンさんの言葉に従い、後に行く。

それにしても、この何階あるかわからない塔を足で登っていくのか……。

そう思うと気が滅入ってしまう。

エレベーターとかあればいいんだけどね。

道中、魔物が襲い掛かってきたりしたけれども、苦勞することなく討伐できるので基本的にはギャレンさんがなぜ解きをするのを待っている感じになった。

「……なんていうか、RPGのなぜ解きの塔つてもものすごく面倒くさいわね。作った人の気が知れないわ」

「二階一階上つていかないといけないもんね……」

「それに、私から見たらすぐに溶けそうな謎ばかりだしね。待っているのも退屈というか……」

私たちは雑談していた。

4階は大きな石を押しして並び替えるなぞ解きだ。

地面に色のついた魔法陣が配置されていて、そこに大きい石を押しして並び替えるものらしい。

ちなみに、私たちはルーカスさんから口出しNGをもらっているので、待っているという感じだった。

「……………うーん、こうじゃないのか……………」

ギャレンさんはIQは110ぐらいな感じであると私は思った。

私にすら答えは曜日に関係することを見抜いたというのに、いまだに悩んでいる感じだったからだ。

7個の特徴的な形をした大きな石と色のついた魔法陣。

曜日っていうのは私の世界だと太陽系の星々に関連付けられているけれども、この世界ではどうなんだろうね？

石の模様を見る感じだと星座に紐づけられているように見えるけれど……………ギャレンさんはいつそれに気づくのだろうか？

「……………ルーカスさん、ヒントもダメなのかしら？」

退屈すぎたのか、朱莉ちゃんがルーカスさんに尋ねる。

「ギャレンが聞いてきたならともかく、聞いてきていないならばヒントを与えるのはダメだろうな」

「そうなんだ……うーん、退屈ね」

ギャレンさんは石を一生懸命押して移動させている。

待っているだけってやつぱり退屈だよね。

「ん？ アカリ、剣を構えろ。魔物のお出ましだ」

「え、どこ？」

「そこだ」

いつの間にかリポップした魔物が、私たちに牙をむいていた。

……なんで人工物に魔物が出現するんだろうね、不思議である。

「知能の低い魔物だし、まあ、私たちには余裕ね。由利ちゃん、支援お願いね」

「任せて！」

私は魔法カードをかざしてカードリーダーを出現させる。

朱莉ちゃんは剣を抜いて構える。最初のころに比べれば、かなり様になっている。

「さあ、退屈しのぎになってもらおうよ！」

私はすぐに朱莉ちゃんに攻撃補助魔法をかけると、朱莉ちゃんは飛び出して魔物と戦い始めた。

魔物との戦いは割とすぐに決着がつく。

描写をするまでもなく、朱莉ちゃんの剣と私の魔法で退治してしまった。

「わかった！ 曜日だ！」

ギヤレンさんの声が響いたのは、私たちが魔物を討伐しきった直後であった。

まだ4階なのに、結構時間を食ってしまったのは痛いだろう。

2日分で足りなさそうだなーなんてことを私は考えていたのだった。

12話

6階……雲で覆われたエリアに入った。

実際、雲ができる高さはスカイツリーの頂上ほどの高さは必要だけでも、この塔は不自然に雲に覆われている。

おそらく、魔法だとかそういうものによって発生しているのだろうけれども、魔法自体が私たちにはよくわからないので理屈を知ったところでわからないまま終わりそうである。

5階から打って変わり、天井には「雲」が立ち込めており雨が降っている。私と朱莉ちゃんは折り畳み傘を取り出して差す。

ルーカスさんはそもそも存在が炎なのか、雨に濡れているのにたちどころに乾いてしまう。

唯一濡れてしまうのが、ギャレンさんだった。

「……お前ら、便利なもの持っているな」

「え、傘は普通にあるでしょ」

「いや、その携帯式の傘だよ！」

当たり前に傘を差していたけれど、確かに折り畳み傘なんて便利なものはこの世界にはなさそうであった。

「……そんなことより、これ以降の階って常に雨が降っている感じなんですかね？」
私は流すことにした。

傘さしっぱなしというのもなんだかんだで面倒くさい。

そもそも傘を差す必要のないルーカスさんには無縁の話だろうけれど。

「だろいな。もしくは謎を解くことによつて晴れるかもしれないな」

「謎……ねえ……」

ざっと見た感じだと、まるで扉を守るように水棲系っぽい感じの魔物がこちらの様子を見ているのがうかがい知れる。

魔物を倒すと扉が開いていく形式の仕掛けだろうか？

「今回はわかりやすいな！ よっしゃ、先に進もうぜ！」

今までのうつつぶんがあつてかギャレンさんは割とノリノリで扉に突撃していく。

魔物は特に特筆する強さもなく、ギャレンさん一人で余裕で片づけていく。

「たあああああ！」

サハギンっぽい姿をした魔物が3匹ギャレンさんに襲い掛かってくるが、攻撃をひらりと回避して叩き切っていく。

「いやー……やっぱり強いわねー」

確かに、朱莉ちゃんよりも明らかに動きが良い。

何度も死線を潜り抜けてきた勇者だからこそだろう。

ギャレンさんに切り捨てられた魔物は黒い煙になって消滅する。

後に残ったのは、ドロップアイテムが入った箱だった。

「うっし、これでお仕舞い！」

最後の一体を軽々と討伐すると、扉が自動で開く。

天井は意外と高いので、扉もその分重いかゴゴゴゴゴ……と音を立てて開く。

そして、その先にはまた扉と魔物の姿が見える。

「ああ、やっぱりそういう仕掛けか」

「うん、そうだね」

これは次の階に進むための階段に到着するまで正しい扉を選んで敵と戦う感じの仕掛けである。

「おっしやあ！ 次だ次！」

5階までのなぞ解きで頭を使ったギャレンさんには、魔物を倒す試練というのはちよ
うどよかつたらしい。

走って戦いに行くギャレンさんを追いかけて、私たちは進むのだった。

……

進んだ先は行き止まりだったけれど。

おそらく間違った分岐を選んでしまったのだろう、後ろの扉は締まり、目の前には古代文字の書かれた文字盤と魔法陣が設置されていた。

文字は「残念、最初からやり直し」と書かれている。

「はあああああ？ いや、なんで？」

ギャレンさんがくると私たちの方を見る。

「たぶん、正解ルートとは違う扉をくぐったからだ……」

「正解ルート？ またなぜ解きかよお!!」

先ほどの扉は、3つに分かれており、サハギン系水棲魔物が守る扉、ゴブリン系のおくある魔物が守っている扉、ゴーレムみたいな魔法生物？ が守っている扉になっていた。

ギャレンさんが倒したのは、ゴブリン系であった。

ギャレンさんがゴブリン系の魔物を討伐してしまうと、他の魔物は消え失せてしまったので、この扉を進むしかなかったのだ。

「いやー……リアルでRPGのなぞ解きをさせられると、ひたすらにうざいだけよね」

「私たちは解いてないんだけれどね。一番の負担は戦っているギャレンさんだと思う

よ」

「てか、ひたすら雨にぬれながら見守っているってのも結構つらいわよね……」

「確かに」

愕然としているギャレンさんに近づくと、

「ほら、ギャレンさん、魔法陣に入りましょう？ やり直さない」と

「あ、ああ……」

私たちはギャレンさんを連れて魔法陣に入ると、入り口の階段の部屋まで戻された。

「ユリ、アカリ、ギャレン、一度休憩しようか」

戻ってきたと同時に、ルーカスさんがそう提案してきた。

「そろそろユリたちも疲れてきただろう？ それに、時間としてもそろそろ夕食の時間

だ」

「……確かに言われてみればおなかもすいてきたわね」

「ギャレンさん、どうします？」

私がギャレンさんに聞くと、一言答えた。

「うん、休憩する」

◇

私たちは一度5階に降りて、階段のそばで野営をすることになった。

5階は6階と違って雨が降っていないからね。

「それじゃあ料理するから待っててくださいね」

私は早速コンロ……ガスコンロから魔法コンロに代わってしまったものを取り出す。

技術はこの世界のものに置換されるけれど、完全再現不可能だと変化しなかったりしてよくわからないルールで世界は動いているらしい。

とりあえず、手持ちにある素材で取り出したのは卵、玉ねぎ、人参とキャベツそれとジャガイモ、肉は鶏肉、塩とコシヨウにコンソメである。

飯盒炊飯セットもあるのももちろんコメも炊くことができる。

「コンソメってこの世界でもこの形を保持しているんだね……」

コンソメはブイヨンから作るのがこの世界での製法だろうけれど、味の素の固形コンソメを使えば簡単にコンソメスープを作ることができる。

「由利ちゃん、手伝う?」

「うん、飯盒の方をお願いしていい?」

「おお! ご飯! わかったー♪」

水は魔法で作り出せるけれども、ミネラルが含まれたものがやはりおいしい。食堂から水をペットボトルに移して持ってきてきて正解だった。

野菜を洗うのは魔法の水を使うんだけど、既に洗ってあることは確認しているの

で、さっと汚れを落とすために水を通す。

男が二人いるので、具材はごろごろしていた方が良さだろーと思ひ、大きめに切る。キャベツは一口大にちぎり、芯は食べやすいように薄切りにする。

ジャガイモは大きめに4分割にする。

人参は乱切りにして、玉ねぎは薄切りにする。

鶏肉は一通り下ごしらえをして一口大に切つて塩をまぶしフライパンで火を通す。

どつちみち煮てしまうので表面をカリツとなる感じで焼いてしまう。

鍋に下ごしらえをした野菜をさつと炒めて、水と固形コンソメを入れて中火で煮る。

キャベツは後で入れないとしんなりしすぎちゃうので後回しだ。

「へえ……手際良いな」

「そうかしら」

一人暮らししているしね。

友達と宅飲みするときもおつまみを作つて提供したりはする。

「よし、これで8分中火で煮ればいいわね」

腕時計で時間を確認する。

待っている間に、飯盒の方を確認する。

「どんな感じっ？」

「もう炊いているわ」

炎は魔法で調整しているらしい。

それにしてもつくづく魔法というのは便利である。そして、ガスコンロや水道水といった便利な文明社会と同等のことができているという事実には、どこかで聞いた【発達した科学は魔法と区別がつかない】という言葉を思い出していた。

本来だったら30分は水につけておく必要があるんだけど、10分ぐらいでやっているようであった。

まだ加熱中って感じで先にコンソメスープが完成しそうな感じだった。

まあ、スープだし冷めてもあつたためれば良いんだけどね。

「それじゃあ、付け合わせでも作ろうかな」

私は浅漬けの元を取り出す。

パッケージは変換されて紙になっているので取り外してしまう。

余った野菜を浅漬けのもとに浸してモミ混んで少しおけばすぐに出来上がるので、付け合わせにはちょうど良かったりする。

今回はキャベツが余っているので、キャベツを多めにしてきゅうりを混ぜて浅漬けにする。

プラスチックは基本的にそのままみたいなので、ジップロックも無事のようにだった。

そこに食べやすい大きさに切ったキャベツときゅうりを入れて、浅漬けのもとを入れてもんで放置しておく。

これで簡単にできるのだから、楽である。

「おお！ コンソメスープか？」

おいしそうなおいが漂ってきたのか、ギャレンさんが反応した。

「そうですね。コンソメスープにキャベツの浅漬け、それにライスです」

「すごいな……。母さんがコンソメスープを作るときは相当時間がかかっていたんだが……」

「そうなんですか？」

私はそんなブイヨンから作る方法では作ったことがない。

だから、Webサイトなんかで閲覧して作り方を知っている程度である。

「あ、そろそろ……」

私はコンソメスープ分のキャベツと、火を通した鶏肉を鍋の中に入れる。

おたまで混ぜながら、味を見る。

鶏肉に塩をまぶして焼いたので、塩分はちょうどいい感じかな？

なので胡椒を適量加える。

後は、鶏肉から出る灰汁を捨てながら煮込むだけだった。

……

「うまつ！ ユリって料理が上手だったんだな！」

「ああ、これならタチバナさんにも負けてないな！」

なんか好評で恐縮してしまう。

普通にレシピ通りに作っただけである。

ちなみに、私と朱莉ちゃんはお箸を、ルーカスさんとギャレンさんはフォークとスプーンを用意している。

「うん、このアサツケと言うのもなかなか！ いい感じの塩分が効いていてキャベツの甘みも感じられてなかなかライスと合うな！」

ああ、そういえば確かにこの世界は浅漬けはないのかもしれないなと思った。

異世界っていうか、海外の人にご飯をふるまっている感じがする。

「うんうん、由利ちゃんのご飯はおいしいよね〜」

「朱莉ちゃんも作るじゃん」

「私が作れるのはチャーハンとかカレーぐらいよ。実家暮らしだしね」

「それもどうかと思うなあ」

そんな感じで食事は進み、スープもライスも残らなかつた。

「いやー！ まさか野営でこんなおいしい料理が食べられるなんてな！」

「それはお粗末様でした」

私はバッグに調理器具を片づける。

明日の分の下ごしらえもライスが炊き上がる前にすませたので、準備は万端だろう。みんなおいしいおいしいって言うてくれるのはありがたいけれども、私はレシピ通りに作っているだけなので自慢できるようなものではない。

そもそも、私が作ったのは私の世界のコンソメスープである。

調味料に差異はないかもしれないけれど、野菜や肉なんかは生態系や交配によって味も変わってくるし、それに合わせた味付けなんかはしていないのだ。

「よし、それじゃあ今日はこれで休むとしようか。塔の攻略はまた明日にするとしよう」
ルーカスさんの提案に全員うなづく。

あの常時雨が降っている中を進むのはかなり体力を消耗するからだ。

事実、6階を少し攻略しているだけでも、何もしていない私たちですら結構体力を消耗していたのだ。

今日はしっかりと休んで、明日に万全の状態で挑むのが良いだろう。

そんな感じで、私たちは今日は休むことになったのだった。

◇

翌日、私たちは……主にギャレンさんが頑張って塔を攻略していった。

おいしい料理を食べて元気が出たとはギャレンさんの談であるが、朝から昇って行ったおかげでかなりのハイペースで塔を進んでいた。

お昼になるころには10階に到達しており、10階には休憩所みたいな場所があったためそこで昼食を作ってふるまう。

まあ、出来合いのハンバーグを焼いて、野菜と一緒に食パンに挟んでソースをかけたサンドイッチなんだけどね。

もちろん、ゆで卵のサンドイッチやツナマヨのサンドイッチも用意している。

これで元気が出てくれればなど思いながら作ったものだし、簡単なものだったけれどもみんな満足してくれたようである。

後半戦は、雨というよりも嵐といった方がふさわしいフロアであった。

雨だけでなく強風や、タイミングによっては雷まで落ちてくる。

「ひゃあああああー！」

朱莉ちゃんは雷が怖くて、落ちてくるたびに悲鳴を上げていた。

「こ、この中でボス戦とか聞いてないわよー！」

既に傘は役に立たなかったもので、私も朱莉ちゃんもレインコートを着ている。

そして、私たちは嵐の中魔物と戦っていたのだった。

11階の試練の内容は単純であった。

嵐の中、タコのような巨大な魔物と戦っていた。

「来るぞ！ アカリ！」

「ひゃあああああああ！」

朱莉ちゃんは雷に怯えながら魔物の攻撃を必死によけていた。

私は召喚獣を召喚することにした。

《Summonraize》

《Summon——Gro·er Blit·zeist——Harmoniere
Thor》

雷の召喚獣ツールだ。

バチバチと雷をまとった筋肉隆々の魔人が召喚される。

《契約者の呼び声に応じ参上した！ 我が名はツール！ 雷の神の名を与えられし召喚

獣である！》

「ツール！ お願い！ あのタコみたいなのをぶつ切りにしちゃって！」

《承知した！ 今夜の食事の一品はタコワサであるな！》

そう言うと、ツールは雷の中からトライデントを召喚した。

《だが、タコ焼きも捨てがたい！》

ツールは何故かご飯が好きで、魔物を倒した後どんな料理にするかを口にする癖が

ある。

試練は勇気を示すことであつたけれど、これがなかなかトラウマになる程度にはきつい試練であつた。

トールは巨大タコの攻撃をトライデントで受け流し、切りつける。

雷をまとつたトライデントは切り口を焼くので、焼いたタコのおいがする。

《ふん！ はあ！ どりゃあ！》

トールはギャレンさんと協力して巨大タコを切り刻んでいく。

朱莉ちゃんは……逃げ回っているのは仕方がなかった。

トールとギャレンさんの活躍で、巨大タコの魔物はなます切りになり倒すことができた。

残念ながら魔物なので、ドロップアイテムをおいて黒い煙になって消えてしまったけれども。

「ありがとう、トール」

《契約に従つたまでだ、契約者よ。また儂を呼ぶといい》

トールはそう言うのと召喚された時と同様に雷の中に消えてしまった。

「うし、この階もクリアだな。次の階に行こうか」

こうして、順調に攻略していった私たちは「大嵐の塔」全20階を踏破することに成

功するのだった。

「ここが最後の部屋か……！」

19階の階段を上るとすぐに豪華な扉が待っていた。

まるでこれからボス戦であるかのような扉だった。

扉の横には古代文字で「ここまで踏破おめでとう。次が最終試練だ。勇者である君一

人だけで挑むがいい」と書かれてあった。

「そうね。なんかボス部屋の前って感じだもんね！」

「最後の試練にはユリもアカリも手出しはできなさそうだな」

「そうなのか？」

ギヤレンさんの疑問に、私たちはうなづいた。

「うん、そうみたいね」

「そうか……。いや、あんたらについてきてもらって助かったよ。ありがとうな」

ギヤレンさんはさわやかな笑顔でお礼を言ってくる。

「それが私たちの仕事、だもんね」

朱莉ちゃんの言葉に私たちはうなづいた。

「よし、じゃあ行くぞー！」

ギヤレンさんはそう言うと、扉を開く。そこには転移魔法陣が設置されていた。

私たち全員がその部屋に入ると、魔法陣が輝く。

そして、フツと移動すると闘技場の観客席のような場所に私たちはいた。

ギヤレンさんは闘技場の真ん中にいる。

《我が試練をよくぞ踏破した！ 新しき勇者よ！ 真の勇者であることを確かめるため、最後の試練を与えよう》

まるで入場パフォーマンスのようなノリで闘技場に音が響くと、黒い影が入り口から入場してきた。

黒い鎧に黒い剣を持った姿はまるで伝説の勇者といった感じの風貌をしている。

「こ、こいつが伝説の勇者……ブレイド！」

ギヤレンさんの驚愕の声が聞こえる。

そんなに離れているわけではないので普通に聞こえるだけだけれどね。

《さあ、新しき勇者よ！ 剣を取れ！ 我が子孫として貴様の資格を測ろう！》

声とともに黒い影が剣を抜いた。

「面白いじゃないか……！」

ギヤレンさんはそうつぶやくと、剣を抜いた。

一瞬の間があり、《始め！》の声とともにギヤレンさんとブレイドの影の一騎打ちが始まったのだった。

13話

ギヤリンつと剣と剣がぶつかる音が響く。

ギヤレンさんがこの世界の伝説の勇者であるブレイドと戦っているのだ。

剣の技量はあきらかにブレイドの影が上回っているけれども、ギヤレンさんは意地で喰らい付いていた。

——正直、私には剣筋が早すぎて見えない。

ある程度慣れてきたとは言っても、こんな超人的な動きを見る事は出来てなかった。「す、すごいですね……」

私がそういうと、ルーカスさんが同意する。

「ああ、短期間だがここまで成長したのは、さすがは勇者つてところだな」

ああ、そう言えばルーカスさんも勇者だったね。

「だが、やはり押されているな。勇者ブレイドはさすがとしか言いようがないほど強い。《白い闇》に善戦するほどには技量があるんじゃないか？」

「基準が分かりにくいんだけど……」

「ああ、俺より数段は劣るが、世界によっては【剣聖】レベルと言われて称えられる程度

には凄まじい技量だ」

言われてもやっぱりよくわからない。

いや、【劍聖】なんて言われても私には判断つかない。

それは、朱莉ちゃんも同様だったようだ。

「……つまり、ルーカスさんよりは弱いけれど、この世界で最強って認識でいいのかしら？」

「劍の腕だけ見たらな」

いまいちよくわからないけれど、勇者ブレイドはそれほど強いという事なのだろう。

ギヤレンさんが防戦一方なほどだと考えれば、勇者というのは人外なんだと思う。

「ヤムチャ視点ってこう言うのを言うのかしらね？」

「そうかも」

朱莉ちゃんに言われて、私は同意する。

劍で戦う朱莉ちゃんがそう言う認識ならば、私にわからなくても仕方ないのだろう。

ギヤレンさんは劍を受け流しつつ、間合いをとると魔法を詠唱する。

「《ギガントフレイルム》！」

ドゴオと大きな音がして、爆発が起こる。

その爆発を意にも解せず、影が突撃してくる。

「ちっ！」

ギャレンさんは素早く対応する。

だがやはり、対応が若干遅れるのか肌には何本ももの切り傷がついていた。

《そうらそうら！ どうした！》

「ぐっ！」

剣戟はしばらく続いた。

明かにブレイドが勝っているのに、勝負がつかないのはブレイドが手を抜いているからだろう。

剣とか腕とかが私には見えないので、見た感じの判断だけだね。

まるで、ブレイドがギャレンさんを訓練しているようにも見て取れるのは気のせいではないだろう。

とは言っても、完全に私にはついていけない状態なだけけどね。

……

しばらく私たちが壮絶な剣戟を鑑賞していると、ブレイドがこう切り出した。

《さあ、決着をつけようか！ 待たせているギャラリーにも悪いからね》

「くっ！」

ブレイドはそう言うと、剣を構えた。

《さあ、我が奥義で華々しく散るがいい！ 次の勇者に期待するでしょう！》

「うおおおおおおお！！」

《紅蓮鳳凰剣！》

ブレイドの影の剣から炎が吹き出る。

そのまま一気に間合いを詰めると、ギャレンさんを切り刻んだ！

「ギャレンさん！」

私達が悲鳴を上げる。

炎に紛れて何が起こったかわからないが、あの攻撃がやばい事は直感で分かった。

炎が晴れた時に、ギャレンさんとブレイドの影は二人とも剣を構えたまま立っていた。

そして、ガラガラとギャレンさんの鎧が解体されて地面に落ちる。

しかし、実際に倒れたのは、ブレイドの影であった。

「か、間一髪だった……！」

ギャレンさんはそういうと、地面に膝をついた。

《よくぞ我が奥義を攻略した！ 新しい勇者ギャレンよ！》

「はあ……はあ……」

ギャレンさんはそれどころでないほどには怪我をしている。

《Magierize》

《Anf・nger Recovery—Magie—Ferse》

私はヒールのカードをスキャンして、ギャレンさんにかける。

既に試練は乗り越えたのだ、大丈夫だろう。

私がギャレンさんを回復すると同時にブレイドの声が聞こえた。

《では、君達を雨雲の杖の封印場所へと転送しよう》

こうして私たちは光に包まれて、この闘技場を後にしたのだった。

◇

『あれあれ、もう来ちゃったの?』

『面倒くさいなあ、もう来ちゃったの?』

転送先で待っていたのは、《白い双子》であった。

その手には杖が握られている。

「《白い双子》!」

『ぎーンねん。この杖は僕たちが先に手に入れちゃった』

『ぎーンねん。これは私たちのものだよ』

ルーカスさんは戦闘モードになり、剣を構える。

私はカードを構えて、朱莉ちゃんは疲弊したギャレンさんを守るような位置に立つ。

『横から掠め取るとはいい度胸だな、《白い双子》！』

ドンつと音がすると同時に、ルーカスさんは飛び出した。

『残念無念また今度♪』

『いちいち【楔】に経験を積ませるわけにもいかないからね』

『《白い双子》はルーカスさんの攻撃をぬるりぬるりと回避すると、すぐに撤退しようとする。』

私はバインドのカードを使う。

《Magieraize》

《Anf・nger Zur・ckhaltung—Magie— Binden》

発動した瞬間に、魔法陣が出現して拘束具が《白い双子》の片方を拘束しようとする。

しかし、拘束をする事はできなかった。

『そんな弱い魔法に捕まるわけないよ』

『練習不足だね。出直してこーい』

やっぱり、初めて使った魔法だからだろうか？

『それじゃあね、ばいばーい』

『ふふふ、ばいばーい』

まるで遊んでいるかのように全て回避した《白い双子》は虚空に消えてしまった。

『……チクシヨウ！』

重要なアイテム雨雲の杖が奪われてしまった。

彼らは最初からそのつもりだったのだろうか？

ルーカスさんは悔しそうに地面を殴りつけた。

◇

「さすがに、逃げに徹されるとどうしようも無いね」

「そうだな。しかしまさかあいつらがキーアイテムを狙うなんてな……」

ガツカリしているルーカスさんに、私は疑問をぶつけてみることにした。

「ルーカスさん、あの双子って、どうやって移動しているんですか？ 虚空に消えたりす

るって、「シユマリット」の移動と似ているような気がします」

「……ふむ、そうだな。フィリップに聞けば分かるかもしれないが、「シユマリット」と

似たような理屈の何かを使っているのは間違い無いだろうな」

ルーカスさんは難しい顔をする。

「そもそも、「破滅の案内人」の目的もわからないんですよ。世界を破壊する目的がわからないんですよ。《白い闇》は何か明確な目的があって行動しているように見えるんですけれど、《白い双子》の方は愉快犯？ みたいな感じがしますし……」

「……言われてみるとそうだな。昔奴……《白い闇》に聞いたが、『自分たちの目的はこ

の世界の破壊だ』なんて気取った感じで言っていたが……」

それは、おそらく小目標であって、本当の目的を達成するための必要なタスク……個人に与えられたノルマだと私は思った。

つまり、「破滅の案内人」と言う組織の目的を達成するために、構成員に与えられたノルマが各世界の破壊なんだと思う。

「それは、『白い闇』に与えられたノルマなんじゃ無いかな？」

「ノルマ……ねえ……。そう聞くと、あいつらが強大な悪の組織に聞こえるわけだが」

「その例えなら、『シユマリット』はさながらレジスタンスですね」

「間違いでは無いな」

私たちが談笑していると、最上階を漁っていた朱莉ちゃんとギャレンさんが戻ってきた。

「雨雲の杖は取られてしまったが、防具や武器は無事だったぞ」

「結構いっぱいお宝が残っていたみたいね！」

ギャレンさんはその新しい防具を装備していた。

「これはドラゴンスケイルメイル。武器の方はドラゴンバスター、それに、クリスタルソードだな。盾もこのドラゴンスケイルシールドだ。なかなか強そうだろう？」

ぱつと見、小型の竜に見えるような装備である。

ただ、RPG的に考えると次の敵がどんなモンスターなのかわかってしまう。

「次はドラゴンとでも戦うんじゃないのかしら？」

「私も思った！」

朱莉ちゃんも同じことを考えていたらしい。

「そうか？ まあ、わからないがこれでしばらくは戦えるな。他にもアクセサリーなんかもあったが……ユリ、これはお前にあげるよ」

ギャレンさんはそう言うのと、私にアクセサリーを手渡してくれた。

ネットクレスのように見える。

「魔導士のネットクレスと言うらしい。俺よりも魔法の得意なユリが持っていたほうが良いだろうからな」

「あ、ありがとうございます」

デザインとしては、ゴテゴテ感がある。

私の手持ちの服では合わない感じがするので、そこまで嬉しくはなかったけれども、感謝はする。

それにしても、ギャレンさんはどうしてアイテム名がわかるのだろうか？

「なんでこのネットクレスがそんな効果を持つと？」

「ん？ ああ、手にした瞬間にわかるんだよ。そう言うものだろう？」

「……」

この世界の住人は常時発動型の鑑定スキルでも持っているのだろうか？

勇者特有なのかはわからないけれど、まあ、そう言うものならば黙っておいた方がいいだろう。

「ありがとう、ギャレンさん」

「どういたしまして」

今のキャンプ姿ならばデザインとかは気にならないので、首に下げてステータスカードを使うと、確かに魔法攻撃力と魔法防御力の値が上がっていた。

基礎ステータスの後ろに《(＋2)》みたいな感じで書かれている。

「私は戦士の指輪を貰ったわ」

朱莉ちゃんは右手の中指に赤い宝石がハマった指輪を見せてくれた。

「ドライブバーがあれば、遊べそうだけれどね」

お腹に手を当てる朱莉ちゃん。

あの掌が造形されたあのうるさい変身ベルトのことを指しているんだろうか。

「とりあえず、出口の魔法陣を見つけたから、外に出ようぜ」

ギャレンさんの提案に、私たちは同意した。

……

魔法陣に乗ると、一瞬で塔の1階の古代文字が書かれた掲示板前に飛ばされた。

「まあ、雨雲の杖は残念だったが、気にするなよ。な?」

ギャレンさんはルーカスさんの肩を叩いて励ます。

「いや、こちらこそすまない。重要なアイテムを奪われてしまうなんて、俺の失態だ」

「だから気にするなつて。それに、取り返すのは手伝ってくれるんだろう?」

「もちろんだ」

ギャレンさんはニツと笑うと、握手を求めるように手を出した。

「この塔の攻略に付き合ってくれてありがとう。俺だけだったら、最上階についた瞬間に殺されていたからな」

「いや、問題ないさ。お前が世界を救うのを助けるのが仕事だしな」

「まあ、何にしても助かったぜ。ありがとうな」

ギャレンさんとルーカスさんは握手をする。

「ギャレンさんはどうするんですか?」

私が聞くと、答えてくれた。

「そうだな、これから南に進む予定だ。そこに次のアイテムである「太陽の石」があるらしい。それを回収する」

「頑張ってくださいね!」

「ああ、必要ならばまた手伝ってもらおうさ」

ギャレンさんはそう言うのと、真剣な顔に切り替わる。

「おそらく、あの邪悪な双子が出てくるのも、『太陽の石』を手に入れる瞬間だろうからな」

私たちはうなづいた。

「それじゃあな！」

ギャレンさんはそう言うのと再び一人で旅立つ。

雨雲の杖は奪われるのはあつという間だったので、私は《白い双子》が逃げられないような魔法を使えるようにならなきゃなと思ったのだった。

カードセットの中身を確認すると、上級魔法にそう言う結界を張る魔法が存在する。

だけれども、このカードはまだ私には扱うことができなさそうな感じがするのだ。

使えばきつとうまく制御できない拳句に、カードは消滅してしまうだろう。

私自身を鍛える必要があるかと改めて感じたのだった。

14話

ギャレンと別れた私たちは、「シユマリッド」に戻っていた。

談話室に入ると、私たちを出迎えてくれたのは満面の笑みをしたフィリップさんであつた。

『やあ、ルーカス、お嬢さん方。丁度君たちを待つていたんだ！』

そのフィリップさんの笑みに、若干口角を引きつらせつつ、ルーカスさんが答える。

『どうしたんだ、フィリップ。君が待つているなんて嫌な予感しかないんだが』

『ひどいなあ。丁度僕の担当世界を救つて手隙になつたから待つていたというの二！』

ニコニコしながらそう言うフィリップさんは、私の左手を手にとる。

『さあ、ユリ君。あのカードリーダーを見せてくれたまエ！』

「え、あ、はあ……」

私はドン引きしつつも、役に立つならと思つて適当なカードを取り出して、前にかざす。

カードリーダーが出現すると、フィリップさんが早速観察しだした。

『ふむふむ、依然見せてもらった時と若干形が異なるネ。カードをスキャンする部分が

増設されたみたいだね』

「そ、そうなの？」

『僕の記憶力をなめないでほしいネ。ちよつと、そこに座ってもらえるかな？』

フィリップさんが私の手を引つ張つてソファアに座らせる。

その間一度もカードリーダーから目を離さなかつたのはさすがというべきだろうか？

「えーつと、私たちはどうしたらいいのかしら？」

『ああ、アカリ君はルーカスに近接戦闘の方法でも教えてもらつてくれたまエ』

そう言うつと、フィリップさんは白衣の下からアイテムを取り出した。

クリップのついた配線の見える小型の装置みたいなものである。

サイズは手のひらサイズだろうか？

『コイツはルーカス用だね。まア、試作品だからそこまでの機能はないケド、ルーカスの調子を見てよさそうなら、他のメンバーも使えるからネ』

『待て、どういう機能だ？』

『簡単に言うならば、魔力の回復率を向上させる機能だヨ。理が違つと魔力の外気からの吸収による回復率が落ちるからネ。これを使えば自分の世界と同じ程度の魔力回復高率になるはずだヨ』

『なるほど、確かに役に立ちそうだな』

ルーカスさんはそう言うのと納得して装備する。

それにしても、デザインがなんとというか朱莉ちゃんが見せてくれた変身アイテム的な感じがする。

私のカードリーダーもそんなデザインなんだけれどね。

『アカリの方は少し待ってくれたまエ』

「わ、わかったわ」

朱莉ちゃんが了承すると、フィリップさんの視線がカードリーダーに戻る。

『それじゃア、僕はこの装置に集中するヨ』

「私は離れられないみたいだから、ここにいますね」

「わかったわ」

こうして、私はフィリップさんに付き合うことになったのだった。

◇

『フムフム、ここがこうなって……。なるほどネ……』

カシャツカシャツつといろいろカードリーダーをいじり倒すフィリップさん。

さすがに、カードの挿入はしないけれども、カードについても特殊な魔道具で分析をしていた。

『なるほど！ 興味深い……。だが、これで面白い道具を作れそうだよ』

フィリップさんはそう言うと、紙にさらさらと何かを書き込んでいく。

あつという間に、私のカードリーダーを元に新たな道具の設計図を描き上げてしまった。

まるでそれは、仮面ライダーの変身ベルトのように見える。

カードリーダーがバックル部分になっており、カードを挿入してフタをスライドさせる私のカードリーダーと同じ形式のもののようなのだ。

バックルの両端にパイプみたいなものがついている。

ベルトの横にはカードケースがデザインされており、左側には武器をマウントする機構が描かれていた。

『これは、召喚獣の力を抽出し自分の体に『装備』するための道具だよ』

『『装備』？』

『そう！ 力を体にまよって引き出すんだネ。僕が二つ前に救った世界……アーネベルインと言う世界の魔法技術を再現できるのサ！』

『は、はあ……』

興奮して解説するフィリップさんに、私はどうしたものかと困惑する。

だって、だれがどう見ても仮面ライダーの変身ベルトにしか見えないのだから。

『君たちの差異次元のヒーローで例えるならば、戦隊とか魔法少女、仮面ライダーが近いカナ？　そういうものに変身できるベルトだよ』

すると、フィリップさんはまた絵を描き始める。

それは、仮面ライダーとは違う変身ヒーローの姿であった。

女性のシルエットをしており、顔はツインアイのロボットをイメージさせる。

仮面ライダーと言えば複眼だけれども、これはどちらかというところ、オー○マンとかそのあたりのイメージに近い。

朱莉ちゃんに見せたら興奮しそうな感じである。

「いや、うん、こういうアイテムが出てくる時点でそんな展開になりそうな気はしていたけれど……」

私が若干呆れつつ見ていると、ピタリと手が止まる。

『そうだそうだ。作成するには素材が足りないナ。特殊合金のアーティライトはラッシュカーンに行けば購入できるが、制御コアに使う魔導鉱石スターライトはこの世界で採取できるんだったか……』

フィリップさんは顎に手を当てると、人さし指で顎をトントンと叩き始める。

私は展開に追いつけなくて啞然としていた。

『そうだ！　やっぱ取り取ってくるしかないダロウ！　そうとなったら早速出発しよう』

「！」

フィリップさんはそう言うと、紙をくるくるとまとめ、談話室を後にしてしまった。「え、えっ？」

私は嵐のように去っていったフィリップさんをわけのわからないまま、見送ってしまったのだった。

「私は一体どうしたらいいんだろう……？」

私がつぶやくと、それに反応する人がいた。

『フィリップは暴走特急のようなものです。気にしても仕方ありませんわ』

「アイリスさん」

反応したのはアイリスさんであった。

『ここ3日間ほど空けていたみたいですけど、仕事ですの？』

「はい、勇者と一緒に「大嵐の塔」と呼ばれるところを攻略していました」

『そう……。で、どうだったの？ 目的は果たせました？』

「いや、《白い双子》に重要なアイテムを持ち去られてしまって……」

私がそう言うと、アイリスさんは『あの悪辣無垢な連中ね』とつぶやいてため息をついた。

『気を落とさなくても大丈夫ですわ。ルーカスが……幾千の世界を救った大英雄がつい

ているんですもの。最後はちゃんと魔王を討伐できますわ。だから気を落とさないで」
「あ、ありがとうございます」

ルーカスさんはそれほどすごい人なのだ。

そんなルーカスさんが倒せないあの双子とは……【破滅の案内人】とは何者なんだろうか？

『考えていることはわかるわ。あの連中のことよね』

「はい、【破滅の案内人】っていったいどんな組織なんですか？」

アイリスさんは胸の下に腕を組む。

ふと目に入ったけれども、私よりも大きい。

『そうね……ルーカスと《白い闇》はルーカスが自分の世界を救うときに対立した存在だけれども、【破滅の案内人】については活動を始めたのは最近だと聞いているわ』

「そうなんですか？」

『ええ、世界の脅威と言うのは基本的に【外敵による絶滅】、【内紛による自滅】、【歴史の行き詰まりによる消滅】、【進化による改変】があるわ』

「そうなんですか？」

アイリスさんは優雅にうなづく。

『ええ、【外敵による絶滅】は、いわゆるインベーダーや異星人による侵略が主な原因ね』

私の頭の中でそういう映画が存在することを思い起こしていた。

「……隕石による滅亡もあつたりするんですか？」

『ありますわね』

「そういうのって、『シユマリッド』で対応できないんじゃない？」

『ええ、もちろん対応しないわ。そもそも、私が上げた4つの例は『シユマリッド』では

【世界の自死】と呼んで対処しないことになっているのよ』

「世界の自死」……」

なんというか、壮絶な話である。

『内紛による自滅』は、例えばあなたの世界で例えるならば、「かくへいき」と言うもので世界を破壊してしまつて人類が滅亡するつてパターンが該当するわね』

それは何となく想像がつく。

『歴史の行き詰まりによる消滅』は、それ以上の成長を人類が止めたときに起きる事象ね。これには二つのパターンがあつて、前者が何らかの要因でどうしようもない世界になつてしまうパターン。後者が発展しすぎて自分の世界を捨ててしまうパターンがあるわ』

「発展しすぎて……？」

『そう、魔法文明でも科学文明でもそうだけれど、発展しすぎると最終的には自分の世界

を捨ててしまうのよ。そう言う連中はほかの世界に神になるために侵略を開始するわ。だから私たちは彼らのことを神のなりそこない……単に「侵略者」と呼んでいるのですけれどね』

私には想像もつかない話である。

そもそも、私の世界では「異世界」なんていうのはお話の中の世界でしかないのだ。

あえて言うならば他の星とかそういう感じになるけれども……。

『そうなたら、「シユマリッド」の一番になるわ。私たちはこちらに対応しているのよ』
「つまり、「破滅の案内人」って……」

私がそう言うと、アイリスさんは首を横に振る。

『いえ、彼らは違う存在よ。「破滅の案内人」は発展した先の世界の人間では……いえ、人間の形はしているけれど別の何かであると推測されるわ』

あの双子……《白い双子》は確かにそんなイメージがある。

『最後に、「進化による改変」ね。こちらは人類が淘汰されて新しい人類に置き換わってしまったりを指すわ。酷いときは呪いが世界中にあふれてしまい、別のものに挿げ替えられてしまう場合もあるけれど……。この場合は「シユマリッド」が呪いがほかの世界に影響を与えないためにその世界を滅ぼすことになるわ』

「えっ……?!」

『はつきり言うけれど、そういう世界はむしろ滅ぼしてあげるのが世界を救うということよ。……あれはあまりにも救いが無いケースですもの』

アイリスさんは悲しそうにそう断言した。

「アイリスさんは見たことがあるんですか？」

『ええ、人類だったものが怨嗟の声を上げながら、怪物になっていたわ。私はそのおぞましさに何もできませんでしたわ』

「ほかのパターンは？」

『新しい人類として新しい歴史を紡ぐだけね。こちらの方は問題ないとされることが多いわ』

なんとというか、壮大な話である。

『盛大に話がそれたけれども、「破滅の案内人」の話だったわね』

「あ、はい」

アイリスさんは話を戻した。

『【破滅の案内人】は共通して白い服を着ているのが特徴ね』

確かにそうである。

『《白い闇》は白いフードを着た白い髪をした青年である。』

『《白い双子》は白を基調としたゴシックドレスを着ている。もちろん、男性体は若干スー

ツつばいイメージではあるが。

『私たちが確認しているだけでも、『白い闇』、『白い双子』、『白い巨人』、『白い姫』の4体がいるわ』

「確認しているだけでも……?」

『ええ、他にもいるだろうことは観測されているわ』

つまり、あの強大な力……ルーカスさんですら決着をつけられない奴らが4体以上も存在するのだ。

『まあ、活動していると報告されているパターンは少ないから、遭遇したら運が悪い方になりますわね』

「……あの、めっちゃ敵対しているんですけど……」

『ええ、運が悪いですわね。ルーカスがついていて正解ですわ』

突き放したような言い回しではあるが、表情から心配していることがくみ取れる。

この人は本質的には優しい人なんだなと私は思った。

『どちらにしても、『侵略者』と『破滅の案内人』は私たちの敵対勢力だと覚えておくとうよろしいですわ』

「わかりました。お話、ありがとうございます」

私がお礼を言うと、アイリスさんは手をひらひらさせる。

『気にしなくてよろしいですわ。……ルーカスが気にしている子ですもの。庶民であっても仕事仲間。先輩として教育はしっかりとしておく必要がありますわ』
私はその物言いに苦笑いをした。
だって、若干頬が赤く染まっているのだ。

15話

私たちが降り立ったのは、「太陽の石」のある祠の前であつた。

まだギャレンさんは到着しておらず、その為か祠の内部には《白い双子》は居ないようであつた。

この太陽の石が納められている祠は、1フロアしかない簡単な構造で、中央に鍵のついた宝箱が設置されているだけである。

「ここが【太陽の石】が納めてある祠ね」

近くの村で聞き込みをした結果なので間違いはないだろう。

「ギャレンはまだ到着していないが、良かったのか？」

「うん、どうせあの双子は【太陽の石】を狙つてくると思います。だから先に張り込んでおくことにしたんですよ」

「なるほどな。村の連中に聞いたところだと勇者はこちらに向かつているとの情報があ
るからな。あと2日もすれば到着するだろうから、丁度いいかもしれないな」

ルーカスさんが納得したようにそう言うのと、不意に不満の声が聞こえた。

『それやられると、僕たち困るんだけどなあ』

『仕方がない、遊んであげるしかないね。どうしても私たちと遊びたいみだし』

声が届くと同時に、私たちは戦闘の構えに入る。

私はカードをかざしてカードリーダーを出現させる。

ルーカスさんは「限定解除」をして元の装備と能力値に戻す。

朱莉ちゃんは剣を抜いて構える。

「《白い双子》！」

『出たな！ ユリの予想通りだったわけだ！』

まあ、こんなものは少し考えれば自明である。

①、《白い双子》が5回も勇者を襲撃して勇者を殺せなかった結果、次にとつた手が重要アイテムの収集である。

②、重要アイテムは勇者が何らかの行動を起こすことによつて入手が可能である。

③、重要アイテムを入手した際に私たちと戦わなかった。

この3点から推測すれば、《白い双子》が次に狙うのは「太陽の石」であり、ギャレンさんが「太陽の石」を入手する直前でかすめ取ろうとするというのを予測するのは推理ですらなかった。

「予想っていうか、少し考えればわかることなですけれどね。それよりも——」

『ああ、《白い双子》にはここでご退場願おうか！』

ルーカスさんは纏った炎をなびかせながら、『白い双子』に切りかかる。

『《赤い勇者》 邪魔！』

『《赤い勇者》 いつも邪魔！ お邪魔キヤラは【楔】と一緒に始末しなきゃ』

『《白い双子》がそう言うのと彼らを中心に地面に巨大な、黒い瘴気を放つ魔法陣が出現する。』

ベヒーモスとヤマタノオロチ、巨大イノシシだった。

「3体?!」

「でも、やるしかないわ!」

と、朱莉ちゃんが何かに気づいた。

「由利ちゃん、このカードが出っ張ってたんだけど……」

朱莉ちゃんはカードを取り出すと、その絵柄を確認した。

「アレクサンダー……? これって思いつきFFじゃない!」

絵柄を見ると、確かにそうであった。

そもそも、召喚獣を扱うファンタジーゲームの金字塔だけどこれは……。

「お城の召喚獣ね……」

確かに、丁度いいかもしれない。

私は朱莉ちゃんからカードを受け取ると、カードリーダーに挿入する。

《Summonrize》

「アレクサンダー、力を貸して！」

《Summon^{召喚}——Gro^{偉大なる}·Kaiser^帝, Gro^{偉大なる}·Er^征ober^服er^王

——Advent^{降臨せよ} Alexander^{アレキサンダー}》

私の召喚に応じたアレキサンダーが……巨大な城が顕現する。

召喚音声に史実のアレキサンダー大王が混じっていた気がするのは気のせいではないだろう。

《ふははははは！ 勇者よ、よくぞ俺を召喚した！》

尊大な物言いであるが、非常に頼りになりそうであった。

私と朱莉ちゃんはアレキサンダーの城壁の上に乘っている形になる。

「アレキサンダー、あの魔獣たちを倒して！」

《おうともよ！ では、片づけるとしようか！》

アレキサンダーはそう言うのと、城壁から変形する。

それはまるでロボットのようであった。

二足歩行の西洋の城型ロボットに変形すると、背中から赤いマントが出現する。

《行くぞ！ 魔獣ども！》

ズシンズシンと大地がうねり、魔獣三体を相手に戦闘を開始した。

ヤマタノオロチが首を伸ばして噛みついてくる。

《邪魔な首だなヘビ公。ランサーを出せ》

私の手元にカードデッキからカードが飛び出し、手札に加わる。カードをカードリーダーに差し込んで、召喚する。

「ランサートルネード！」

《Angriff rize》

《Lancer Tornado!》

目の前に巨大な激突槍が出現する。

アレキサンダーはそれを手にすると、手元で回転させる。

《おおおおおおおお!》

ヤマタノオロチの首を切り刻み、一本の頭を切り落とす。

と、突進してきた巨大イノシシをアレキサンダーは受け止める。

《元気な猪だな。食ってもまずそうなのが残念だ》

私たちは揺れるアレキサンダーの上で悲鳴を上げていた。

ジェットコースターよりも怖いかもしれない。

不思議と落ちる感じはしないけれども、やっぱり高くて怖いし、動いているのだ。

「きゃあああああ!!」

《しっかり捕まっていたまえ！ はあああああああ!!》

アレキサンダーは巨大イノシシの首根っこをつかむと、ぐるんと回転させる。そのままランスで腹の部分を突き刺す。

《む、しぶといやつめ。まだ生きておるか》

ひっくり返った巨大イノシシを蹴ると、アレキサンダーはベヒーモスの方に駆け出す。

《先ほどから魔法が鬱陶しいな。さっさとつぶれてもらおうか》

「GYA O O O O O O O O O O!!」

ベヒーモスは口から炎を噴出させる。

アレキサンダーはそれをランスを回転させながら払い、一気に間合いを詰めた。

《邪魔だへび公》

横から割り込んできたヤマタノオロチを右手で殴り飛ばす。

そして、ランスでベヒーモスに切り込む。

《ぜあああああああ!!》

「GYA O O O O O O O O O O!!」

ベヒーモスはアレクサンダーによってはずたずたに切り刻まれる。

と、ズガンとアレクサンダーが大きく揺れた。

《ぬお！》

見ると、起き上がった巨大イノシシが突進してきたのだった。

《やるではないか》

少しだけのけぞったアレキサンダーは、体勢を立て直すとイノシシに攻撃を加える。と、他の蛇の頭がアレキサンダーにかみついた。

《ぬう！》

「由利ちゃん！ このカードを使って！」

朱莉ちゃんがカードデッキからカードをドロウしたものを渡してくれた。

うーん、朱莉ちゃんの引きは明らかに変だろう。

まるでカードゲームの主人公の引きのようだ。

朱莉ちゃん式デイスティニードローかな？

そんなことはいい。

「一斉掃射？」

絵柄は、アレキサンダーの体から砲台が出現して発射している姿であった。

私はすぐにカードを読み取らせると、召喚獣カードをスラッシュする。

《Angriff frize》

《Gro•er Sweep!》

《Erstes Blatt! Zweites Stück!! Drittes Stück!!—— Upgrade durchfahren》

カードリーダーから音声がなると同時に、《ふん!》とアレキサンダーは力を入れて吹き飛ばすと、体中から砲身を出現させる。

《よい判断だ、勇者よ!——いくぞ!——一斉掃射!》

ドドドンと轟音が鳴り響き、体中の砲身から砲弾が射出される。

それは巨大イノシシを吹き飛ばし、ヤマタノオロチの首を3つ吹き飛ばしてしまうほどの威力であった。

《うむうむ、なかなか良い砲撃であった》

満足そうなアレキサンダー。

一方私たちはアレキサンダーに乗っているので恐怖しかない。

巨大ロボットの肩に乗るとか意味わからない。

絶対にコクピットがあつた方がいいと改めて思うのであつた。

《では、残りを片づけるとしよう》

手放した激突槍を再び手に取り、既に砲撃で死に体のヤマタノオロチにとどめを刺す。

ちぎれそうだった首をすべて跳ね飛ばしたあと、ベヒーモスにもとどめを刺した。



アレキサンダーが暴れている最中、ルーカスは《白い双子》と戦闘をしていた。身軽な《白い双子》はルーカスの斬撃を容易く回避してしまう。

ルーカスの本気の剣はあまりにも早いので回避することは難しいが、《白い闇》や《白い双子》はそれを容易く回避してしまうのだ。

(これでも相当鍛えてきたんだがな……。こいつらは俺以上ってことかよ！)

既に千年近く戦っており、それでも容易く回避されるといのはルーカスにとっても面白くはなかった。

空中を思い切り蹴る。

高速で蹴るため、空中に足場が一瞬できる。それを蹴って移動するのでルーカスは空中戦を可能としていた。

『しつこい！ 《赤い勇者》嫌い！』

『死んじゃえ！』

《白い双子》は禍々しい短剣と銃を使って攻撃してくる。

女の方が銃撃をしてくるが、ルーカスはジグザグに動くことによつて狙いを正確につけさせなかった。

(この銃弾、禍々しい魔力でできてるな……。魔力量と言い、こいつら魔王か？)

ルーカスは《白い双子》と戦ううちにそう感じるようになっていた。

（《白い闇》は人間……人間の枠にはまった悪そのものつて感じだが、《白い双子》は魔王そのものだな）

ルーカスは《白い双子》を観察しながらそう考察をしていた。

敵の動きは人間離れしているのだ。

《白い闇》は人間の動きであるし、ルーカスも同等のことはできるが、《白い双子》の動きは人間では再現不可能だと思った。

（だからこそ、隙ができる。人間ではなく魔王だと思えば、見た目に騙されなければ……！）

ルーカスは《白い闇》と戦うイメージを捨てて、かつで自分の世界で倒した魔王を思い出して動きを変化させた。

『いい加減死ねよ！』

『死んじやえ死んじやえ！』

無邪気を装う魔王を、ルーカスが追い詰める。

「そこだ!!」

ルーカスの剣が煌めく。

クリティカルではないが、手ごたえを感じた。

男側の《白い双子》の左腕を切り飛ばしていた。

『ぎゃあああああああああああああ!!!』

『私の左腕がああああああああ!!!』

腕からは黒い靄が湧き出ている。

《白い闇》を切ったときは赤い血が出ていたのに対して、この差はルーカスの考察を確信へと至らしめた。

(やはり！ あの体は魔力……瘴気の塊か！ と言うことは、本体は……！)

ルーカスは女側を睨む。

(あつちが本体か！)

《白い双子》は慌てた様子をしているが、瞳はこちらを正確にとらえている。

あの慌てた様子は演技であることはルーカスも理解していた。

「そらよー！」

ルーカスが切りかかると、案の定回避される。

『くすくす』

『くすくすくすくす』

《白い双子》は笑い出した。

『今回はあきらめてあげる』

『私の腕を切り飛ばしたことは褒めてあげる』

ルーカスは《白い双子》を睨む。

「ここで蹴りをつけてやってもいいんだぜ? 《白い双子》……いや、魔王デユミニ!

ルーカスの言葉に、《白い双子》は驚く。

『もうそこまでたどり着いちやっただ』

『さすがは《赤い勇者》かな。侮れないね、悍ましいね。私たちを倒すためだけに人間を辞めた化け物だね』

ルーカスは舌打ちをする。

「やはり、女側の方が饒舌なのも、そっちが本体だったからなんだな」

『くすくす』

『くすくすくすくす』

《白い双子》の顔は悍ましい笑顔で彩られていた。

だが、ルーカスの中では納得していた。

《白い双子》の召喚する魔獣はすべて魔王デユミニが操っていた魔獣そのものだったからだ。

かつて「シユマリッド」の同志が倒し損ねて世界を滅ぼした魔王の一人が魔王デユミニであった。

『それじゃあね、《赤い勇者》』

『せいぜい【楔】を大切にね。くすくすくすくす』

「待ちやがれ！」

ルーカスは《白い双子》にとびかかるが、《白い双子》が虚空に消えるのが一歩早かった。

「あいつら……ほかの世界も滅ぼすつもりかよ……！」

ルーカスの顔は怒りで歪む。

ルーカスにとって世界が魔王によつて滅ぼされることは到底許容できることではなかった。

16話

「おお、ルーカス、ユリ、アカリ！ やはり来ていたんだな」

うれしそうに話す彼の隣には、女の人がいた。

冒険者の格好をしており、相当な美女である。

金髪碧眼で腰まで届く絹糸のような髪を、冒険の邪魔になのかポニーテールにしている。

どこことなく、アイリスさんを彷彿とさせる感じがする。

「ギャレンさん、その女の人は……？」

「ああ、彼女はここに来る道中で助けた女性だ。俺は「ルル」と呼んでいる」

「ルルです。初めまして。ギャレン様からお話は聞いています。よろしくお願いしますね」

なんとというか、囁くように話す人であった。

囁いてるように聞こえるが、はつきりと耳に入る感じである。

「ルルは、暗闇の洞窟の奥地にとらわれていて、ドラゴンが守っている扉の奥に捉えられていたんだ」

朱莉ちゃんが何かに気づいたような表情をした。

「ルルは記憶をなくしていて、身元もわからない感じなんだ」

「なんでルルって呼んでいるんですか?」

「この金でできたドックタグ……削れてほとんどわからないがルルって書いてあることだけがわかったから、仮でルルって呼んでいるんだ」

見せてくれたドックタグ……何かのアクセサリーの一部には魔物の爪で削り取られているような跡がある。

その一部分に確かに「ルル」と書かれているのがわかる。

「ねえねえ、由利ちゃん。彼女ってもしかしてお姫様じゃないの?」

朱莉ちゃんが耳元で囁いてくる。

「お姫様?」

「うん、ドラクエでもそういうイベントってあるじゃない? あれの場合は記憶喪失になんてなつてなかったけれど」

ルーカスさんにルルを紹介するギャレンさん。

なんとというか、ギャレンさんとルルの間には甘い雰囲気がかかっている気がした。

「朱莉ちゃん、伝えない方がいいかもしれないよ」

「……そうかも」

笑いあうギャレンさんとルルの様子はお似合いに見える。

変な情報を伝えて関係を複雑にするのもなんだか悪い気がした。

現状普段の凛々しい感じの……戦士としてのギャレンさんの表情はデレッツデレな感じに歪んでいる。

大丈夫かなあなんて思いつつも、ここまで彼女を無傷で守り通してきたわけなので心配するだけ無駄だろう。

何気にルーカスさんが遠い目をしているのが気になった。

「ギャレンさん、早いところ【太陽の石】を回収しないと」
「おっと、そうだったな」

ギャレンさんは祠の奥に進んでいく。

私はルルさんを見る。

本当にお人形のようにきれいな人である。

こう、なんていうか神々しさすら感じてしまう。

なんでこの人はとらわれていたのだろうか？ その理由が気になってしまう。

「ん？ どうされました？」

私の視線に気づいたのか、ルルさんが反応した。

「いえ、ギャレンさんとは仲がよさそうだなと思ひまして」

「はい！ ギャレン様に助けていただきました。とても頼もしいお方で、私はギャレン様についていきたいと思いました。これでも、回復魔法と聖属性の魔法が使えるんですよ」

頬を赤らめつつそう答えるルルさんは、なんていうか可愛かった。

こう、見ているだけで尊い感じがする。

「ギャレンさんとはどこまで行つたんですか？」

若干興奮気味に朱莉ちゃんが尋ねる。

すると、ルルさんはもじもじしながら答えてくれた。

「その……あ、あまり言いたくないです……」

「この反応！ 絶対ヤつてる！ 昨晚はお楽しみだったよ！ 由利ちゃん！」

「朱莉ちゃん興奮しすぎ！ ああ、ルルさん顔が茹蛸のように真っ赤になっちゃった！」

どうやら、本当にお楽しみだったようだ。

そりやまあ、こんなかわいい人と二人旅なんて私が男だったら手を出さないわけがなかった。

反応も初々しくて可愛らしいし、高校の頃の彼氏との初めてのことを思い起こさせられてこつちまでなんだか恥ずかしくなってくる。

「……はあ、おしゃべりはそこまでにして、ギャレンが戻ってきたぞ」

ルーカスさんに言われて祠の方を見ると、ギャレンさんがまばゆく輝く宝石を手にこつちに來ていた。

「これが【太陽の石】……」

「なんていうか、すごい力を秘めたオレンジ色に輝く宝石って感じね」

私と朱莉ちゃんは感想を言い合う。

魔力を感じ取れるようになった私から見ても、超強大な魔力を内包しているのがわかる。

これと【雨雲の杖】があれば確かに『虹の橋』を架けることができるアイテムを作成できそうだ。

「これで、最後のアイテムである【勇気の印】を手に入れるだけね」

「ああ、【勇気の印】は魔の島よりさらに北にある広大な砂漠のどこかにあるらしい」

「どこか、ねえ……」

朱莉ちゃんがぼそりと「見つけるには王妃の愛が必要だったっけ」なんてつぶやいている。

「その砂漠で探すにしても、ヒントがほしいですね」

私がそう言うと、ギャレンさんはうなづいた。

「ああ、その砂漠の近くには魔物の侵攻に耐えている城塞都市があるそうさ。名前をア

レクサンドリアと言うそうだ」

私の中で城型ロボット「アレキサンダー」が思い浮かぶのは、昨日の戦いが尾を引いているからであつた。

レア度が高い召喚獣は基本的に大きいからなあ。

いや、召喚獣自体が大きかつたね。おかげで戦闘後は大概地形が荒れる。

祠の前も自然が破壊されて大変なことになっている。

「それじゃあ、そのアレクサンドリアを目指すわけね」

「ああ、ルーカスたちもそこに行くんだらう？」

「そうなるな。どちらにしても、『白い双子』は俺が戦う必要があるし、奴も【勇気の印】を狙っているはずだ」

私たちは「シユマリッド」で先行して向かうことになりそうである。

「ここからだと徒歩で4か月はかかりそうだな」

私たちにしてみれば一瞬だったりするんだけれどね。

そう考えると【シユマリッド】は移動チートともいえるだろう。

時間まで移動できてしまうのだから、すごい蒸気機関車である。

まあ、私たちの敵である【破滅の案内人】も同じものを使っているので、同じ土俵で戦っているんだけれどね。

「ギャレンさん、ルルさんと仲良くするのはいいけれど、妊娠はさせないでね！ 次会った時ルルさんが妊婦さんだったら殴るわよ？」

「は、はははははは、な、何のことかなあ？」

白々しいギャレンさん。

私たちは睨みつける。

「ま、仲がいいのは構わないが、必ず守れよ？ それができないならば、王都にでも預けたらいいさ。守るべき人を守れなかった時が一番つらいからな」

ルーカスさんはかなり真剣にそう忠告する。

さすがにルーカスさんの忠告にはギャレンさんはうなづいた。

「あ、ああ。わかってるさ」

こうして、「太陽の石」を入手したギャレンさんたち。

私たちは「シユマリッド」で北の砂漠のある都市アレクサンドリアを目指すことになった。

◇

『4か月ですか。でしたら3週間ほど移動に時間がかかりますね』

「うわっ！ びっくりした！」

ギャレンさんと別れた直後に後ろから声が聞こえた。

びっくりして振り返ると、ウーヴェさんが立っていた。

「まあ、そうだよな。それだけ時間がかかるか」

ルーカスさんが納得したようにそう言うと、ウーヴェさんは首を横に振る。

『いえ、単に時間を移動するだけならば、10分ほどでたどり着きます。ただ、他の世界を救う兼ね合いもありますのでお時間をいただければと思います』

「どういふことだ？」

ルーカスさんがむつかしい顔をする。

『【シユマリッド】クルーが観測した世界の時間が不可逆になるというのは、ルーカス様にはお伝えいたしていますね？』

「ああ」

「どういふことだろうか？」

私が疑問に思っていると、ウーヴェさんが丁寧に解説してくれる。

『ユリ様、アカリ様、【タイムパラドクス】はご存知ですね？』

「あ、はい。それは知っています」

『【シユマリッド】には、それを防ぐための機構が搭載されております。我々が干渉した事実を世界に記録する機構でございます』

「なんとなく言いたいことは理解できる。」

『この機構により、我々が介入した期間以前の時間遡行は不可能になります。これは「破壊の案内人」に代表される「侵略者」が遡行を行い過去に干渉することを防ぐ機能を果たしております』

「なるほど、過去の私たちに対して私たちを倒せるだけの戦力なんかをもつて倒してしまえば、今の私たちは消えちゃうもんね」

『はい、おっしゃる通りでございます』

朱莉ちゃんも納得したようだった。

『また、世界に流れる時間と言うのも各世界によって異なっております。この世界では一日が……ユリ様方にわかりやすい単位でいうならば23・18時間ですが、他の世界では一日の時間が18時間のところもございます』

世界によって理が異なるということは、そういうことなのだろう。

『そのため、派遣したクルーを回収する際もタイムミングを合わせる必要があります』

「その帳尻が合うのが3週間と言うことか」

『はい』

それは、ちょっと長い休みになりそうであった。

まあ、4か月待つよりは良いだろうけれどもね。

「それはわかりました。それじゃあ、私たちは3週間【シユマリッド】で待機つてことで

すか?」

『いいえ』

ウーヴェさんは首を横に振った。

『【シユマリッド】ではなく、元の世界で待機をしていただきます。ユリ様の世界の時間でいえば、1週間ほどの時間が帳尻が合いますので、その間休暇とさせていただきます。もちろん、これまでの活躍による報酬を先にお支払いいたしますよ』

「は、はあ……」

「え、元の世界に戻るの?!」

『はい。1週間経ちましたら、ユリ様とアカリ様をお迎えに上がります』

なんと言うか、急に休みをもらった感じがしてびっくりしていた。

「やったね! 由利ちゃん!」

「う、うん……」

と言つても、1週間なんて何をすればいいんだろう?

夏休みになったばかりだったし、なんだかんだでこっちの方が忙しかったため、特にすることが思いつかない私であった。

◇

私たちは元の世界に戻ってきた。

あの日の襲撃から1日経った時間のそれぞれの家の前に下された。

私は部屋の鍵を開けて部屋に入ると、変わらない私の部屋が待っていた。

「……ただいま」

何というか、非常に濃い1ヶ月間だった。

もちろん、体感時間だけでも。

何だか疲れが一気に押し寄せてきた気がして、私はベッドによくくなって倒れる。と、携帯がポコポコ音が鳴る。

「ん？」

見ると、LINEの通知と留守番電話の通知とメールの通知が大量に届いていた。

「わわっ！ すごい通知の量！」

私がスマホを操作すると、120件近くの通知が溜まっていた。

「あー、そうよね、そりゃ心配するわよね」

友達からのメッセージを見て納得する。

私と朱莉ちゃんが謎の火災に巻き込まれて行方不明になっていると騒がれているのだ。

「あー、お父さんからもきてる」

私が1ヶ月間異世界を救っている間、みんなが心配してくれたんだなと思うと何だか

嬉しくて、安心した。

私は早速、お父さんに電話をかける。

ワンコールで出てくれた。

「あ、お父さん？」

怒鳴りつける勢いで心配してくれるお父さんに、何だか嬉しくて涙が出てくる。

「うん、友達も無事だったよ！ うん、うんうん」

泣き声のお父さんに、ついもらい泣きしてしまう。

「ごめんさい、心配かけて」

私の帰宅1日目はそんな感じで心配する両親や友達への対応に追われたのであった。

それは朱莉ちゃんも同様だったらしい。

実家暮らしだったから、余計に心配かけたんだろうなと思った。

17話

結局、私は1週間の間大学の友達と普通に遊んでいた。

アルバイトをしたり、友達とカラオケに行つて飲みに行つて、こつちの世界では1日だけでも私の感覚では1月の間の学生らしさを取り戻すために、積極的に遊んでいたと思う。

まあ、待機している間にもたまたま「シユマリッド」を呼び出して、朱莉ちゃんと一緒に新しい召喚獣との契約を結んだりもしてはいたけれど、基本的にはかの友達と遊ぶことがメインだったと思う。

心の余裕もできて、久しぶりにイラストを描いたりもしていた。

異世界なんて、インスピレーションの塊だしね。

そして、1週間。

私と朱莉ちゃんは合流して「シユマリッド」のカードを使って呼び出した。

すると、例の汽笛が鳴り響き乗車口が出現する。

気づけば、これで驚かなくなつてしまったものである。

「じゃあ、行こうか朱莉ちゃん」

「ええ、英気は十分養ったわ」

「確か、北の砂漠で『勇気の印』を探すところからだったわよね」

「そうそう、確かそんな話だったわね」

私たちが「シユマリッド」に乗車すると、扉が閉まり出発する。

ちよくちよく来ていたので別に懐かしいとかそういうのは無いんだけどね。

談話室に入ると、ルーカスさんが居た。

アイリスさんと一緒にいるけれど、私たちの姿を見ると手を振ってくれた。

『お、ユリにアカリじゃないか。そうか、もう3週間経ったんだな』

ちなみに、ルーカスさんは暇をしていたわけではなく、他のメンバーのサポートを行っていたらしい。

ルーカスさんは強いから仕方ないだろう。

「ええ、そろそろギャレンさんもアレキサンドリアに到着しているころですね」

『ごつちもモニターしていましたわ。デイグラットの勇者は順調に旅を続けていたようですわね』

それにしても、『白い双子』は何故自分自身で勇者を殺そうとしないのだろうか？

私は疑問に思った。

「順調に……ねえ。ギャレンさんがルルさんを孕ませてなければいいけれど……」

朱莉ちゃんはそのちの方が気になるらしい。

異世界で……しかも、中世ヨーロッパみたいところで避妊具が開発されているかも怪しい世界だからね。

それに、英雄色を好むって言うし、やってればその結果が返ってきてしまうだろう。『それは会いに行ってみればわかることだ』

確かにそうだなと思う。

『ま、まあ、お姫様は自分だけの騎士にあこがれるものですものね。特にピンチを助けられたのならば、吊り橋効果で勇者様に惚れてしまうのは仕方のないことですわ』

アイリスさんの言う通り、ルルさんはギャレンさんに惚れているように見える。

「とりあえず、行ってみましょ。それが一番早いわ」

「契約の時に情報収集はしていたけれど、特に大きなうわさは聞いてませんからね」

と、そんな感じでルーカスさんと合流して「デイグラット」に向かったのであった。

◇

なんとと言うか、暑かった。

そりやまあ、砂漠だから仕方ないんだけど、とにかく暑かった。

アレクサンドリアはオアシスを中心に発展した城塞都市で、王都よりも発展している感じがする。

イメージはエジプトの大都市と言った感じだ。

「こりや、砂漠用の装備は購入した方がよさそうだな」

ルーカスさんの提案に乗る私たち。

そうじゃないととても暑くて普通に活動できそうになかった。

私たちは砂漠用の衣装や道具を購入して早速装備する。

影の部分が多くなり、元の私服に比べてだいぶ快適になった。

「それにしても、砂漠地帯は雲が覆っていないのね」

朱莉ちゃんの指摘に私は空を見る。

雲一つないカンカン照りの空模様である。

遠くを見れば黒い雲が覆っているというにもかかわらず、ここだけ雲が覆っていないのだ。

「それが問題なんですよ」

店主さんがそう答える。

「砂漠だとしても、雨が降る日もある。けれども魔王が出現してからはまるで雨が降らないんですよ。近くの河……恵みのライルもだんだん干上がって臭いにおいを放っているし、だれかどうにかしてほしいものですわ」

恵みのライルとは、この都市のそばを流れている大きい河のことであろう。

私たちが確認をしに行くと、確かにだいぶ干上がっている。

このままでは数年以内にこの河は完全に干上がってしまうだろうことがわかる。

「砂漠の河ってナイル川とかもそうなんだけど生活用水で下水なんかも混ざっているから臭いのよね」

「確かに……近寄りたくないにおいをはなっているかも……」

なんとなく、本来だったら【雨雲の杖】なんかでこの事態を解決するのかななんて思っただけでも、【雨雲の杖】は《白い双子》が持ち去って行方不明である。

どちらにしても、ギャレンさんが……勇者が解決する案件なんだろうなとは思った。しばらく情報収集をしていると、勇者の活躍と言うのは嫌でも耳に入る。

曰く、行方不明だったお姫様を見つけた（ルルさんかな?）。

曰く、魔物に支配された街を解放した。

曰く、魔物にさらわれていた人たちを救い出した。

誇張された内容もあるかもしれないけれども、それでも人々を勇気づける内容の噂だった。

「噂の伝達具合から、次はこの町を勇者が救ってくれるに違いないという期待が高いことが分かったな」

「そうですね。……皆さん自分たちで解決しようとは思わないんですね」

私が呆れたようにそう言うと、ルーカスさんは首を横に振る。

「最初は自分たちで解決しようとするさ。だが、どの世界もほとんどは自分たちに太刀打ちできない魔物のボスが出てくる。だから、勇者に……最後の手段、最後の希望に託すしかないのさ」

「そんなものかしら？」

「ああ、俺が仕入れた情報だが、どうやら冒険者を雇って、恵みのライルの水源調査に向かったようだ。結果、冒険者は皆殺しにされて、都市長だけが戻ってきたらしいがな」
まあ、普通に考えれば対処しようとするのは当たり前である。

それから抜本的対策を何一つやっていないのは、都市長が魔物とすげ変わっているからだろうか？

私がルーカスさんを見ると、うなづいた。

「ああ、都市長が魔物と入れ替わっている話については調べている。十中八九間違いないだろうな」

「やっぱり……普通に考えたらそうなりますよね」

「ああ。都市長を調べていたら、魔物に襲われたから間違いないだろう」
なかなかアレクサンドリアも大変なことになっているようであった。

「で、肝心のギャレンさんは？」

朱莉ちゃんが尋ねると、ルーカスさんは小型のレーダーを取り出した。

「どうやら、勇者の位置がわかるらしい。」

「……今日中には到着するだろう。何なら入り口に迎えに行くかい？ 今頃魔物と操ら

れた兵士が勇者をお出迎えする準備をしているはずだ」

「え、それって止めない？」

私たちは急いで街の入り口に走り出す。

「まあ、そう言うだろうなとは思っていたさ」

ルーカスさんはうれしそうな表情をしながら、私たちの後をついてきた。

◇

私たちが入り口にたどり着くと、丁度ギャレンさんが魔物と戦っている最中であつた。

そばにルルさんが居ない。

「せいやあああああああ！」

ギャレンさんが剣で魔物を切り伏せる。

砂漠用マントの隙間からギャレンさんの装備している鎧が見えるが、まさに勇者然とした鎧を装備しているように見えた。

「加勢するわよ！」

「うん！」

「俺も加勢しよう」

朱莉ちゃんとルーカスさんが剣を構える。

私はすぐに支援魔法を使って朱莉ちゃんとルーカスさんの強化を行う。

朱莉ちゃんは魔物を、ルーカスさんは人間を倒していく。

「お前ら！」

「助けに来た」

「そうか、助かる！」

私たちが魔物を討伐し、人間を気絶させ終わると、入口にギャラリーが集まっていた。

「ゆ……勇者様でしょうか……？」

「ああ、そう言われてはいるがどうしたんだ？」

代表のような雰囲気をした男性がギャレンさんに話しかける。

「どうか、街をお救いください！」

男性が懇願するようにそういうと、ギャレンさんは真剣な顔をしてこう答えた。

「詳しく話を聞こうか。ここじゃ目立つから酒場にも行こうか」

「では、お連れの方も！ 一緒に！」

私たちも同行することになったのは言うまでもなかった。

◇

私たちが案内されたのは、「シユマリッド」の乗車口が出現しそうな建物と建物の間である街の裏側であった。

その奥の、詳しい人でないと迷ってたどり着けないような場所にレジスタンスの秘密基地の入り口があった。

ギャレンさんに理由を説明する街の人たち。

まあ、簡単に言えば、私たちが集めた情報とそんなに差異はなかった感じであった。旅人であった私たちにも協力させるつもりだったのだろうか？

「……なるほどな。それで、俺たちにその都市長が魔物にすり替わっていないかの確認と、すり替わっている場合の討伐・そうでない場合は問い詰めてほしいということだな」
「はい。ご理解いただけで幸いです」

「だが、それをどうやって確かめるんだ？　都市長に直接面会はできなさそうに感じるが……」

ギャレンさんの言葉に、全員が困った表情をする。

「都市長の家や議会議場は現在、誰も入ることができないのです。警備が厳重で、警備員が交代で見張っており、それはもうアリの子一匹すら通す気はないという感じなのです」

「……それほど厳重ならば、先に川の上流に向かった方が良くもしいかな」

「は、はあ……」

街人達は、それがどうつながるのかが今ひとつわかっていない感じだ。

「とにかく、この町は河の流れが止まるのが一番困っていることだろう？ 先にそちらを解決できれば、解決することが困る連中を引き釣り出せるかもしれないからな。そっちの方を優先しよう」

「え、わ、わかりました。勇者様のおっしゃるとおりにしましょう」

ギヤレンさんはそう言うと、ルーカスさんを見る。

「ルーカス、大丈夫だとは思いが念のために、この町の連中を守ってくれないか？」
「それは構わない」

「あと、ユリとアカリを連れていく。大丈夫だろうか？」

「わかったわ」

「わかりました」

私たちはうなづいた。

ぶつちやけ、どつちが残っても問題ないだろう。

《白い双子》が出てくる恐れはあるけれども、出てきた場合は逃げればいいだけである。ただ、私の直感ではあるがこの件に「破滅の案内人」は絡んでいない気がしていた。

「それじゃあ、出発しよう」

私たちはそれぞれ分かれて行動を開始した。

◇

砂漠は暑かったが、ちゃんと準備をして横断したので、そこまで苦勞することはなかった。

初めての砂漠の横断だったけれども、水と日差し対策さえ万全ならば、ガイドをしてくれる人たちもいたので安全に横断できたのだ。

もちろん、道中の魔物はギャレンさんと私たちで対処する。

しばらく進んでいくと、川の源流につながる洞窟まで到着したのだった。

「ここが、恵みのライルの源流につながる洞窟です」

洞窟からの河の水は、あまり流れ出ていない。

跡を見ればかなりの水量があったことがわかるけれども、今はその半分も流れていなかった。

ここから流れ出ている川の水は綺麗で澄んでいるように見える。

「雨量が減ったから流れてないようにも見えるけど……」

「実際どうなっているかはわかりません。我々はこの先に進んだことがありませんので

……」

「なら、その調査も込みでやろう。行くぞ！」

私たちは洞窟の中に入る。

しばらく進んでいくと、強そうな魔物が出現した。

翼の生えた悪魔みたいな見た目の魔物で、こちらの言葉を理解しているようであった。

「勇者が来タゾ！」

「愚カナ勇者が来タゾ！」

ギャレンさんは剣を抜く。

「やはり魔王の手先か。ならば押し通る！」

ギャレンさんは手慣れたように戦闘に入る。

「ギャレンさん、話を通じるなら……」

「聞いても無駄だ！ こいつらは操り人形みたいなものだからな！」

魔物を切り伏せながら、ギャレンさんは答える。

それならばと、私もカードをドローして、魔法の攻撃を放つ。

朱莉ちゃんも、剣を抜いて戦いに参加する。

戦闘はあつけなく終了する。

ギャレンさんは剣を収めながらこちらに向き直る。

「この水不足は意図がわからないが魔王の指示のようだな。この事態を操っている魔物

は強いから、心しておけよ」

「そうなんだ」

「ああ、こういう事態にはここに向かう道中で何度も経験したからな。あいつら……俺はスモールデーモンと呼んでいるんだが、出てくるならば間違いないだろう」

「ひええええ」

ついてきている人たちが恐怖で震える。

「お前らもついて来いよ。待機しても魔物に殺されるだけだからな」

「は、はいいいい」

「アカリ、連中をしつかり守ってくれよ」

「任せてもらっていいわ」

そんな感じで私たちは洞窟を攻略していく。

いわゆる、ゲーム的なぞ解きは存在するのだけれど、ギャレンさんが容易く攻略していくので、私たちの出番は手数が足りないときのお手伝い程度だった。

肉体労働がほとんどなので、なぞ解きはそこまで楽しいとは思わない。

道中で出てくる魔物とも戦わないといけないので、めんどろ臭い手間が増えるだけであった。

そして、一番奥の水源まで到着した。

道中で森の中に突入し、いくつか水源が分岐していて、何本も水流がなくなっていたので、封印されてしまっていると思われるが、ギャレンさん曰く、

「先に大物……一番主流の水源の封印を解いてしまうのが一番だろう。そこに大物もいるだろうしな」

と言うことであつた。

そして、ギャレンさんの推測通り奥には強そうな魔物と、頭のキレそうな魔物が待ち構えていたのだつた。